
とある科学の空間移動能力者（テレポーター）

カマンドール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の空間移動能力者^{テレポーター}

【Nコード】

N24770

【作者名】

カマンドール

【あらすじ】

とある科学の超電磁砲の二次創作です！

基本恋愛&コメディでいきたいと思います！

白井黒子ちゃんが大好きです。

そんな黒子ちゃんにあのツンツン頭とのまさかのフラグを立てさせたいと思いますっ！！（黒子ファンの皆様お許し下さいっ！）

はじめての作品で見苦しいかもしれませんが、是非ツ！暖かい目
で見て下さい！

序章（前書き）

初めての投稿作品です！

初心者なので気軽に感想、アドバイス等お願いします！
（＊＾Ｏ＾＊）

序章

『学園都市』

東京都西部を切り拓いて作られたこの都市では…

「超能力開発」が学校のカリキュラムに組み込まれており、230万人の人口の八割を占める学生達が日々『頭の開発』に取り組んでいる

「ハアハア…何なんだよアレは！」

息を切らしながらも全速力で逃げる不良少年。

「アレとは…もしかして、わたくしの事ですか？」

「え？」

ゴッ…！！

男の真上から突然少女が現れ、後頭部に強烈なケリをかます。

「ぐエッ」

「『ジャッジメント風紀委員』ですの。暴行未遂及び、ひったくりの現行犯で拘束しますの」

このツインテールの少女は、学園都市第177支部

『ジャッジメント風紀委員』
しらい白井 くろこ黒子である

「おとなしく観念してくださいな
さもないと腕をヘシ折りますわよ？」

天使のような微笑みを浮かべ、まったく笑えないセリフを吐く少女に男は抵抗できなかった。いや する勇気がでなかった

その後、犯人を「警備員」^{アンチスキル}に連行し、白井黒子は足早にある場所に向かった…

『風紀委員活動第177支部』…

「ふう…

どれだけ科学が発展しても、罪を犯す輩は後をたちませんの」

トントンッ！

毎度毎度のことながら、と呆れた顔で報告書をまとめる。

「おつかれさまです
白井さん！」

この花飾りをアタマにつけた可愛らしい少女は、黒子と同じ第17
7支部の風紀委員…

^{ういはる}初春 ^{かざり}飾利である。

黒子の良きパートナーであり、オペレーターとしての働きは風紀委員の中でも群を抜いている。

「では初春っ！

仕事も終わりましたし、早くいきますわよ！」

バンッ！

とデスクを叩きながら、勢いよく扉に向かう黒子。

「ああっ！ちよっと、まってくださいよ」

置いてきますわよ」と、足早にふたりが向かった先は、今学生の間で行き着けの場になっている。

「joseph's」というファミレスである。

カランカランッ

勢いよく黒子が店内に乗り込み、続けてハアハアッと大きく息を切らしながら、初春が店内に入ってきた。

「あ……、ふたりともお疲れ様」

なにやら不機嫌そうなこの少女は、学園都市が誇る230万人の頂点。

7人のレベル5の第3位『レールガン超電磁砲』こと
みさか御坂 みこと美琴である。

「あの馬鹿………毎度毎度逃げばかりで……一体どういっつもりのよっ！」

不機嫌の理由は大体想像がつく……

「あつ……あの……み、御坂さ……」

「お……お姉様っ！！何をそんなにお考えになられて……？
相談とあらばいつでも黒子お相手になりますわっ！」

ウフフフフ……でも想いふてっっているお姉様も……又フツ又フフウ……ステキですよー！！」

満面の笑みを浮かべながら、黒子は御坂の膝の上にテレポートしてきた。

「ちよっ！黒子っ！！」

「ああ～お姉様お姉様！！」

やっとお会い出来ましたわあ～！黒子は…黒子はっ！！早く会いたくて、いてもたってもいられませんでしたの～」

「ええい！うっとおしい！早く離れなさいこの変態があ～！！」

余りにうっとおしかったのか、御坂の電撃が炸裂する。

「あっッッ！！」

ハハッ…と苦笑い気味の表情を浮かべる初春だったが、あることに気付く。

「あれ？」

そういえば佐天さんは？」

キョロキョロと周りを見渡していると、なにやら怪しい人影が初春の背後に歩み寄る。

「うっいはるるん!!」

バサア!

と勢いよく初春のスカートがめくれる。

当然、周りにいた男子生徒達の注目の的になった。

「おっ!

今日は淡いピンクの水玉かー」

「?…ッ!」

さ…佐天さんっ!何すんですか!めくらないでくださいっ!」

あうつあうつ、と顔を真っ赤にしてスカートを抑える初春をよそに
佐天は…

「あーや」

私がトイレに行っている間にふたりとも来ちゃったんだあ」

何事も無かったかの様に席に着く佐天に、初春は頬をプクッ!と
膨らませ少々怒っている。

一方、御坂に抱きついたはずの黒子は、床に黒コゲになって倒れて
いた。

「はあ…っ!」

全く、変態には抱き付かれるわっ、あの馬鹿は逃げ回ってばっかで
勝負しないわ…ジュース飲もうとしても『きなこ練乳』しかでない
わッ!」

今日は本当に不幸だわ…」

佐天・初春（うわぁ…今日はいつも以上に立腹だなぁ）

あんま近づかないようにしよう。

そんな事を考えるふたりをよそに、黒子がピクリとある言葉に反応する。

…。

「『不幸』…ですの？」

「ふえっ？」

「何やら聞き覚えのある台詞ですわね
…ハッ！

…まさかお姉様！
あの類人猿にまあ何かさせられたんですの？」

「いや…そういうわけじゃ」

「あぁんのウニ頭のド畜生があああああっっ!!」

「ちよっ!

白井さんっ落ち着いて!」

ガンガンガンガンッ!

自分の頭を物凄いスピードでテーブルに打ち続ける親友…

初春もこのような親友を持ってしまい大変お気の毒である。

「ん〜?ところで前々からよく名前が出てくるその類人猿さんって、御坂さんの好きな人なんですか〜?」

佐天の超どストレートな質問に、一瞬で周囲の空気が凍りつく。

「なななな何で私がアイツのことなんかっ!!」

カア~~~~ツと、頬が真っ赤になる御坂。

「だって誰がどうみてもそう思っちゃいますよ〜。
毎回毎回その人の話をされれば…（ていうか自覚ナシ!?!）」

「でも私も御坂さんの好きな人って興味があります！
（とうか会ってみたい!?!）」

「御坂さんっ！是非今度紹介してください。」

「ちょっふたり共っ!!私とアイツはそんなじゃ無いから!!」

なに言ってるのよっ!と、今時の中学生らしい会話をする3人をよそに、体中から負のオーラを撒き散らす一人の人物が、ポツリと小

さく眩やいた。

黒子「ウフ…ウフフ…まったく笑えませんの…。
ヌフフフ…ウうえっへっへっへ…キィ…ヒツヒツヒ…!!」

明らかな変人オーラを放つ彼女に、周りの友人達は自然と一步後退していた。

「く…黒子？」

佐天・初春（な…なんかいきなり過ぎて怖いんですけど!？）

「ウフフフ…あのハエのようにお姉様に纏わりつくクソ虫が…その自慢のウニ頭に飾りとして鉄矢をぶち込んでやろうかしら？それとも張りつけにしてダーツの的にでもして…」

「ああゝっ!!」

なんかもう完全下校時刻みたいですよ！（汗）
早く帰らないと不味いんじゃないかな？」

「そ…そ…ですなっ！私も風紀委員として見過ごせませんっ！（汗）
ねっ白井さんっ！！」

空気を讀んだ佐天と初春。

「むっ……それは仕方ありませんの…
（あの疫病神め…いつか必ず成敗して差し上げますのッ！！）」

しかし、この時の彼女はまだ知らなかった…
まさか自分が異性に想いを寄せる日がやって来ようとは…

第1話

ここは学園都市…

人口230万人のうち学生が八割を占めている。

外部より数年以上発展したこの街でも、犯罪を犯す人間は減ることはない。

「ハア…ハアツ！……へへ、よし振り切ったか？」

人通りの少ない路地を走り抜けていく少年、なにやら高級そうなバツクを手を持ち、周囲を見渡している。

と…その時

バキィッ！

突然壁に鉄矢が突き刺さり、少年は声を上げ後ろに倒れ込む。

「ひいっ！」

突然の事に驚いた少年は尻餅をつき…呆然としながら突き刺さった鉄矢を見つめている。

「『風紀委員』ですの！窃盗の罪で拘束しますの！！
まったく、手間を取らせないでくださいましっ！」

……………

風紀委員活動第177支部にて…

「ハアッ…

今日は一体これで何件目ですの？いくら何でも多すぎますの〜」

あまりに過激な出勤要請に少々疲れ気味である。

「そうですね ……今日に限って何でこんなに…」

プルプルッ！

これは携帯と言えるのか…黒子の近未来チックな携帯が鳴りだした。

「はいですの…」

わかりました。すぐに向かいますの」

「…またですか？」

「ほんと今日は大忙しですわねっ」

ふうっと、ため息混じりで黒子は言う。

どうやら今日はいつも以上に犯罪者が出没するらしい。

「では初春、行って参りますの」

「あっ白井さんっ！気をつけてくださいねー」

……

…それから数時間後のとある公園にて…

「はあっ…

終わっただけと思ったら、それから続けざまに4件も事件が発生するとは……本当に忙しい1日ですのっ!!」

帰り道の公園でブツブツ文句をたれる風紀委員。

すると前方に小学校低学年の子共達が、何やら集まって木の上を見上げている。

「? 何の騒ぎですか?」

女の子「ねえ…だいじょうぶかな?」

男の子「お兄ちゃんっ！がんばってー！」

子供達が何やら不安そうに上を見上げていた。

「…こんな時間まで一体何をしているんですの？子供は帰る時間ですのよ？」

黒子がそう言つと子供達は一斉に木の上を指差し、黒子に助けを求めた。

「……？…はい？」

上を見上げると黒い子猫がブルブル足を震わせて怯えている。

…どうやら降りられなくなってしまったようだ…。

よく見ると、高校生位だろうか…一人の少年が木の上を登っている。

「よぉ〜し…」

そのまま動くなよ〜ジツとしてて下さいよ〜」

木の枝を伝ってゆつくりと子猫に近づく少年。
どうやら子猫を助けようとしているようだ。

（あの特徴的なツンツンアタマは…）

「よ〜しっ！あともう少し！」

そう言っただけ少年が子猫に手を伸ばそうとした次の瞬間…。

シュンッ！

突然少年の目の前に少女が現れると、枝に乗っていた子猫を抱いて
すぐさま少年の前から消えてしまった…。

一瞬枝に体重が乗ったことで大きく揺らぎ、その反動で少年は地面
に叩きつけられてしまう。

「ぐふっ！……」

後頭部を抑え、のたうち回る少年。

そんな不幸な少年をよそに能力を間近でみた子供達は、大はしゃぎで黒子の周りに集まって来た。

男の子「うわゝすげー！テレポーターだゝ」

女の子「常盤台のお姉ちゃん、ありがとー！」

胸の中で暴れる子猫を地面に下ろし、子供達に顔を向けて黒子が話した。

「さあさ、用が済みましたらお家に帰んなさいですの」

子供達「はあゝい！」

そう言って元気な声で帰路にたつ子供達を、黒子は一人一人に手を

振る。

この時残念な事に、子猫を助けに向かった少年はすっかり忘れていた。

「痛ッ！…くそう、不幸だ…」

紹介しよう。

この「不幸、不幸」と嘆く少年は、普通の高校に通う高校一年生、
かみじょう上条 としま当麻である。

特徴であるツンツン頭と、彼の右手に宿る、ありとあらゆる異能の能力を打ち消す「幻想殺し（イマジンプレイカー）」を武器に、これまで数多くの修羅場をくぐり抜けて来た。

「あら？ご機嫌うるわしゅう殿方様…相変わらず人助けがご趣味の様ですね」

「ん？……たしか…白黒？」

「白井黒子ですのっ！！ちょっと！ワザと言っておりません！？」

「ふうっ」

まあネコも無事救出できた事だし、めでたしめで……」

「は・な・し・を聞けっ！ですのっ！！！」

込み上がる怒りを込め、手に持っていた鉄矢を当麻の顔面投げつけた。

「うおおっ！！危ねえっ！」

なんとか間一髪のところでかわす当麻。

「ふんっ！名前もろくに覚えられないとは、流石はお猿さんと言ったところですよ！」

「危ねえな！いきなり何すんだ白井っ！」

年上として説教してやろうとした当麻であつたが…

「んふふフフふふ…」

汚らしい類人猿があ！ここで会つたが100年目っ！！お姉様への数々の狼藉い！その身をもつて償わせて差し上げますわッ！！」

…どうやら彼には新たななる試練が訪れたようだ…

「あ…あの…白井さん！？そ…その、人を簡単に殺せそうな負の才ーラが、なんか上条さんに向かっている気がするんですが？
ち…ちよつと待って！」

「死ねえ！ですのぉーっ！」

上条の真後ろにテレポートした黒子は死角からハイキックをかます！

「うおあっ！」

しかし、これぞ上条当麻！
ものの見事にこれをもかわす。

「ッ！！流石は野蛮な類人猿…野生の勘がよく働きますの！」

「はあはあ…
つてか、いきなり何すんだよっ！！上条さんはネコを助けただけなんですけどお！」

いきなりの展開について行けない上条さん。

「ちっ…しぶといですわね…しょうがない、一発くらい体に風穴開いても問題ないですわね…」

話し聞けよっ！そうツツコミたかった当麻だった。

不敵な笑みをうかべ、ホルダーから鉄矢を取り出そうとしたその時…

「オイ…その二人」

黒子・当麻「？」

いかにも不良といった少年が、ふたりに声をかけてきた。
見た所、どうやらこの少年は『スキルアウト武装無能力集団』のようだ。

「俺のバイクに《釘》投げつけてきた奴どいつだ？」

そう言って指を指した先には、大型の高そうなバイクが置いてあった…

更に男が言っていた《釘》の様な物とは、言うまでもなく黒子の鉄矢である。

「……。（何やら面倒くそ）なのに引つかかってしまいましたの……。」

（不幸だ……嫌な予感しかない……。（泣き））

第2話

「テメエら…覚悟出来てんだろうな!」

いかにも不良です!と言わんばかりのこの青年…

前回の話で、彼のバイクを《釘（鉄矢）》によって傷をつけてしまった黒子達。

男はズカズカと黒子達のそばまで近づいてくる。

額の血管はピクピクと浮き出し、男の怒りは頂点に達していた。

「あら?どこにそんな証拠があるんですの?言いがかりは止して下さいまし」

「ちよっ…お前!そんな挑発的な言い方したら…」

ガシッ!!

男が黒子の腕を掴む

「ッ!？」

「オイ舐めんなよ女あ…あのバイクいくらすと思ってんだ？」

男はポケットからナイフを取出すと、黒子の顔に突きつけてきた。

「……銃刀法違反……現行犯で拘束しますの……」

黒子が小声で呟く…

流石にイラッときたのか、能力を使おうと思ったその時…

グイッ

「ちょっと待てよ！いくらなんでも、中学生の女の子相手にそれはないだろ」

当麻は黒子の肩に手を取ると、自分の胸に近づけ不良の男を睨んだ。

ドキッ

（い…いきなり何をしてるんですの……い…いえっ！…わ…わたくしの身体に触れるなんて汚らわしいですわ！
二人まとめて空中浮遊させてあげますのっ！）

黒子の顔が赤く染まる。

流石の黒子も、異性が何の恥じらいも無くこんな行動をとれば、動揺してしまうものだ。

「……？」

（な…何ですの？能力が上手く使えませんか？）

当然、当麻が触れている限り能力は使えない。

「ハア！？」

男は手に持っているナイフを強く握りしめ、自分の頭の上に振りかざした！

「ガキがカッコつけてんじゃねえ！！」

ブンッ！

当麻の行動にイラついた男は、ナイフを何の迷いもなく斬りつけてきた。

「っ！！！！」

ガシユッ！

突然斬りつけられた当麻はとっさに右手でナイフを受け止め、男の凶刃を防いだ。

「痛……っ！」

「上条さんっ！！」

体術を得意とする黒子はすぐさま男の体勢を崩し、ナイフを遠くへ蹴り飛ばす。

そして素早く手錠を取り出し男を拘束した。

「『風紀委員』ですのっ！！銃刀法違反及び傷害の現行犯で拘束しますの！！」

「なっ……！風紀委員だっ！！」

……

男はその後、数分後に駆けつけた警備員によって無事連行された。

「ふう…本当、ヒヤヒヤしましたの…」

「はあ…危ない所だった。…まあこれで何はともあれめでたし、めでたし…」

当麻はすっかり事件解決の余韻に浸っていた。

「アナタは一体何を考えてますの！
一般人が手をだしてもしもの事があつたら一体どうするつもりでしたの！？」

何でお姉様やアナタはいつもいつもっ！…鬼のような眼差しで当麻を睨みつける。

「学園都市の治安維持は風紀委員と警備員の管轄ですよ！…
権限がない学生がホイホイと入ってくるものではありませんの」

腕組みをしながら呆れ顔で話す黒子…

「まあまあ…二人とも無事だった事だし…。
それに…あの状況で女の子をほっというて逃げる何てこと、上条さん
には出来ません。
その相手が知ってるヤツなら尚更だろ？」

しばらく黒子は黙りこむ。

それは怒っているのか、心配しているのか、ホッとしているのか、
分からない表情だった。

しばし、当麻の事を見つめていた黒子はある異変に気づく。

「?…ちょっと待ってくださいですのっ!!…アナタその右手…」

黒子が当麻の手を掴むと、右手からはポタポタと血が流れていた…。

どうやら先ほどのいざこざで負傷してしまったようだ。

「アナタは何を考えてるんですの!？
こんな傷を放っておくなんて…」

持っていたハンカチを傷口に当てる黒子。

「いや…助けるのに夢中で気づかなくて」

呆れたを通り越して当麻が可哀相な生き物に見えてくる黒子なのであった。

「と・に・か・く!! 応急救置をしなくては いけませんの」

しかし治療をするにしても、場所と言えば風紀委員の支部しかないのだが…

「ここからでは些か……遠いんですね」

残念ながら支部まではとても向かえそうに無い。

「うーむ…せめて空間移動テレポートさえ使えば良いのですが…」

そう…、当麻の右手（幻想殺し）によって、当麻自身をテレポートする事は不可能なのである。

「いいよ白井。
そこまで迷惑かけらんねえだろ、こんな力スリ傷1日休みやあ治る
って」

「……っ。…そうゆう訳にはいきませんの。
わたくしを庇って負われた怪我なら尚更ですの！」

キッ！と睨みつける黒子の鋭い眼に、少し気圧され気味な当麻なのであった。

「……………！」

そつだ…と、まるで何かに気づいた素振りを見せる黒子。

「ここからですと…、わたくし共の『常盤台女子寮』が近いですね」

「いや…流石にそれはマズくはないでしょうか」

いくら数々のフラグを棒にしてきた上条さんでも、そこは健全な男子高校生。

女の子だらけの女子寮に多少の抵抗を覚えるのであった。

「?…以前もお越しになられたではありませんの？
それに負傷者の手当てという事でしたら、特別に許可も降りるはず
ですの」

「いや、あの時は別の事に夢中になってて…」

（とうゆつか…もちろん寮には御坂もいるっ！

そしたらいきなり勝負って言われそうで怖いんですけど）

当麻の一番の不安要素は治療しに行って、更なる怪我をしてしまう事であった。

「風紀委員としてアナタの身の安全を確保しなくてははいけませんの！いいから黙ってついて来なさいっですの！-！」

40

「マジ…ですか…」

ポツリと当麻が呟く。

（やっぱ嫌な予感しかしねえよ…（泣））

「
うう
…不幸だ
…」

第3話

俺の名前は上条当麻。

学園都市では珍しくもない、レベル0（無能力者）の高校一年生である。

只今わたくしは、あの学園都市でも指折りのお嬢様学校…『常盤台中学』の女子学生がひしめく、『常盤台中学女子寮』の前にいる。何故に今この様な状況に置かれているかと言いますと…。

「何を一人でブツブツしゃべってるんですの？」

「いや…初めて見る方の為に一応説明した方が宜しいのかと…」

「気持ち悪いですの」

そんなこんなで、良く分からない会話をしている内に、二人は寮に到着する。

「？、なあ白井」

「何ですか？」

「何で自分達の寮に入るのに、そんなコソコソしてんだ？」

黒子はなぜか物陰に隠れ、周りを確認しながら寮の中を進んでいた。

「うるさいですよっ！」

確かに負傷者の治療ということで入室の許可は貰えるとは思いますが、いざあの化け物女に話すとすると、それなりの勇気が必要になってくるんですよ！！」

「はあ……」

（一体何が住みついてんだよ）

すると突然黒子が真面目な顔をして当麻に話しかけてきた。

「よいですの…この寮内にはそれはもう、とてつもなく恐ろしい首折り女が…」

「ほう…そんな生き物が住んでいるとは知らなかったな」

ビクウウウツ！

黒子は動きが一瞬にして止まる程の旋律を覚えた。

「いい度胸だな…白井。寮内は男子禁制だという事を忘れてしまったようだな…」

「う…ご機嫌麗しゅう寮監様…」

クイツ…

正に氷の眼差しと言わんばかりに、寮監のメガネが輝きを放つ。

「お…お言葉ですがこの殿方は先程ある事件に巻き込まれてしまい、怪我を負ってしまいましたの…
それで…その…今回は特例ということで寮内での治療を許可して頂きたいですの…」

そう黒子が言うと、寮監と呼ばれた女性は当麻の事をジツ…と見つめてきた。

ドキッ

（うおっ！これは…、年上で大人なお姉さん…付け加えて寮の管理人さんであり、見た感じ気配りタイプときたっ！
と…とりあえず落ち着こう俺）

完全にストライクゾーンであった…。

「なるほど…確かに右手を負傷しているようだ。
そう言うことならば特別に入室も許可しよう」

寮監の一言にホッと肩を落とす黒子。

「分かって頂けまして恐縮ですの」

ガシッ

「ふえ？」

ゴキンッ

ニブい音と同時に黒子は床に倒れ込む。

「言い分は分かった…、しかし前にも言ったが、君は我が校を代表する能力者だ。どんな事情だろうと規則破りを黙認しては、他の者に対して示しがつかん…」

規則破りには罰が必要だ…そうは思わんか？

…なあ少年？」

「……ハイ……」

当麻の顔は完全に青ざめていた。

「一応手加減はしといた……。さっさと起こして部屋に連れて行って貰え」

「あっ！えと……
白井？しっかりしろ……。オイッ白井っ」

「ん……うん……」

ピクリと身体が反応するのを感じ、一安心する当麻であった。

「ああそうだ……白井が起きたら明日は寮内のトイレ全てを清掃しておくよう伝えてくれ。」

もちろん御坂も一緒にな」

「へ？」

「いいな……」

何か圧倒的な威圧感に気押される……。

それからしばらくすると、黒子はゆっくりと起き上がり……

「ん……うん……」

何か走馬灯のようなものが見えたの」

「白井っ！大丈夫かお前？」

・・・この時二人の距離わずか10？。

「くっ！何しようとしてるんですの！この変態があくっ！」

バチイインッ！

「ぐふうっ！！」

…。

「痛つてえ…不幸だ…」

少年の左側の頬は大きく腫れ上がり、綺麗に手形が浮き出て、色は真っ赤に染まっていた。

「…さあ、早くいきますのっ！」

一方こちらの少女は、別にぶたれた訳ではない…、しかし、顔は少年の比ではない程に真っ赤に染まっていた。

ガチャ…

ようやく部屋の前までたどり着き、黒子が扉の鍵を開け、中に入る。

「お…お邪魔します…。」

み…御坂さん？上条さんは今日は怪我をしているんで、勝負とかは遠慮してください。」

そう言いながら、ゆっくりと静かに部屋に踏み込んで行く。

「あら？お姉様はご不在のようですね？」

（ふう…助かった…）

大きく息を吐き出し肩の力を抜く当麻。

「とりあえず適当に腰を降ろして下さいまし…。
ただし、アナタの座るベットはあちらですよ！」

（ああ…お前は御坂のベットに座るのね…）

ボリボリと頭を掻きながら黒子のベットに向かう当麻…

コトツ…

飲み物をテーブルに置くと、黒子は当麻の隣にちょこんと座った。

「うおっ！…！」

ドキドキ…

（ち…近え）

正に肩と肩がぶつかる距離である。

「さっ傷口を見せてくださいまし」

黒子は救急箱を手に取ると、当麻の右手を掴み、手当てをしようとした。

「いいよ白井。こんくらい一人で出来るから…。
それに上条さんはこういう消毒や包帯などの作業には慣れて…」

「ふんっ！」

バシヤッ！

「ぎやあああああああああああつ！…！」

断末魔のような叫びが寮内に響き渡る。

黒子が傷口に大量の消毒液をぶちまけたからである。

「お…お前なあ…」

「御免あそばせ殿方様、一体いつまで気取っているのかと…
そんな事を思ってたしたら、思わず手が滑ってしまったんですの」

そう言っただけは丁寧に包帯を巻く。

……
（細っせー腕だなあ…、こんな細い腕で毎回治安維持を行ってんのか…）

「はいっ終わりですの」

「ああ…ありがとな白井」

当麻は本当に心からの感謝をした。

黒子の風紀委員に対する情熱や責任を充分に感じたからである。

（な…何なんですの…、急に改まって…）

思わず頬が赤く染まる黒子。

治療が終わった当麻はベットから立ち上がり、部屋を出ようとした。

「お待ち下さいな！」

ガシッ

「ぐえっ!!」

強引に当麻の首袖を掴みベツトに押し戻した…。

「何んなんだよ白井っ！上条さんは早く帰らないと後頭部が段々ハゲてしまっんですけど」

「はぁ…何を言ってるんですの！？
とりあえずアナタには聞きたい事が山ほど御座いますの」

「イヤイヤッ！そんな暇ねえんだって！
ウチには暴食噛みつきシスターが…」

「喋ってないで、さっさとくつろいでろっ！ですの」

……

……ズズっ。

ベツトの上でお茶を飲みながら一旦冷静に状況把握をしようとする

当麻。

「んで…聞きたい事ってのは？」

「決まってますわ……。お姉様とのご関係の事ですの」

……。黙りこむ当麻。

「もちろん返答次第では生きて返しませんので…」

……

……ズズッ。

（ふう…とりあえず落ち着こう俺）

第4話

「関係…ですか…」

「そうですの！…以前からアナタとお姉様が親密なご関係であられることは、それはもう良く知っておりますの。いい機会ですっ！

この際アナタには、ご自分の意志をハッキリさせて頂きたいんですのっ！」

「親密なご関係ねえ…」

そんな事言われてもなあ…
当麻には全く自覚が無かった。

「ただの喧嘩相手が練習相手の間違いだろ？」

「…正直にお答えしてくださいませし！…
お姉様は十中八九アナタに…その、好意を寄せていますの！

それを踏まえて、アナタのご意見を聞かせて頂きたいんですの!」

真剣な顔で当麻を問いただす黒子。

（好意ねえ…）

「まあそうなんだろうな」

!!!!

黒子は思いもよらなかった一言に、この日一番の衝撃を受けた…
まさかこの男が…女性の気持ちに気づいていいようとは。

「確かに、ありゃあマジだよなあ」

「!!!!!!」

アナタはお姉様が本気と知って尚、拒絶しているんですの!」

「そりゃ…こっちはいい迷惑だろ。
いい加減にしてくれって感じですよ」

(注) 【好意を持つ】

上条 「好敵手、もしくは良い練習相手」と言う意味で。

黒子 「恋愛対象」と言う意味で。

「でもこれだけは自覚しておいてくださいまし…」

そう言っ て御坂のベットにボフツと座り込む。

「前にもお話ししましたが…、アナタはお姉様にとって、数少ない
対等に接する事が出来る方なんですの…
自覚があるのでしたら、尚更ですの。アナタにはもっとお姉様に正
面から接っ して頂きたいんですの」

そっ ぽを向いて不満そうに話す黒子。

「いや…でもさ、御坂もお前もまだ中学生なんだぜ？紳士の上条さんは手なんて出せません」

中学生相手に手なんて挙げられない（喧嘩的な意味で）と、自分の意見を丁寧に教えたつもりの当麻であった。…が、

ブチッ！！

何かが切れた音がした…

「何で手を出す必要があるんですの！！この変態がーッ！」

恋愛的な意味で捉えた黒子は、鬼の形相で当麻の顔面にハイキックを浴びせる。（もちろんテレポートして）

「危ねえっつー！！」

これを間一髪のところでかわす当麻。
手に持っていたお茶は勢い良くベットにこぼれた。

「この…毎度毎度、芸も無く避けてんじゃ無えーですの！」

右・左と交互にパンチを繰り出す黒子。

「な…なんか前にも同じ事あったような…
うおおおおっ！！！」

ガシッガシッ！

「お…落ち着け…白井…」

「~~~~~っ！！また能力が上手く使えないんですの！
アナタは一体なんなんですよっ！！！」

当麻は黒子の両手を掴み、互いに動けない体勢になっていた。

「お前…いい加減に…」

ガクンッ

手を抑えていた力が急に抜けていくのを感じた黒子。
すると当麻の脚が突然崩れ落ちた…

「なっ！ちょっと…しっかりして下さいましっ！！」

前に倒れて込んだきた当麻の体を黒子は両手で支え、その様子を心配そうに伺う。

「ハア…ぐっ…」

（明らかに様子がおかしいんです…）
「わたくしを庇った時の怪我が原因で？」

顔は真っ赤に充血し、額からは大量の汗が溢れ出てくる…。
息使いは激しく乱れ、かなり苦しそうだ。

「ハア…ハア…」

グラァ…っと、更に前に倒れ込む当麻。黒子は体重に押し潰されそうになりながらも、何とか体を支えている…

「な…ななな！、ちょ…ちょっと待っ…、しっかりして下さいまし
っ！…」

「ハアハア…、白井…？」

ドサッ

ついに支えきれなくなった黒子。そのまま当麻が上に覆い被さる形で、二人は床に倒れ込んでしまう。

「お…重いんですの…」

ガシッ

黒子の言葉に反応したのか、当麻は黒子の肩をガシッと掴んだ。

……。

良く目が見えていないのか、更に顔を近づけて来る。

「っっ！……！！！！！！」

顔が一瞬にして真っ赤染まり、今にも爆発しそうな勢いである。
能力も使用できず、もはや黒子になすすべは無い。

（なんなんですよ！この状況はっ！！）

「あ…頭がボーっとする…」

ピクッ！

その一言に黒子が反応した。

（頭がボーっと？…顔の充血…、荒い息使い…）

……。

「ま…まさか…」

そっつとベットのの上にぶちまけられた飲み物を確認する。

「あ…ああああれは…お姉様に捧げる筈だった…、黒子特性、
スペシャルパソコン部品入りブレンドティー』ですのっ…!!」

強力なパソコン部品（まあ…媚薬ですが）が入ったお茶をヤロウに
使ってしまった白井さん。

「し…白井…」

「んぎゃあああっ!!
ちよっと、いくらなんでもこのままではマズいんですの!」

黒子の両手をガッチリ掴んでボーっとした目で見つめる当麻…

ー黒子サイドー

ドキドキドキドキッ

（な…な…な何を考えてるんですの…？
目かもはや正気じゃないんですの！）

ー当麻サイドー

（あれ？インデックス？
んゝ目がぼやけて良く見えねえ…何か顔が赤いような…）

「オイ、インデックス…顔が赤いぞ？風邪か？」

更に近寄る当麻…

「マズいのです！マズいのです！マズいんですの……っ！！
このままですと黒子は…黒子は…確実にやられてしまいますの！？」

ちよつと間違つた妄想をする黒子だが、生命の危機を感じていた…

と、その時！

ガチャ

「黒子ー？帰つて来てるの？
なんか寮監に睨まれて…」

まさにバッドタイミング…。

「「……………」」

「んあ？御坂か…？」

当麻が言葉を発したその時、御坂の髪からバチツと火花が飛ぶ。

部屋に入っていきなり知ってる男女が床で折り重なってれば、動揺するのは当然である。

「あ…ああああんた達……ココで一体何してんのよ…！」

「お…お姉様っ！落ち着いてくださいまし！
こ…コレには、コレには深〜い訳が…」

「訳って何よ！
こんな状況でどんな訳があんのよ…！」

「訳って言うよりか事故なんですの…！」

御坂の髪からは、相変わらずバチバチと電気が走っている。
一方黒子は涙ぐんだ顔で御坂の誤解を解こうと必死だ。

「アナタもいい加減どきやがれっ！ですのー！」

「お…おいインデックス…いきなり動くなって…」

腕を大きく動かし当麻を何とか振りほどこうとする黒子であったが…

ムニッ…

当麻の右手には何やら柔らかい物が…。

「???何だコレ？」

ムニムニ...

御坂・黒子「つつ！...！！」

「ど...どこ触って...！？ワザとですよ！？ワザとなんですよ！
」

「ーーーーッ！...！」

バチバチ...

とうとう御坂の体中から電気が溢れ出す。

「ふ、ふ...ふ...ふね...」

「お姉様…？」

お…お待ちくださいまし…」

「ふ・ざ・け・ん・なああッ！…！」

バリイイイイイ！！

激しい閃光と共に、怒りの電撃が二人を襲う。

「はは…不幸だ…」

満面の笑みで当麻は悟った…。
死ぬかもしれない…と。

チュドーーーーッ！！

第4話（後書き）

どうでしたでしょうか？なんか自分で書いてて恥ずかしくなってきました。

（へ）

もはやほぼコメディですが、話はまだまだ続きますんで、宜しくお願ひします！

ちよつと仕事が忙しくて投稿が遅れておりますが、頑張つて続けていきます。

感想・アドバイス等気軽にお願いします！

第5話（前書き）

えー、突然ですが行間2行で行きます!!

とまあ、色々考慮してやっておりますので、感想・アドバイス等ありましたら気軽にお願いしますっ！

それでは第5話、始まり始まりいっ。

（
）

第5話

いつものファミレスにて……

「ああああっ！！ あの類人猿めええっ！！ いつか必ずぶっ殺して差し上げますのー！！」

「白井さん……、落ち着いてください」

「これが落ち着いてられますの！？
あの男のお陰で始末書やらトイレ掃除やら、挙げ句の果てには黒コゲですよっ！！」

黒子の怒りの雄叫びがファミレス内に響き渡る。

「まあ……そのことについては私も悪かったわよ、怪我してるなんて知らなかったんだし」

「いいえっ！！」

お姉様は断じて悪くありませんわっ！！ 上条当麻っ！ 全ての元凶はヤツなんですのー！！」

バンっ！ と、テーブルを叩き、怒りを現わにする黒子。

「はは……なんかすごいすね」

「一体その上条さんと何があつたんですか？」

……。

佐天と初春の一言で黙り込む黒子と御坂。

「……、そりゃあ……」

………

ボンッ！！！！

と思つたら突然顔が真っ赤に爆発する二人！

「わたくしとした事が、わたくしとした事が、わたくしとした事が、わたくしとした事が……あんな……、あんな男と……あんなっ！！」

ガンガンガンガンガンガンッ！！

そう言いながら頭をテーブルに叩き続ける黒子。

「し……白井さんっ！」

「えええっ！！ ちょ……どうしたんですか？」（あれっ？？
なんかマズった？）

その後、店内での騒ぎにより（黒子の高速頭突き）4人は店を追いつ
出されてしまう。

……。

外はすっかり夕焼け空。

「はぁ……私もその上条さんに一度でいいから会ってみたいなー」

「あんな猿に会った所でロクな目に逢いませんわ」

「でも白井さん……、昨日からずっと上条さんの事についてブツブツ言っていましたよ……。」

（悪口ばかりですが……）「」

「へえー……。」

「少なからずも意識してるという事ですかあ……。」

「な……なな、な……何でわたくしがあんな男なんかを意識しなくてはなりませんのっ!!」

そのわかりやすい反応に佐天と初春はニヤニヤと笑っている。

「~~~~ツ!!」

プルルルッ

ここで黒子の近未来チックな携帯が鳴りだす。

「はい、白井ですの。」

「……分かりました。直ぐに向かいますの」

「また事件ですか？」

「ふう……休む暇もありませんの」

黒子は初春に手を触れるとテレポートして、御坂達の前から消えてしまった。

「相変わらず、風紀委員の仕事は大変そうねえ……」

「節操無いなあ……」

……

あれっ？　ちよつと気まずい状況かも……。

「あの……？　御坂さん、良かったらこれから『セブンスミスト』で服買うの付き合ってくださいませんか？」

「えっ、うん……別にいいわよ？」

そうして二人は第7学区の洋服店『セブンスミスト』へ向かうのであった。

……。

「ここに来るのも結構久し振りねー」

「ああつ！ あの爆弾魔の事件以来ですかね？」

「まあ、あの時は色々タイミングが悪かったもんね……。でもまあ、あんな事はもう二度と起こらないと思うし……」

あの虚空爆破事件クラッシュ以来、彼女たちにとっては『セブンスミスト』での久し振りの買い物となる。

「ん~~~~~っ！

今日は思いっきり羽伸ばしちゅおっかなー」

「私も常盤台に居ると服とか選ばないのが問題なのよねー」

ジ~~~~と置かれている服を凝視する御坂。

「あつ 佐天さん。」

実は私ちょっとTシャツが見たくて……。」

振り返るとそこにはなぜかモジモジとしている佐天が、

「ス……スミマセンッ御坂さん!!」

「？」

「ちょっと私トイレ……トイレ行って来ますっ！
洋服は先に見てていいですからっ！」

「えっ！？ 佐天さん？」

佐天は小走りでトイレに走り去って行く。

（そっぴゃファミレスで結構飲んでたわね……）

ふうっ

軽いため息をつきながら、服を探そうとする御坂……

「ん……？」

すると御坂の目の前にある物が飛び込んで来た！

「……………！！！」

（ゲ……ゲコタっ！！）

そう……それはいわゆるゲコタTシャツである。

「……………。」

キヨロキヨロと挙動不審に辺りを伺う御坂。

「……………ゴクッ……………」

……………。

「はあ……。スッキリしたな。」

「いやはや、結構ギリギリだったかも（笑）」

そんな女子高生であるまじき発言をする佐天。

すぐに御坂の元に戻ろうと、ダッシュでトイレを出ようとした。

その時だった……。

ドンッ！

「きゃあ！」

「うわっ！」

曲がり角を曲ると同時に、向かって来た人とぶつかってしまっ。

「痛ったあ！」

「痛〜」。

「悪い、大丈夫か!？」

紳士的な対応で少女を気遣う少年……。

「あ……はい、私は大丈夫です。
こちらこそすみマセンでした」

「ゴメンな、ちょっと余所見してた。
……ホラッ」

立てるか？

そう言わんばかりに少年は右手を差し出す。

「あつ、ありがとうございます」

「いや、こっちが悪かった訳だし。
ああ、そうだ……」

わりい……この辺で安いＴシャツ売ってる所ってないか？」

「はい？」

「安さ重視で……出来れば500円台とかの」

「はあ……」

「いやいや……不幸にも部屋のタンスにしまったＴシャツやら下

着やらが全部虫に喰われちゃってだな……。

上条さんの財布の中身はもう氷河期同然なのですよ。（トホホ……）

「

自分にもぶつかった責任はあるだろう。

そう考えていた佐天は笑顔で

「はいっ！

私で良ければ是非案内させて下さい！」

そう答えた。

（あれ？ この人……

んん、何だろこの妙な違和感……？）

上条と言う名前と特徴的なツンツンヘアーに、何か妙な引っかかりを感じた佐天であった。

（あゝなんだろこの感じい……

気になるう……モヤモヤするー！）

.....

一方その頃、

「全くっ!!」

とんだガセ情報でしたのっ!!」

「え、えーとお……、とりあえず落ち着いてください」

急いで現場に向かった黒子達であつたが、そこには特に事件など何も無く、その後初春の情報収集によつて誤報だと判明したのである。

「何か一気に疲れてしまいましたね」

「もう、勘弁して頂きたいんですの……」

はあ〜

と、ガツクリ肩を下ろす二人。

「あつ! そう言えば……」

さつき佐天さんから『今からセブンスミストに行つて来ます』つてメールが入つてました」

「それっていつ頃の話しのです?」

「ついさっきです。10分位前ですかね?」

そう言って携帯の時計を確認する初春。

「まっ……時間も余ってしまいましたし、今からわたくし共も向かいましょう」

かくして、黒子と初春の二人は御坂達が待つ『セブンズミスト』へ向かうのであった……。

……

ゾクッ……

「んっ?」

「? ……どうしたんですか?」

足のつま先からツンツン頭の毛の先までブルツと震えだす少年。

「いや……なんか悪寒が……」

第6話

「フッフーフー フッフーフー フッフーフー」

鼻歌混じりに持っていたTシャツを、鏡の前で身体に合わせる少女。

「うんうんっ！

一瞬どうかな？ とか思っちゃったけど、こうしてみると結構アリ
って気が……」

かなり上機嫌である。

すると

「……何やってんだ？ お前？」

「み……御坂さん？」

一瞬御坂の身体がビクウと反応する。

「~~~~~ッ？」

~~~~~ッ!？」

ササッと持っていたＴシャツを後ろに隠す御坂。

「な、な、何でアンタがこんな所にっ!？  
しかも佐天さんと一緒にいんのよっ!？」

「いちゃ悪いかよ……」

「さっきトイレから出る際、お会いしたばかりなんですけど……？  
御坂さんのお知り合いなんですか？」

「知り合いも何もコイツは……」

御坂はビシッと勢い良く当麻を指差し、何かを言おうとした。

「ああ……そっぴゃ紹介がまだだったな……。  
俺は上条 当麻。宜しく。  
えゝと……佐天さんだっけ？」

御坂が介入する間も無く自己紹介を済ませる当麻。

（私を無視してんじゃないわよ！）

心無しか、若干顔が赤くなる御坂。だが髪からは不幸を呼ぶ火花がバチバチと流れていた。

一方、少年の名前を聞いた佐天はしばらくの間ボーっと当麻を眺め、

ハッ！

と突然我に帰る……

「えーーーーッッ！！」

公衆の面前にも関わらず大声を出す佐天。周りのお客も3人の方に目を向けている。

「ちょ……佐天さん？」

（何だいきなり！？）

いきなり叫ばれた事で、御坂も当麻も訳が分からんッ！  
と言った表情。

「あ……アナタが“あの”上条さん……」

「……………あの”??”」

「あつ私、佐天 涙子って言います！ 御坂さんとは友達で、上条  
さんの話は良く聞いておりますっ!!」

「はい?……」

目をキラキラと輝かせながら、佐天は当麻の両手をガシッと  
掴み、かなり興奮気味に自己紹介を済ませる。

「いやー！ お会い出来て光栄です！  
まさか生の上条さんをこの目で見られる日が来ようとはー!」

（俺って一体何者なんでしょうか？）

いつの間にか有名人にでもなってたのか？ そんな事を思いつつキ

ラキラ全開で話しかけてきた中学生の握手に応じる当麻。

(ハッ！ み……御坂さん!!！)

「ん？」

御坂にアイコンタクトで何かを訴えかける佐天。

(御坂さんっ！ 私に任せて下さいね！)

「えっ……？ 何なの？」

何か不吉な予感がする。

そう思った矢先……

「あっ！ スミマセン御坂さん、上条さん！

私ちよつと他の用事あるの思い出しちゃいましたー！。

申し訳無いですけど買い物はお二人で仲・良く頑張ってください」

(え~~~~~~~~ッ!!！)

ちよつと佐天さん！)

「えっ？ おい……？」

あまりにベタな作戦にショックを隠しきれないのか、口を開いたまま動けない御坂。

「いやーっ！ ホントに申し訳ありません。もう私って何でこうタイミングが悪いのかなあ！ ハハ……アハハッ！」

(さ……佐天さん？)

(御坂さん……お礼なんて結構ですよ！ 後はお任せします！)  
「それでは失礼しま〜す〜す〜！」

ピューーーーーッ！

佐天は風のように去って行った。

(ち……ちよ、佐天さ〜〜〜んッ！！)



（何だっ たんだ！？）

.....。

当麻と御坂はしばらく黙り込んでいる。

「御坂？」

「し.....しし、勝負しなさいよ！！」

またですか.....

思わず「不幸だ」と言いたくなる少年。

「勝負ったつてお前.....またこの店丸コゲにするわけにはいかねー  
だろ」

「うつ！」

.....。

少し離れた洋服棚の影にて……。

「御坂さん大丈夫かな？ とっさにあんな事しちゃったけど……上手くいくと良いなあ」

洋服棚の影に隠れながら、遠くにいる御坂を観察する佐天。

「でも上条さんって……なんて言うか、もう少しカッコイイようなイメージだったなあ……。  
ツンツン頭つてのは知ってたけど、あれじゃあただのボサボサ頭って言うか……。御坂さんだけじゃなく白井さんも……気にかかっている感じだったし……」

ブツブツと姿勢を低くしながら独り言を呟くその姿は、いささか……

「……不審者かと思いましたわ……」

「さ……佐天……さん？」

バツと声のした方向を振り返る佐天。  
そこには黒子と初春が、多少引き気味な様子で佐天を見つめていた  
のであった。

「~~~~~ッ!!  
.....はははっ」

頭を撫でながら苦笑いをしている。

「笑ってごまかさないでくださいまし.....」

「な.....何してるんですか？ 佐天さん.....？」

顔を赤くしながらチヨイチヨイツと二人を呼び寄せる佐天。

「まあまあお二人さん、ちょっとアレっ！ 見てみて下さいよ」

黒子・初春「「？」」

言われるがまま服の影から覗き込む二人。

……。

(あつ……あれは……)

「御坂さんと、……誰でしょうか？」

「ふふふん！」

初春、あの御坂さんの隣にいる方こそ“あの”上条 当麻さんなのです！」

なぜか自慢げに話す佐天であつた。

「えーっ！　じ、じゃあ今まさに……(修羅場?)」

チラッと黒子を横目に見る初春。

「ふ、ふふふフフフ……」。

あの類人猿があア……、まーたお姉様に近づいてらっしゃいますの……。

フフフフ……クフフフフ、ヒヒヒ……キーヒッヒッヒー！

……殺しましょうか？」

ガシッと本能的に黒子を止めに入る佐天と初春。

「し……白井さん！ 待って下さいっ！」

「早まっちゃダメですよ！！」

「お放しくださいまし！」

あの猿に尻尾を付けて差し上げますのっ！！」

そう言ってホルダーから鉄矢を取り出す黒子。

「今良いところなんですから……、ホラっ！ 御坂さんの為と思  
つて」

「お姉様の為……？」

ピタッと体の動きを止める黒子。

「そ……そうですっ！！」

全ては、大好きな御坂さんの為ですから」

（ここで白井さんに登場されちゃあ全部台無しだ〜ッ！）

「……………」

佐天の発言に黙り込む黒子。何かムスツと頬を膨らませているように見える。

「白井さん?……………」

黒子の様子がいつもと何か違う事にいち早く気付いた初春は、少々心配そうに黒子を眺めていた。

……………トクン……………トクン

（う〜ッ……………何なんですのこの感じ……………。  
胸のモヤモヤが止みませんの……………。）

カアアッと頬を真っ赤に染めながら涙目になって、遠くにいる当麻を睨みつける黒子。

（全部あの男のせいなんですの〜〜〜ッ!〜!）

この時当麻は再び背後からの悪寒を感じていたという。

「そう言えばあの二人、さっきから何を話してるんですかねー？」

「ん〜？　ここからじゃ何言ってるのか聞こえないなあ……」

スチャ……

突然黒子がスカートのポケットから何か黒いものを取り出した。

「盗聴器ですの」

佐天・初春（（なんでそんなもん……））

「あの類人猿とお姉様を二人きりにするわけにはいきませんの！」

何かしやがったら命はありませんわ！！　　といった鬼の表情を浮かび上がらせる黒子。

その背中からは何やら黒いオーラのようなものがユラユラと揺らめいていた。





## 第6話（後書き）

ん〜ッ！ やっぱり小説って当初予定してた通りにいかないなあ……。

なんて、エラソーに話してみました！

じゃあ感想待ってます！

（こんなコメディだけになるつもりはなかったんですー！！）

独り言です。

（ ; ）

## 第7話（前書き）

ヤバイです！

風邪っぴきですっ！

結構限界です！ かなりキツイですが頑張って書きました。

（実は今もヤバイです）

駄文だったらスミマセンですっ！  
その時は言ってお下さい。

では7話はじまり〜。

（ ）／

## 第7話

コソコソと観察している黒子・佐天・初春の3人。その視線の先には御坂と当麻が言い争っていた。

「店を燃やすとか!! そんなバカな事するハズないでしょっ!」

「ハイハイ、そんなムキになるなよ。冗談に決まってるだろ」

「なによそれっ! アンタのそういう所がなんかムカつくのよ!!」

完全にケンカ中の二人だったが、他の客から見れば口論中のカップルにしか見えない。

「やっぱりアンタ勝負しなさいよ!」

(だから何でそうなるんだよ……)

なんで毎度毎度、理不尽に電気をビリビリッと浴びせられにやならんのだ……

そう思うと当麻のヤル気メーターは一気に下がっていく。

「お前この前俺を黒コゲにしたばっかだろ……いい加減丈夫が売りの上条さんでも身が持たないっつーの」

（この前？……なんの話をして……）

ハッ……

何に気づいたのか御坂の顔が突然赤くなっていく。

（アンタが黒子と……）

フルフルと体が震えだす御坂。流石に鈍感なこの男でも、そんな御坂の異変には気付いたようだ。

「御坂？」

御坂の顔を覗き込むように話しかける当麻。  
この時の二人の距離わずか30？。

「ッ……！ わ、わわ……」

「？」

「私に近寄るなあああっ!!」

バキイイツ!!!!

「ぐふうっ!!」

少女の右ストレートは見事に少年の顔面を捕らえる。

「が……ぐふう……ふ、不幸だ」

いきなり殴られたのはなぜだ？

あまりに突然過ぎる出来事に、頭の整理が追いつかない。

と、そんな事を思っていたとき……

……。ピッ

「……ん？」

何か背中に冷たい物が……。  
当麻はガサガサと背中 of 辺りを調べてみる。……が、特にコレとい  
って妙なものは無かった。

「……………??？」

「アンタさっきから何してんのよ？」

「いや……何でもねえ。……………」

（何だったんだ？）

……………

『盗聴器、無事設置完了ですの』

佐天・初春『う、うわぁ……………』

黒子の飽くなき執念に友人として動揺を隠せない佐天と初春。

『もう逃がしませんの！ お姉様には手を出させませんわ！』

まるで、狙いを済ませた鷹の様に目を光らせる黒子。

『でも何かコレ……映画みたいでカッコイイかも……』

今の状況を楽しみだした佐天さん。

『何言ってるんですか佐天さん！ コレ完全に犯罪行為ですよ！！  
白井さんもっ！ 私達風紀委員なのになんでこんな事してるんです  
か！？』

初春の叫びは無情にもこの二人には響かなかった。

……

「てゅーかアンタは何しにここに來たのよ！！」

「だゝかゝらゝっ！！」

上条さんはただＴシャツ（安物）を買いに来ただけだって何度も言  
ってんだろー！」

相変わらずガミガミと言い争っている二人。当麻は御坂を半分無視  
した状態で、Ｔシャツの値札をチェックしていた。

「ちょっと！！ 私を無視すんなって何度も言っ  
てんじゃない！」

「上条さんは今忙しいんだよ……つかお前こそ何でここに居るん  
だよ？」

服買いに来たんじゃないのか？」

「うつ！ ……それは……」

当麻の的確なツッコミに言葉を詰まらせる御坂。

「わ……私はホラ……、アンタの服選  
びを手伝ってやろつか  
な……  
そう思ってたのよ！」

（余計なお世話だ……）



「ほ……ほらっ！ アンタ洋服とかセンス悪そうだしっ！！」

ジー……。

「……な、何よ」

言い訳を聞かされた当麻は、なぜか御坂をジッ……と凝視するのであった。

「いや……。

そんな事言っつつけど、お前そのＴシャツは買っのか？」

視線の先には、御坂がずっと手に持っていた『ゲコタＴシャツ』が……

「~~~~~ッ！！！！！！」

ササッ

と、『ゲコＴ』を慌てて後ろに隠す御坂。

「な……ななな何よ！！ 私は何買おうがアンタにはどうでもいい事でしょっ！！」

顔を真っ赤にして反論する御坂。かなり恥ずかしかったのか声が震えていた。

(……さっきと言ってる事違わねえか?)

まあ当麻がそう思うのも当然である。

『お姉様ったらまたあんな子供っぽいものを……』

『相変わらず凄いセンスしてるな……御坂さん』

『商品告知にも対象が小学生って書いてありますよ……』

影から御坂に追い討ちをかける友人達。

御坂のお子様センスに一同は同情しているのか、はあ……と大きくため息をついた。

「いいんじゃないか？ 合ってると思っぞ?」

えっ……。

そのセリフを聞いた全員が一瞬言葉を失い、その場で凍りついた。

・  
・  
・

御坂・黒子・佐天・初春

( ( ( え ~ ~ ~ つ ! ! ! ) ) )

「ちょ……ちょっとアンタ!!  
い……いいいいいきなり何言って……!」

御坂の顔は一気に赤く染まり、混乱しているのか体中から電気が溢れていた。

「何ってなんだよ……  
いいじゃねえか、俺は結構可愛いと思うぞ?」

(か……可愛っ!?)

プシューー! 頭から湯気がでる御坂。

『上条さんっ！　今のセリフは完全に禁句ゾーンです！』

『聞いてるこっちが恥ずかしいですよ！』

『あれはワザとですよ！　ワザとですよ！？  
天然すぎるにも限度がありますわ！』

最強の天然パワーでまたもフラ格拉しきものを立てる上条さんなのであつた。

（へえ……あの御坂の持つてるシャツって結構安いんだ）

当麻が見ていたのは主に服ではなく値札であつた。

「じゃあそのシャツのＬサイズ俺も買っわ」

再び固まる一同。

……。

「え……？ それって……」

御坂・黒子・佐天・初春

（（（（パールクッー！！！！））））

「な、な、な……、ペ……ペ、ペア……」

ポオオオオオオオンッ！！

恥ずかしさが頂点に達した御坂は顔から火が出るかのごとく大爆発を起こした。

シューー……

御坂の顔面から沸き出す蒸気が止まらない！

「おっ………オイ御坂！」

「ふみやあ………」

顔を真っ赤にして倒れた御坂。もはやこれは手のほどじようが無い。

『うわっ！ 御坂さんが』

『ノックアウトされちゃいましたよ！』

『お……おとおお……』

お姉様あああああっっ！！？』

シュンッ！！

……。

佐天・初春『あっ……』

何か嫌な予感がした佐天と初春……  
時すでに遅く隣にはすでに黒子の姿はなかった。

「ん？」

「こおんの腐れウニがああああああつ!!」

バキイイイイ!!

無警戒の当麻の後ろからドロップキックを浴びせる黒子。

「ぐおおっ!!」

直撃であつた。

「お姉様!? お姉様!! しっかりしてくださいですの!!」

必死に御坂の体をゆすり心配そうに様子をつかがう黒子。

「ん……黒子お……」

朦朧とする意識の中、なんとか反応を示した御坂に黒子はホッと肩を撫で下ろす。

「痛う……なんだあ？」

当麻が言葉を発する時、眼前に立ちふさがる黒いオーラを纏いし少女が、人間とは思えない形相で当麻を睨みつけて来た。

「フシューッ！」

フシューーーーーッ！

よくも……よくもお姉様をこんな目に！！  
アナタ生きて帰れると思っ……」

「ハイハイハイッ！ストーーーーッブ！！」

「白井さんっ！ 落ち着いて下さい！」

黒子の両サイドから佐天と初春が腕を押さえに出る。

「んなっ！？

な……何をするんですの！！ お放し下さいまし！ ヤツに制裁を加えて差し上げますのー！！」

（な……なんなんだこの状況？）



目の前で一体何が起きてんだ？ イマイチ状況が飲み込めない当麻。

「あれ？ 君はさつき御坂といた……？」

「あつ……上条さんお久しぶりです……」

なんでさつき帰ったはずのこの子がいるんだ？

佐天の登場でますます訳が分かんなくなる当麻なのであった。

「じ……じゃあ白井さん帰りましょうか」

「そうしましょう！ そうしましょうっ！

ささっ！ 白井さん行きましょうか」

「ちょ……なんですの！ お待ち下さいまし！！」

佐天が御坂を引きずり、初春が黒子を引っ張って行く。

黒子は去り際に当麻に向かって何か発していたが、当麻に聞き取る事は出来なかった。

「……………」

ポツンとたたずむ当麻。

周りからは『えっ！ 何あの人振られたの？』とか、『女の子にボコボコにイジメられてたわよ』などと、突拍子も無い話が聴こえてくる。

「……………帰るか」

この空気が嫌になった当麻はとりあえずこの場を離れようと立ち上がる。

……………が、

「あ……………あの……………?」

「?」

「す……………すみません！ お客様は今出て行かれた方のお知り合いですか？」

メガネをかけた店員さんがオドオドしながら当麻に話しかけて来た。

「まあ……………そうですが……………何かありました？」

長年の経験から何かとてつもなく嫌な予感がした上条さんなのであった。

「あのっ！ えとっ！

お客様のご友人が持っていていかれたＴシャツを……え〜とっ！ そのお〜……払って頂けませんか？」

……。

「ハ……ハハハ……」

言葉が詰まる当麻。

なぜこんな事になってしまったのか。そう考えると自然と笑みがこぼれてくる。

（苦笑いであるが）

「ふ、ふ……」

体がプルプルと震え出す当麻。もうこうなると何をしたいのかは大体分かってしまう。

「不幸だあ————ッ!!」

……。  
彼に幸運な日が訪れることを願わずにはいられない作者なのでした  
……。

## 第7話（後書き）

今回は御坂中心の話だったかも！？

でもご安心をちゃんと！ 黒子中心も書きますので！

ではご感想お待ちしておりますので！

（ゴホッゴホッ！）

ヘックシッ（> <）

## 第8話

……パチッ

「ん……う……ん……。朝かあ……」

黄色いパジャマ姿で大きく腕を伸ばす御坂。珍しく早起きしたせいか、髪がボサボサに跳ね上がっている。

「へ、へえ……ふえつつクシヨンッ！」

……風邪かなあ？」

「昨日『セブンスミスト』で服を買っただけだったつもりが、体温を高めるだけ高め、最終的には気絶ときた……。それにより（当然だが）体調を崩してしまった御坂さん。」

「やっぱりアレが原因よね……」

はあ、とため息をつきながら起き上がろうとする御坂。  
……ところが、

グイッ

ん……？

何か身体に引っ付くものが？

「え？ 何？ 何なの？」

「ああ……！ お姉様！

今日は何か身体が火照りに火照ってますの……っ……！」

……。

ッ……！！

「ちよつと黒子っ！ なに勝手に潜り込んでんのよ……！」

「お姉様っ！ お姉様あ……っ……！」

今日は何かいつも以上にぬくぬくですのね……！」

まるで……まるでわたくしに抱いてくれと言わんばかりに……ぐふ  
うっ……ッ……！」

怒りのエルボーが黒子の脳天に炸裂する！

「痛いのですの〜」

涙目になりながら頭を抑える黒子。はたから見るとナデナデしたくなる可愛さである。

「全く！ 朝から騒がしいったらありやしない！！ しかもよりによってこんな時に。」

ふぁ……はつつくしゅっ！！」

……？

「どうかなさったんですの？ お姉様？」

御坂の様子に心配になったのが、下から顔を覗く様に聞いてみる黒子。

「うん……ちょっとね。風邪かもしれない」

「あら？ それは困りましたの……、昨日からメイドや使用人は特別休暇ですのに」



今日は特別な日であり、年間ほとんど休みが無いメイド達が揃って休暇に入る日なのだ。

「寮監も本日は夕方まで子供達の所へ出かけてますの」

……ハッ!!  
それはつまり……。

黒子は己の目をギンギンに見開き、今の状況を冷静に考えてみる。

「ふーっ、あつついわね〜」

熱っぽい様子で、パタパタと首筋を手で仰ぎだす御坂。

お姉様と二人きりのこの状況、そして風邪気味だと言うお姉様……。首筋の汗を拭う様子をゴクリッとヨダレ飲み込みながら黒子は見ていた……。

お姉様と……

『お姉様、おかゆができましたの……ア〜ン　して下さいですの』

とか、

『さあお姉様、身体を拭かなくてははいけませんの……ふふふ　全

部黒子にお・ま・か・せ下さいですの  
『  
なんて事が……。

ドキドキドキ……。』

「キャーーーーッ!!」

そんな事! そんな事いけませんのーーーーッ!!」

突然バタバタと足を暴れさせる黒子。ベッドの上で妄想タイムに没頭しているようだ。

(何やってんだか……)

黒子の方を見向きもせずタンスの方へ向かって行く御坂。

「さてと……汗かいちゃったし、そろそろ着替えないといけないわね」

と、そんな言葉を残しつつ、パジャマのボタンを上から順に外していった。

ぶふーーーーーーーーッ!!

（お…お姉様！ いきなりなんて大胆な！？）

まるでアニメか漫画の様に黒子の鼻から赤い液体がポタポタと流れ出た。溢れんばかりに流れ出るその液体を右手でなんとか押さえつける黒子。

「お……お、お」

「？ 黒子？」

「お姉様ああー……ッ！」

ガシッ！！

正面から御坂のお腹に向かってタックルするかの様に抱きつく。

「ぐふうっ！」

「お姉様あ……ッ！

身体を拭くのでしたら黒子のご奉仕させていただきますの……！」

そう言いながら御坂のお腹に顔をスリスリと擦り付ける黒子。

（お姉様の……フフフ、ゲフフフ……  
風邪によつて寝巻きの下がムレムレ状態になった汗でビッチョリヌレヌレボディを思う存分堪能出来ますの！！）

「ちょっと黒子！ アンタいい加減につ……！！  
アンタにまで風邪が移るわよ！？」

「お姉様っ！！  
黒子は……黒子は例えそうなつとしてもお姉様の風邪なら喜んで受け取りますの……ッ！」

「ワケ分かんない事をいつまでも言ってるんじゃないわよーッ！」

バチバチーッ！！

御坂の身体から神々しいまでの電撃が黒子を襲った。

……

ズズーッ！

「はぁ……もつとヒドくなつたかも……」

先ほどの能力を使用した為か定かでは無いが、御坂の病状は更に悪化していた。

「くしゅっ……」。

うゝゝ！ 風邪を引きましたの……」

……。

アホか……」。

そう思わずにはいられない御坂であつた。

ピ……ピ……ピー。

「37度8分……病状タイプはA-7か……」

今御坂が使っているのは学園都市の科学力が生み出した最新の体温計であり、体温だけではなくその病状も解析することが出来る。

「A-7ですと、対応する薬は前回で使い果たしてしまいましたの<sup>カプセル</sup>」

「ん〜？ まあしょうがないわね。寮監が帰ってくるまで大人しく待っ…」

「何をおっしゃいますのお姉様っ！？ お姉様を待たせるなんて事黒子には……。薬なら今すぐ黒子が買ってきますのっ！！」

「いや、アンタも風邪引いてるし……」

ビシィ！ つとツツコミを入れる様に右手を前に突き出す御坂。

「お姉様の為と言っならば例え黒子が死のうが構いませんのッ！！」

「ちょっと……何もそこまで大げさな事じゃないんだし……」

黒子は大急ぎで制服に着替える。黒子も当然風邪を引いているので御坂は止めに行こうとベットを立ち上がった。が、しかし……。

「ではお姉様……。

――行ってきましたの!」

――シユン。

「ちょ……ちょっと黒子――!?」

行ってしまった……。

クス……。

静止を無視された御坂は少し呆れていたが、口元は自然と緩んでいた。

「黒子……ありがとう」

……。

「ふう……っ危なかったですの……」

実は先ほどテレポートで下の階に降りた際、座標が1メートルほど

ズレていたのだ。

「能力は使わない方が宜しいですね。」

複雑な演算が必要な黒子の能力は想像以上にシビアな能力なのである。

こんな状態でもし壁なんかに移転してしまった日には……大惨事必須であろう。

（しょうがない……走って行きましょう）

そう思いながら急ぎ足で公園を走り抜けて行く。

ドンッ――！

「なっ！？」

「うわっ――！」

ドサァ……。――

自動販売機を通り過ぎた所で横から来た人にぶつかってしまった黒子。



痛つつ……。

「も、申し訳御座いませんの……。ちょっと急いでいたものですので……」

「いや……、こちらこそスミマ……」

……

黒子・当麻「……!」

「なななな……何でまたアナタがココに居るんですの!?!  
一体何度わたくしの障害になれば気が済みますの?!?!」

「ははは……なんだろう母さん、涙が出てくるよ」

「またも運命的な出逢い? をしてしまった二人。そして相変わらず  
犬猿の仲と言った感じた。」

黒子が一方的に嫌っているだけだが……

「アナタが現れる度にわたくしは……  
は……は……ハックション!!」

「???」

オ、イ、どうしたんだ？ 風邪でも引いたのか？」

黒子の顔が若干赤く染まる。その苦しそうな表情から心配そうに当麻は訪ねた。

「フンッ！ 何でもありませんわ……」。

余計なお世話ですの！」

当麻の心遣いも一向に受け入れようとしない黒子は、そっぽを向いて目を合わせないようにしていた。  
するとここで……。

ピト……。

突然当麻は黒子の額に手を添えると、前髪を上げて自分のおデコをくつつけた。

「熱っ！ ほらやっぱり熱っばいじゃねえか!!」

!!

「な……な……何を堂々とセクハラ行為をしていますの……」

ドキドキ……

当麻を否定するような言葉を吐きながらも、黒子は胸がキュウツと縮込まれる何か感じていた。

（う！　またですの……）

その衝動の後は必ず身体の内から熱くなる……。つい先日からコイツに会う度、段々とヒドくなっているのが分かる。

「こんな状態でどこ行こうとしてたんだよ」

「アナタには別に関係ありませんの……」。

わたくしはお姉様の薬カプセルを買いに行かなくてははいけませんので……。御免あそばせ！……」

ガシッ

通り過ぎようとした黒子の腕を、とつさに掴まえる当麻。

「なんですよっ！！」

「そんな状態で行かせられつかよっ！！」

薬なら俺が買って来るからお前はここで待ってる！！」

なっ……………！

「何を言って……………余計なお世話　「いいから……………！」

ポフ……………。

当麻は黒子の髪をクシャクシャと、なだめる様に撫でた。

カァ……………ッ！

「な……………ななな」

「ここは上条さんに任せて病人はしっかり休め！」

当麻がそう言っていると黒子は落ち着きを取り戻したかの様に静かになった。

この時会った時とは比べられない程黒子の顔は赤く染まっていたが……………、当麻はそれを熱のせいだと思っている。

黒子の頭から手を放した後必要な薬と店の場所を聞き出し当麻は走り出す。

……。

ドキドキドキ……

「何なんですのー！！  
もうっ！！」

ドカンッ！！！！

『ちえいさー』と言わんばかりに自動販売機を蹴り込む黒子。

この胸の鼓動が何なのか……。  
黒子はこの上なくイラついていた。

## 第8話（後書き）

やっと書けたー！

今週は仕事が忙しかったので大変でした！  
（思い出したくも無い）

私が思っていた以上に、ウフフな展開になってしまっていて自分が一番ビックリしてます！！

感想・アドバイス等お待ちしてます！

次回はどうなるのやら？  
私も考えてません！ 急いで考えます！！

こんな私ですがこれからも宜しく願いしますっ！！

## 第9話

「はぁー……」

深く大きなため息をつく黒子。

「まったく……。あの男にまた貸しを作ってしまったの……」

公園のベンチでふてくされている。

何故ここまで機嫌が悪いのか、その理由はあの太った嫌いなツンツン頭にまーた貸しを作ってしまった為だ。

挙げ句の果てには、どこかそれに感謝している自分がある……。

「はぁ……」

頬に手を当て、再び大きなため息をつく。

「あの方が絡むと何故か妙にに腹立たしいんですの!」

恋の障害になり得る人物に貸しを作るのがシャクに触るのであろう。

「……なに影から人の悪口言ってるんだよ」

「ひゃわーッ!？」

突然の声を掛けられた黒子は、驚きの余り奇声をあげた。

「コレコレ……」

（何もそこまで驚く事じゃないだろ？）

「いきなり後ろから声を掛けないでくださいましっ!！」

「や……悪かったけどさ……」

不意打ちを食らった黒子は、涙を浮かべながらも厳しい目つきで当麻を睨みつけた。

「ほら」



っ！

手に持っていた袋を黒子の前に差し出す当麻。

「お前の言ってた薬。

えーと……、確かこれでいいんだよね？」

「あつ……はい……ですの……。」

そのまま袋を黒子に手渡す。

そもそもこれがメインの目的だったのだ！

当麻の介入でイライラ感しか残っていなかった黒子は、ようやく話しの原点に戻るのだった。

「と、とにかく……今回は本当に助かりましたの」

……？

「別にお礼を言われる程の事じゃ無いだろ？」

人助けは日常茶飯事な為、当麻にとってお礼される程の事でも無かった様だ。

袋を渡した後、当麻はポケットから小銭を取り出しそのまま自販機へ向かって行く。

自販機の前で財布と睨めっこしているが、意を決したのか小銭を勢い良く投入口に入れる。

ガチャーンー！。

「ほれ白井！ お茶」

「ふえ？」

自販機から黒子の胸元に向かってお茶を放り投げる当麻。

「へ？ わ、うわっ！！」

突然飛んできた缶にびっくりしながら、慌てて黒子は受け止める。

「風邪引いてんだったら水分取れよ？」

「えっ！？ あ、あの……」

「遠慮すんなよ。」

飲み物位上条さんがおこつてやつから」

カラになった財布をパタパタと振るわせている。

顔は笑顔であつたが内心では涙を浮かべているのだろう。

（フフ……相変わらずのお人好しぶりですね）

思わず笑みがこぼれてしまう。

缶のフタを開け、当麻が気づかない程小さな声で『いただきます』と呟きお茶を口にした。

……………。

当麻は隣の木に寄りかかりながら、黒子に話しかける。

「白井も病人には変わり無いんだからさ、早く薬飲めよな？」

「お姉様を差し置いて先に自分だけ飲もうなどと……、わたくしには到底出来ませんわ！」

黒子にとって、敬愛する御坂が全ての中心であり、彼女を差し置いて何かをするなんて事は有り得ない事のようにだ。  
……すると当麻が突然黒子に近づき、

スッ……。

再び黒子のスキを突いて前髪を上げて体温を計る。

「やっぱ熱いじゃねえか？  
変な意地張った所で、自分の為にも御坂の為にもならないと思うぞ？」

カアアアア！！！！

急激なスピードで黒子の頬が赤く色付く。

「な……いきなり何するんですのっ！  
そ、それにアナタには関係無い事ではありませんかっ！！！」

ガタッ  
ドンッ!!

両手で当麻の前に突き飛ばした黒子。  
その勢いのままベンチを立ち上がった。

カクン!  
「わっ! あ…あれ!?!」

しかし、身体のバランスを崩してしまい、そのまま自身も前に倒れ込むのだった。

「――!!」

ガシィ……。

「おっと! ……」

……。

間一髪、前に倒れ込んできた黒子をなんとか体で受け止める当麻。

「ふう……ほら見ろっ！ 足元もフラフラじゃねえか！？  
変に意地張って風邪が悪化でもしたら大変なんだぞ！？」

……。

ドクンードクンー！

胸の鼓動が止まらない！ 当麻の声など一切聞こえなかった。  
それを気にする事が出来ない程、今の黒子は頭の中が真っ白になっていたのだ。

「……？ 白井？」

ハッ！！

「い……何時までくっ付いているんですのっ！！」

我に帰った黒子が、当麻を突き放す。

ハアハアと荒く乱れる息をキチンと整えようとするが、高まる体温と耳から離れない心臓の音とが、黒子の平常心をあざ笑うかの様に

狂わせていた。

「早くお姉様の所へ向かわなくてはなりませんの!!」

御坂の為だと言っていた黒子だが、話しを一気に切り替えて、急いでこの場を立ち去ろうとしている。

「ちょっと待てって!? 帰るんだったら送って行くから!」

「結構ですのっ!!」

もう子供じゃ無いんですから一人でも帰れますわ!!」

「そんなんじゃ無くて心配なんだよ!

今日お前ちょっと変だぞ!? そんな状態で一人で帰らせられっか!!」

明らかに様子がおかしいと感じた当麻は、黒子の肩に手を伸ばし引き止めようとした……が、

「余計なお世話ですのっ!!」

バシッ!!

肩に手を伸ばした当麻の右手を平手打ちで叩き落とす黒子。

「毎回毎回毎回……、アナタはそうやって誰にでも優しさをバラまいて……。

お姉様の気持ちも知らずに誰であろうと……。

それが……その優しさがアナタの罪なんですの……！」

ダッ！！

ーヒュン！

「白井っ！」

当麻を罵倒した直後、後ろを振り向き黒子はレポートして消えてしまった。

「くそっ……！」

辺りを見渡しどこにレポートしたのか確かめる当麻。

いくらレベル4の『空間移動能力者』だとしても、そんな遠くまで行けるハズが無いと分かっていたからだ。

パッ



……。

当麻・黒子「あつ……！」

思った通り、50メートル程先に黒子は現れた。

「あ、あのバカ……！」

しかし、目標の座標を誤ったのか、明らかに地面より2、3メートル高く飛んでいた。

（し……しまっ！）

ドサア！……。

「……！ 白井……！」

急いで駆けつける当麻。

黒子は上手く受け身を取ったようだが、左足を捻ったようで、足首の辺りを手で抑えつけていた。

「~~~~ツ!!」

「白井!! 大丈夫か?」

心配そうに声を掛ける当麻。その声を聞いた直後……、黒子の身体が小刻みに震え出し、頬を伝って涙が流れ溢れでた。

「ふ……ふふ……、全然ダメですね。  
結局何かやり遂げようとしても……、いつもお姉様の役には立てませんの……」

地面にポタポタと水滴が滴り落ちる。

「迷惑ばかり掛けていて……。  
うつ……うつ……、全然……お姉様の助けになんて……。  
わだぐじは……、おねえさまの相方しつがぐですの……!!」

遂に黒子は号泣してしまった……。

……黒子の本心を聞いた当麻は、ポケットから居候中のシスターがプレゼントしてくれた有り難いと言われるハンカチを取り出した。

「ほら、足出せ」

「？」

キュ！

捻った左足にハンカチを巻く当麻。

「立てるか？」

黒子の手を取り、立ち上がらせようとした当麻であったが、

ズキッ！！

「くうっ……！」

まだ痛みが残っているのか、黒子は立ち上がる事は出来ても歩き出す事は困難なようだ。

「よっ！」

グイッ！！

「へっ！　な……何するんですのっ！？」

いきなりしゃがみ込む当麻。後ろ向きになって黒子を持ち上げる。  
まあいわゆる『おんぶ』である。

「ちょ……ちょっと待っ……！　降ろしてくださいましっ！！  
この年になって何を考えているんですの！？」

身体を暴れさせ、必死に抵抗しようとする黒子。

「怪我して能力も使えないんだろ？  
いいから今回は上条さんに任せなさい」

決して揺るぐ事が無い、上条さんの紳士魂。  
黒子は恥ずかしさで一杯一杯と言った様子だ。

ミシミシミシッ……！

「イテーーーーッ！！」

熱弁する当麻の肩を思いつ切り握り潰す黒子。

「な・ん・でっ！ アナタにおぶられなくてはならないんですの！！  
いいからさっさと降ろしなさいですの！！」

黒子の最大限の力を用いた握力は、流石に全てを無力化するこの人にも効果はあった。

「イテッ！ ちょ……痛いつて！」

「わたくしではっ！！」

……お姉様の力にはなれないんですの！！」

声を絞り出すように話し出す黒子。

ポタポタと当麻の首筋に冷たい水滴が当たる。

「お姉様は何でも一人で解決しようと思いますから……誰の力も借り  
ようとせず、一人で抱え込んでしまうんですの」

当麻は黒子の手が震えているのが分かった。  
こんな風に喋るつもりは本人も恐らく無かったのであろう、自然と溜まっていた感情が溢れ出してしまったのだ。

……。

「アホか」

・  
・  
・

アホッ！！

自分の耳を思わず疑ってしまう黒子。

「別にそう言う訳じゃ無いだろ？」

「ふえ？」

黒子の表情が一変する。

「御坂は単に心配掛けたく無かっただけで、別にお前を信用して無かった訳じゃ無いと思うぞ？」

「いえ……ですが……」

言葉が詰まる黒子。

実際に御坂が数日間外出していた時も、御坂は自分に助けを求めて来なかったのだから。

「ですが……お姉様を支えられるのでしたら、わたくしでは無くアナタの方が……」

「だ〜か〜ら〜！ お前じゃないとダメなんだって！！」

頭をガシガシと掻きながら黒子の方に目をやり話し始める当麻。

「普段からずつとくつついてっから、気づかねーかもしんねえけど。周りから見たらお前ら二人共、すっげー信頼しあって様に見えるぞ？」

黒子の涙は止まっていた。何か神様にでも救われた様な心境で、心がすーっと晴れ渡っていたのだ。

「だから白井。

相方失格なんて悲しい事言っなよ」

「あ、はい……ですの」

ドキドキドキ……。

また胸の高鳴りが止まらなくなっていた。

でも今までとは違い素直に受け入れられる感じである。胸が心地よくて、なんと言つか言葉で表すと……『嬉しい?』……そんな心境であつた。

「ところで……白井さん。

ちよつとこの大勢はキツいんですけど……」

「?」

「もっとくつついてくれないとさ……その、途中で倒れるかもしれないし……」

……。

そ、それはつまりカラダとカラダを密着しろと言つ事か!?

(~~~~~!~!~)

ジーっと当麻の背中を凝視する黒子。

かなりためらっている様で、赤い顔で睨みつけながら当麻の肩をギューッと抑えていた。



「イテツ！ 痛いって！！」

そんなに嫌なら無理に強要しねえよっ！！」

ーペタン。

……。

黒子は当麻の背中に身体をくっつけ、自分の腕を当麻の首に巻き付けた。

（うおおおっ！！）

わ……わずかに小さな膨らみが背中に！！）

数々のフラグを打ち立てて来たこの男も、元は健全な男子高校生なのだ！ 意識しない方が難しい。

「背中を意識しない事！

それと手の位置に気をつけてくださいまし！！」

「わっ……わかってるっつのー！！」

（相手は中学生、相手は中学生、相手は中学生！

冷静になれ上条 当麻！！ コイツはついこの間まで小学生だったんだ！！）

動揺は隠せなかったが、なんとか心の中で自分に言い聞かせようと  
する当麻。

（ふうー）

当麻の背中に顔を押し付ける黒子は、どこか幸せそうだった。

（何故か、安心できるんですの……）

当麻の背中が意外にも気持ち良かった事と、身体の奥から感じる不思議な温かい気持ちにより、この上なく幸せそうな顔をする黒子。

その不思議な気持ちの正体は何なのか、黒子自身はまだ良く分かっていない……。

……。

「さて……別にコイツを運んで行くのは構わないんだが……」

不安そうな顔を浮かべる当麻。

「……常盤台女子寮ってこの上無く不幸イベントの塊な気が……」

まあ御坂がいるしね。

……つづく!!

## 第9話（後書き）

今回はこれまで体験したことが無いくらい悩みながら書きました。

なので変な所とかあるかも知れません！！

投稿も遅れ気味ですね……。めげずに頑張ります！！

恐らく皆さんも同じ思いをして書いたんですね！！  
なんか……小説家みたいって思っちゃいました！！  
（o^ ^o）

感想・アドバイス等ありましたら宜しく願いします！！

## 第10話（前書き）

どうもお待たせしましたっ！！

最新話更新しますっ！！

沢山の方に毎回応援を受けてホント感謝です。

仕事が本当に忙しくて更新が大変なんですけれども、これからも応援してください！

では記念すべきです。

第10話始まります！

ゝ（ ）ゞ

## 第10話

.....。

「え〜と.....。

白井さん？ 一個質問したいんですけど.....」

不幸な少年。 上条 当麻は今数々の思い出が詰まった常盤台女子寮の前にいた。

「部屋に入った途端電撃ビリビリー！！ .....なんて事ありませんよね？」

当然の質問をする不幸少年。 扉を開けていきなり黒コゲにされたんじゃない。 堪ったもんじゃ無い。

「？ 白井？」

スウー.....スウー.....。

寝てるっ！！

.....しかもめちゃくちゃ気持ち良さそうに。

「・・・マジですか？」

「むにあ……」

……。

「はあ〜」。

「ヤレヤレ……」

無警戒な顔で寝やがって……。

怒鳴りつけて起こすなんて事、この寝顔を見て出来る訳無いだろ。

「まったく、ホント不幸だ……」

軽くため息をついて寮の玄関を通り抜ける当麻。

不安に押し潰されそうになりながらも、勇敢に立ち向かって行くこととする当麻を、一人の少女が後ろから呼び止める。

「うおーい！ 上条当麻ー！。こんな所で何してんだ〜？」

「？」

やけに馴れ馴れしく声を掛けるヤツだな……。

名前を呼んでくる相手の顔を見る為、当麻は振り返って確認する。

「……土御門の義妹？ 今日とは非番じゃなかったのか？」

コイツは俺の同級生の義理の義妹で、名前は土御門 つちみかど 舞夏 まいか

一応、メイド見習いとして常盤台に実習経験を積んでいるのだが……。

「それがなー、掃除ロボに座って掃除したら『お前は休み返上で働け！ メイドの気質を学ばなくてはいけないからな……』って寮監に脅迫されたんだ」

「そ、そうか……」

こんな感じで全くメイドらしく無いのだ……。

（あの寮監なら間違いなく怒るな……）



「上条当麻はこれから白井とどこ無沙汰かー？」

ブフーーーーッ!!

「なっ!?! んなわけ無えだろうがっ!!」

思わず吹き出してしまう当麻。……動揺は隠せなかった。

「フーン……そーか、そーか」

「いや待て! 話し聞いて無いだろ!?!」

当麻の言い訳を無視しながら舞夏は玄関の扉を開けに、扉の横にあるセキュリティのID番号を入力する。

ガチャ。

「まあー、兎にも角にも中に入れ上条当麻」

そい言いながら中に入って行く舞夏。

何かその表情に裏を感じてならないのですが……。

「オイオーイ。

勝手に中に入れて良いのかよ？ また寮監に締められるんじゃない？」

「いつ誰が部屋に入ってくるか分からない……。

そんな緊張感あるシチュエーションで“する”のが一番良いんじゃないかッ!？」

「何をだッ!？」

顔を赤くさせ、焦った顔で言葉を返す当麻。

ヘラヘラと笑いながら舞夏はお掃除ロボの上に座る。

「アドバイスとしては、一つ、あまり大きな声を出させないのがポイントだぞ!」

「いや、知るかッ!」

物凄い形相でそう言い返す当麻。

そんな当麻をしり目に、舞夏はお掃除ロボで回転しながら、尚且つ色んな箇所につつけながら去って行った。

（あんにやるゝゝつ

訳分かんねえ事ばかり言いやがって！）

当麻は顔を赤く染めながら、去って行く舞夏を睨みつける様に見る。

……チラ

舞夏が余計な事を言った為、黒子の顔を思わず確認してしまう当麻。

「んう……」

ドキッ！

ブンブンブンッ！

「待て待て待て！ ちょっと落ち着け俺っ！！」

黒子の女の子らしい反応に驚いた当麻は、我に帰る為、頭を思いっ

きり横に振って落ち着こうとした。

「ハア、ハア、ハア……」

さてと……御坂と白井の部屋は208号室だったよな？」

(……余計な事に体力使っちゃった)

とりあえず冷静になろうと思った当麻は、御坂と黒子の相部屋になっている208号室に向かう為、二階へ上がって行った。

……。

「……………」

当麻が立ち止まったドアの札に、堂々と『208』と書かれている。

緊張した面もちでその場に佇む当麻。

フーッと息を吐き出し、勇気を振り絞ってドアをノックする。

コンコンコンッ！

……。

「？……御坂？」

コンコンコンッ

……。

反応が無い……。

居ないのか？　そう思いつつドアノブに手を伸ばす当麻。

ガチャ……。

「……開いてるのかよ」

不用心にもカギが掛かっていなかったドアをゆっくりと開ける当麻。  
そのまま音を立てないように、静かに部屋に入って行った。

「み、御坂さ……ん？」

い……居らっしゃいますでしょうか……？」

恐る恐る奥へ進んでいく当麻。

今、彼の頭の中にはいくつもの不幸パターンが浮かび上がって来て

いた。

・その1

（実は御坂は着替え中でバツタリ会った瞬間電撃バリバリ〜ッ！という、お決まりパターン）

・その2

（入った瞬間、問答無用で電撃を浴びせる言い訳不可能パターン）

・その3

（今は部屋に居なくて、白井を置いて出ようとした時帰って来る。その後は勝手に勘違いして攻撃される、天然勘違いパターン）

「ええいつ！！ 来るなら来やがれってんだ！！」

覚悟を決めた当麻は勢い良く部屋の中心へ駆け込む。

ズルッ！！

「んなあつ！？」

（く、靴下？）

しかし、勢い良く部屋に入った当麻は勢いが良すぎたのか、床に落ちていた靴下に足を取られてしまう。

「ーッ!!」

しかも不幸な事に、当麻がダイブしに向かう先は、御坂がぐっすりと眠っているベットだった。

「い、いや……。ちょ……。ちょっと待てーっ!!」

ボフッ!

当麻は御坂の枕もとに両手を置き、御坂の顔に覆い被さる形で耐え忍んでいた。

「……が、しかし!」

その衝動により御坂の瞼がゆっくりと開きだす。

パチ……。

「……?」

（ん?? な、何?）

瞼を開けた御坂の目の前には、普段から良く知るあのツンツン頭の少年が、どアップで飛び込んで来た。

「~~~~っ！」

ダラダラと大量の汗を流して固まっている当麻。余りの恐怖に一步も動く事が出来ない！

当麻・御坂「……………」

超・至近距離で目が合う2人。

「や、やあ御坂さん……よく眠れましたでしょうか？」

・・・

バチンッ！！

御坂の髪に肉眼で確認出来るほどの電気が流れる。

「い……い、い」



「ま、待て御坂!？」

「いやーーーーっ!!」

バツチイイイツ!!

猛烈な電撃の槍が当麻に襲い掛かる!

「うおおおっ!!」

神技とも言える反射神経で何とかこれを右手で防ぐ当麻。

(マ……マジ危ねえ!)

本当に間一髪の所であった。

一方御坂は、あまりに突然過ぎた出来事に、完全にパニックに陥っているようだ。

「あ……あああアンタ!!  
な、何で私の部屋に上がり込んでんのよ!!」

「い……いや待て！ 誤解だ御坂さん！！」

髪からバチバチと火花を走らせ、再度電撃が飛んで来そうな勢いである。

「！？ ちょっと……何でアンタが黒子を背負って……！！  
説明しなさいよっ！！」

「分かった！ 分かった！ 話すからその電気どっかにしまえ！！」

カクン……。

「あれっ！？」

御坂の電撃を防ぐ為、右手を前に突き出しながら後ろへ後退して行く当麻であったが、そのまま反対側のベットに気づかず足を取られて倒れてしまう。

ドサッー。

……コロコロ。

「ちょっとアンタ達何やってー！

・・・んのよ……」

表情が凍りつく御坂。

ベットに倒れた際、当麻はまたもや自分のフラグ体質が起こした不幸に陥っていた……。

「んっつ？ ……何事ですか？」

「し……白井……」

どういう倒れ方をしたらこうなるのか……。

おぶってたハズの黒子は“何故か”当麻と向かい合い、さらに当麻の手が“何故”か黒子の胸に触れていた。（というよりむしろ驚掴み？）

御坂・黒子「「！」「」」

……この光景は一度見たことがあるな？ デジャブですか？

当麻の頭の中で眠っていた僅かな不幸の記憶が蘇る。

「な、ななな！？」

か、上条さん……ア、アナタこれは一体どう言つつもりですの!!」

「ま……待て白井っ!! これは事故だ!! 絶対に不幸な事故だっ!!」

「ほう……アンタはそんな状況でもまだ自分は不幸だと……。  
ほほう……?」

御坂の体から激しく火花が流れ出る。

「……お姉様?」

「ちょ……お、おいっ! 御坂!」

「問答無用よっ!」

御坂は自分の能力をコントロールして手の平に集中する事で、電気を一ヶ所に集め出した。

「お姉様っ! 待ってくださいまし!!」

「！！——黒子？」

当麻の前に飛び出して盾になろうとする黒子。御坂はその行動に驚いたのか口をポカ〜ンと空けている。

「確かにこの殿方は、優柔不断で人畜無害、さらに変態な上に女つたらしのクソ野郎ですが……」

当麻・御坂（いや……そこまで言いますか？）

「根っこがしっかりしていて……自分の不幸は受け入れても、他人の不幸は見過ごせない様な甘い方なんですのっ！！」

両手を横に広げ、対抗意識をあらわにする黒子。

「……………」

「お姉様っ！」

黒子が大声でそう叫ぶと、「はぁ」と息を吐き出し、御坂は電気を纏っていた右手を下に下げる。

「み、御坂……?」

御坂の体から漏れていた電流も徐々に収まっていくのだった。

「ふう……バカね……」。

コイツがそう言うヤツだって事ぐらい、ずっと前からわかっていたわよ……」

腰に手を当て、坦々と話し出す御坂。

「大方、風邪で体調を崩した黒子を見過ごせなかった……って所でしょ??」

「お……お姉様……」

(……………)

いやいや……分かってたんならそう言えよ!!

……と、ツツコミたかった当麻であったが、空気を読んで自粛するのだった。

「まあ！　なんて寛大な心をお持ちでっ！  
それでこそ常盤台のエースですわ！！」

「こ、こらっ！　黒子離れなさいっ！！」

「さてさて、邪魔者はそろそろ退散しますかね」

無邪気に振る舞う女子中学生2人を完全にスルーして、ベットの  
上から立ち上がる当麻。そのままドアの方へ向かって歩いて行く。

「あら、上条さん？

もう帰られるんですの？　もう少しゆっくりいっても宜しいです  
のに……」

「いや、これ以上ここに居るのも悪いしさ……」

恐らく単純に、これ以上面倒事に巻き込まれたく無いだけだと思っ  
つのだが……。

「なら下まで送って行きますわ！！」

「いいよ別に……、それより早く風邪治せよな」

ポンツと黒子の頭を撫でる当麻。黒子の顔は再び赤くなる。

「お前もな、御坂」

「わ、分かってるわよそれ位!!」

いつも通りの反応に安心した当麻は、少し微笑みながら部屋を後にした。

……。

「行ってしまったわね」

「何よ黒子？」

あの馬鹿が絡んでんのに今日はやたらと素直じゃない」

「い……いえ!? 別にそう言っ訳では……」

「?」



焦った顔で誤魔化そうとする黒子。その様子に御坂は何か違和感を感じていた。

「黒子？　なんか私に隠し事してない？」

「お、お姉様に隠し事だなんて……。めめめ滅相も御座いませんわっ！！」

「……そう。  
ならいいんだけど……」

……。

「はぁ〜、疲れた。  
ホント疲れた……帰ったらゆっくり休むか……」

今日1日だけで大分体力を使い果たした上条さん。足取りも重そうで、ズルズルと引きずる様に歩いている。

グウ〜ッ！

カッコ悪く、腹の音が大音量で周囲に鳴り響いた。

・  
・  
・

「いやー……。考えてみれば、もうお昼過ぎてるしな。腹が空くのも自然現象……」

ここで当麻はある重大な事に気づくのだった。

「ああ~~~~つ!~!」

頭を抱えてその場で奇声を上げる当麻。  
顔はどんどん青ざめていき、体が固まって動かなくなってしまった。

「インデックスにお昼ごはん……。  
わ、忘れてた……」

相変わらず当麻の不幸スキルは絶好調この上無い……。

くとある学生寮

「うゝっ！ とゝうゝまゝッ！！」

何の連絡も無しにお昼が無いってどういう事なのっ!？」

奥歯をギリリと光らせ、床を転がり回るインデックス。

歯をガチガチと鳴らし、このイライラの根元を待ちわびている。

「今回という今回はもう許せないかも!!」

当麻が帰ってきたらどうなるのか……見なくても想像できそうである。

「とゝゝまゝッ!!」

つづく。

## 第10話（後書き）

どーもです!!

いやはや約2週間ぶりの更新ですよ!!

最近は本当に仕事が忙しくて大変でした。

いつもハイテンションな私も一気に疲れが溜まっちゃいました。  
( ; )

でもここ来るとヤッパリ元気がでますっ!!

みんなありがとうっ!  
(´・`ゞ

## 第11話（前書き）

ちよつとスランプ気味？

ネ、ネタが今までその場しのぎに思いついていましたが、最近はなかなか出てきません！

これはなんとか脱出せねばなりませんね。

最近改めて思った事は、黒子や結標の能力って普通に……いや、レベル4の中ではかなり強過ぎませんか？

## 第11話

「ふう……」

慌ただしく公園内を走り抜ける1人の少女。

「危ない危ない。」

危うく寝過ごす所でしたの」

前日の風邪が原因で著しく体調を崩してしまった黒子。

ーヒュン。

「ホッ……」。

ちゃんと能力は使えるみたいですね」

能力が使えるかを確認めるかの様にテレポートを使う。

「前日のゴタゴタで油断しましたの……完全に遅刻ですわ！」

ざっくりと今の状況を説明しますと……、

朝起きると風邪は完全に治っていたのだが、目覚まし時計が何故か機能せず、気が付けば針は遅刻ギリギリを刺していた。

と、言った感じである。

ちなみに御坂の風邪は、まだ治っていない……。

……。

「みゃ〜」

「？」

（猫？）

黒子は動物に特別興味がある訳では無かったが、思わず足を止めて反応してしまう。

そして、そのまま鳴き声がする方へ歩み寄ってみる。

（たしかこの辺りから……）

ガサガサッ……。

「みゃあ〜」

「あら？ …… アナタは確かあの時の……」

草むらの影から葉っぱや小枝をかき分けて出てきたのは黒い小猫。  
あれ？ …… 一度どこかで見た事があるような。

「以前、木の上で降りられなくなった子猫ですわよね？」

「にゃー」

まるで黒子の問い掛けに答えるように鳴き声をあげる子猫。その愛くるしい姿に思わず微笑んでしまう。

「ちょっと可愛いではありませんの……。  
わたくしの事を覚えて下さったんですの？」

「にゃー」



自分の事を覚えてくれていた事に、満更でもない様子で子猫を抱きかかえる黒子。

御坂の猫好きがちょっと移ったのかもしれない。

「……………はあ。」

……………不幸だ。俺は何もしてないのに何でこんな目に合ってたんだ？」

「？」

後ろの方から何やら聞き覚えのある声がする。

そして最近は特に良く聞くあの声のような……………。

「くそおゝゝ、インデックスの奴、昨日の歯型がくつきり残ってやがる」

！！

（あ……………あのツンツン頭……………）

黒子の視線の先には体中謎の歯型だらけに包まれた当麻の姿が……………、

「目覚ましも壊れて完全に遅刻か……。ホント俺が何をしたら言うんだよ……」

（ま、マズいのです……このままでは鉢合わせに！）

辺りをキョロキョロと伺い、隠れられる場所を探しだす黒子。数10メートル先に当麻の姿。いつ気づかれてもおかしくない状況である……！

（と、といあえず……、あの木の影に！）

考える隙など無かった。必死にベンチの側にあった木の影に急いで隠れ込む。

「はあ……はあ……」

な、何故あの方は毎度毎度タイミングの悪い……」

トクン…トクン……

……。

「……って……！」

なんでわたくしが隠れる必要があるんですの！？べ、別に何かした訳では無いんですし……あの類人猿から身を隠す理由なんて無いではありませんかっ！！」

冷静に考えてみればそうである。

確かに隠れる理由は黒子には無かった。

（そうですわっ！

べ、別に今ここから出ても何の問題は……）

ギューッと抱いていた子猫を胸に押し付け、赤面しながら自問自答を始める。

すると……、

「~~~~っ！

ミヤ~~~~っ！」

ドキッ！

（ちょ！……声出したらバレ……っ！）

「ん？ ……猫？」

子猫の鳴き声に反応して当麻が歩みを止めてしまった。

（ッ！！）

「何かこっちから声が……」

（マズいのですの……！！ こちらに段々近づいて……！！）

こっちへ近づいて来る当麻に、顔を真っ赤にしながら挙動不審に慌て始める黒子。

（あ、あら……？）

さっきの子猫は？ ……どこに行っ たんですの？）

先ほどまで腕の中にいた子猫の姿が無い。  
キヨロキヨロと黒子は辺りを探してみる。

（なっ！！）

「みゃ〜」

ガサガサッ……

子猫は黒子が一瞬目を離れた隙に、草をかき分けて当麻の方へ向かっていった。

「ちょ……！ そっちに行つてはっ……！」

ガサガサッ

「みゃ〜」

「……あれっ？」

お前確かあの時の……」

当麻は草むらから現れた子猫を懐かしそつに抱きかかえ、ヨシヨシと小さな頭を優しく撫でまわした。

「はは……久しぶりだなー」。

俺が誰だか分かるか？」

「~~~~ッ!!」

ダラダラと汗を流し、一歩たりとも動けずにいる黒子。  
もはや頭の中は混乱状態に陥っていた。

スル……。

「うおっと!」

「にゃ〜」

突然子猫が当麻の腕をすり抜け、黒子が待つ木の裏まで歩いて来る。

「? ……なんかそっちに良い物でもあんのか？」

「!?!?!」

……。

「にゃ？」

??

「何もねえよな？」

子猫と当麻が立ち止まった先には特にコレといった異変も無く、普通に雑草が細々と生えているだけである。

子猫は不思議そうに首を傾げ、それを見た当麻も同じ様に首を傾げた。

「……………うげっ！ もうこんな時間！？  
悪いな……………にゃんころ。時間的に本気でマズそうだからもう行くな？」

「にゃー」

最後に、子猫に手を振って別れる当麻。  
自分の携帯で時間を確認しながら、慌てふためいた様子で走り去って行く。

……。

「はぁ……はぁ……」

黒子とはっさに木の上にテレポートしていた。

当麻が居なくなるのを確認すると、腰の力が抜けたかのようにカクンツと膝を着く。

ハッ！

「……………」

不意に黒子は黙り込む。

自分でも不思議でならない……、ある行動に身体が無意識に反応したからだ。

「結局……何でわたくしは隠れているんですの？」



.....。

時間は過ぎてその日の放課後。

「そうですか.....ちょっと遅れてしまいそうな感じなんですか？」

『申し訳ありませんの初春.....。』

佐天さんにも良く伝えておいてくださいまし』

朝の遅刻の罰により黒子は居残り掃除をさせられていた。

初春達とファミレスで会う約束をしていたようだが、それには遅れてしまいそうである。

「まあ、それはしょうがないですよ.....。

こっちは佐天さんと一緒に待っていますので、そんな急がなくても問題無いですよ?。」

『こちらも出来るだけ早く向かうようにしますの』

ピ.....。

携帯の電源ボタンを押してひと息つく初春。

「白井さん、ちょっと遅れるのか……珍しいなあ」

ファミレスのソフトドリンクを飲みながら1人席で呟く初春。佐天は少し遅れているのか、まだ店内に来ていないようだ。

……と、そんな事より！

（最近の白井さんはちょっとおかしい……）

初春はここ数日間の間、今まで無かった黒子の変化に気づき始めていた。

（最近ぼーっとしている事が多いんですね……？）

まあ、なんとなく原因は分かってきているのだが……。

「やっぱりあの上条さんって方が原因としか考えられませんね……！  
……でもなあ」

初春は思わず頭を抱え込んでしまう。

理由は1つ。

（御坂さんも……多分上条さんの事……。と言つか絶対……！）

御坂と黒子。もし、取り合いにでもなつたとしたら、恐らく黒子から自重してしまうであろう。

初春は親友として黒子が幸せになって欲しいのは当然な訳で……。かと言って御坂にも大変恩があり、こちらも幸せになって欲しいと言う気持ちは本物である。

と、まあ色々1人でお悩み中の初春なのです。

「はぁ……」

「お待たせいたしましたー」

ウェイトレスのお姉さんが初春の後ろから声をかける。

「こちらジャンボフルーツパフェになります」

「わぁーきたきた!!  
きましたよー!!」

初春の顔が一変、満面の笑みに変わる。  
嬉しそうな表情でパクパクとパフェを口に運んでいる。

「うっんっ!!  
美味しいですっ! 美味しすぎますよ!!」

初春は、今が一番幸せそうである。

……。

「あ~~~~っ!!」

外で大声を出してファミレスに座っている初春を指差す佐天!  
周りにいた他の学生達も佐天の声に反応して驚いている。

「初春う~~~~!!  
一人で楽しくパフェなんて食べてくれちゃって~~~~っ!!」

ガラス越しにパフェをおいしそうに食べている初春の姿に、佐天の背後から炎が立ちこめている様に見える。

目の錯覚か？

周りの学生達も自分の目を疑っている。

（よし……こうなりや脅かしまくってあげようじゃない！）

挟んでいた道路を急いで横断して、向こう側にあるファミレスへ駆け足で向かって行く佐天。

「えっ!？」

「ん？」

すると、駐車していた車の影から忽然と当麻が姿を現し、ブレーキの利かない佐天は走った勢いそのまま当麻に突っ込んで行く。

当麻・佐天「!？」

ドンッ！

……。

真正面からぶつかってしまった2人は、当麻を下敷きにした状態でギャグマンガの様に折り重なる。

「……いたたた。ど、どうもすみません」

（お、重い……）

「あれ？ 佐天さん？」

席に座っていた初春が、自分の窓の外で騒ぎを起こしているのが自分の親友だと気づいてヒョイっと立ち上がった。

「え、ええっ！？

なんで上条さんが一緒に！？」

窓にがつついて外を伺う初春は、さっきまで噂をしていた人物が今その場にいる事に『ええ……！』と驚きの声をあげている。

（痛つー！。やべえ……俺最近ぶつかってばっかな気が……）

「あれっ？ 上条さん？」

ぶつかった相手が当麻だった事に更に驚いてしまいが、それ以上に目の前のガラスに自分の親友が顔を押し付けて、もの凄い不細工な顔になっていた事の方が問題であった。

「それにしても、またこんな所で会うなんて偶然ですね。

……あれ？ その腕の傷なんですか？」

「いや……これは……」

佐天は当麻の腕の傷（よく見ると歯型）が何の傷なのか不思議でしようになかったので、あえて口に出して聞いてみた。

「佐天んトコのがサツなお嬢様2人組に振り回された挙げ句、最後にはこの結果としか……。  
はあ……不幸だ……」

「へっ？」

カランカランー

「佐天さーんっ！　だ、大丈夫でしたか？」

流石に心配になったのか、初春が店のドアからオドオドしながら飛び出して来た。

「か……上条さん！？」

もしかして、あれから御坂さんと何か進展があったんですか！？」

（うおっ！？）

ズイズイと、佐天は当麻に顔を近づけ、寄り詰めて来る。

「進展！？　と言うか……

最初は昨日、白井から風邪気味だって聞いたんだけど」

（えっ！？）



初春が2人の下に到着した時、一番最初に『白井』と言う単語が飛び出したので、思わず驚いてしまう。

「そしたら白井の奴、自分も風邪ひいてるクセに薬買いに行こうとしててさ……」

そんなの見てらんなくて、おぶってく事にしたんだ」

初春・佐天（し、白井さんとおんぶする仲にまで発展!?!）

「常盤台の寮まで白井の事運んでったんだけど……」

初春・佐天（（ゴク……））

「まあ色々とゴタゴタになりました」

（え〜っ！ 御坂さん達と一体何があったんですか!?!）

（むしろそこが一番気になります!?!）

当麻が言い放った衝撃の一言に、驚きを隠せないでいる2人。

「まあ、そんな訳で……今日くらいゆっくり休んで寝させて貰おうかなと」

そう言い残すと当麻はその場で立ち上がり、ケツをポンポンと叩いてホコリを落とす。

初春・佐天（……………）

（初春……………）

（佐天さん……………）

初春・佐天（（このまま逃がしてなるものか——！！）（

「じゃあな。そろそろ俺は帰……………」

ガシッ！

……………。

（ん？　なんで腕握られてんの俺？）

佐天は帰ろうとする当麻の腕を掴み、ニコッと可愛らしい笑顔で当麻に応える。

「お、おい……佐天……？」

ガシッ！

（んなつ！？）

更に反対側からも初春が腕をギュッと掴んで来る。

「上条さんっ！

せっかくですから私達と一緒にお茶しましょう」

「そうしましょうっ！！　上条さんに聞きたい事なら山程あるんですから」

「おっ！　おい！？」

両手に花状態で顔を赤くして戸惑っている当麻であったが、初春と佐天の2人に半ば強引にファミレス店内へ引っ張っられてしまう。

……。

「ふう……、カミヤ……ん……。  
つくづく罪深い男ぜよ」

その一部始終を見ていた金髪サングラスの男が携帯を開いてメールを打ち始めていた。

「カミヤん…… やっぱりカミヤんには一変地獄を見せないといけな  
いみたいだにや……」

そう言い残すと、男は暗闇の路地へと姿をくらました。

……。

「ん……っ!!  
やーっ と掃除が終わりましたの……」

居残り掃除の罰からようやく解放された黒子は、気持ち良さそうに腕を伸ばしていた。

「さてと……早くファミレスに向かわなくてはなりませんわね」

それにしても……。

「あんの類人猿が……！  
結局、あのクソウニのせいで一日中イライラが収まりませんでしたの……！」

自分の拳をミシミシと、力強く握り締める黒子。

「……フンッ……！」

バキイイイッ……！！

鬱憤晴らしなのか、目の前の電柱に鉄矢を貫通させる。

「……ハッ！ もうこんな時間ですよ……！」

黒子は自分の携帯で時間を確認しながら、  
急ぎ足で初春達の下へ向  
かって行くのだった。

つづく

## 第11話（後書き）

書き終わって思いましたっ！！

最初の黒子の隠れる下りいらないんじゃないかね？  
って！

ほら、アレですよ……。

今までは普通に接していたのに、意識しだすと急に顔が見れなくなるっていうアレですよ！

分かった頂ける方に伝わればヨシとしてください！！

一（ 3 ）一

## 第12話（前書き）

最近、弟にこの作品を読ませました。

その感想でショックだった事があります。

「ねえちゃん、少女マンガ読み過ぎじゃね？」

……はっ？

少女マンガなんて読んだ事が無いわーっ！

これからも頑張ります！

○（、（）○

（一体なんだったのか）



## 第12話

何なんでしょうか、この状況は……。

「……」

何故、今俺は女子中学生二人組と仲良くお茶をしているんでしょう？

視線を正面に移すと、その二人組の少女がニコニコと笑いかけてくる。

「どーしたんですか上条さん？

何か飲みます？」

「ここのジャンボパフェ美味しいんですよー」

あからさまに不自然だろこの状況……。

「えっと……何か俺がここに座ってんの不自然じゃねえか？」

佐天・初春「「そんな事ないです！！」」

その迫力に圧倒され、何の抵抗もできないでいる当麻。

「では、上条さん！  
そろそろ話してもらいます……」

「な、何を……」

「とぼけないで下さい。  
御坂さん達との事ですよ」

ガクッ

この質問をするのは当然だ、と言わんばかりに佐天と初春は問いかける。

「……………あのなあ。  
別に俺はアイツらとそんな仲良い訳じゃ無いし……………、第一にアイツら、俺の事嫌ってんじゃないかねえか!？」

(うわぁ……………思ってた以上に鈍感)

（本当に気づいて無いんですね……）

当麻の天然っぷりに、予想以上の衝撃を受ける。

「で、でも……学園都市で第3位の实力を誇る、御坂さんに負けず劣らずの實力って凄いですね」

空気を読んで話しを変えた佐天。

「そう言えば……上条さんのはどんな能力使ってますか？」

（あつ……そう言えば……）

御坂に勝る實力の持ち主と言う事で、佐天達は当麻の事をかなりの上位能力者だと思っている。

しかし、それはむしろ当然の事と言えよう。

……。

「いや、俺はただの無能力者（レベル0）だけど……」

「・・・・・・・・」

「えっ？」

「な、何を言っ……？」

「そ、そんなハズ無いじゃないですか!？」

「だって……御坂さんと……レベル5と戦って渡り合えるのが、私と同じレベル0なんて!!」

「さっ、佐天さん!？」

「自分と同じレベル0の人間が、能力を持つ人間に……ましてやレベル5なんかにかなうはずが無いっ!」

「過去に、身にしみてその事を知った佐天にとって、当麻の発言は耳を疑う衝撃的なものだった。」

「（な、何をそんなに……）」

「上条さん……、本当にレベル0なんですよね?」

(……………)

はあ。

一つため息をついて、当麻は答える。

「確かにちょっと特殊かもしれないけど、俺自身は本当にレベル0だよ。」

そこにウソ偽りは一切ございません」

「……………」

黙り込む佐天。

初春はそんな佐天を心配そうに横から見ていた。

「はあ……………」

スゴいんですね…………上条さんって」

??

「だって、そうじゃないですか……………」

私と同じレベル0なのに、御坂さんや白井さんと対等な立場で話せて……………」

そう言うのって、普通出来ないですよ」

（佐天さん……）

どんなに御坂達と対等に話そうと努力しても、そこには能力を持った者と、何も持たない者との、決定的な差がある。

相手が持っているモノを自分は持っていない……。

そこで生まれるのは結局、憧れや尊敬、時には嫉妬のような感情も芽生えてしまうものだ。

……過去に過ちを犯した佐天は、それらの感情を表に出さないよう努力してきた。

しかし、正直な所……能力者への憧れは簡単に消せるものではなかった……。

……。

「何言ってるんだお前？」

佐天・初春「「!？」」

えっ？

「能力がどうか、レベルがどうか、そんなの全然関係無いだろう？」

佐天と初春は耳を疑う。

能力がものを言うこの学園都市で、そんな事を言う学生を見たことが無かったからだ。

「能力が使えるかどうかだけで人を判断されて堪るかよ。結局の所、一番大事なのはその人の中身じゃねえか。……能力なんて二の次で十分だろ？」

佐天・初春（……………）

……驚いた。

こんな人がいるなんて、……こんな考えの人が学園都市にいるなんて、全然知らなかった。

佐天はどこか清々しく……何かに助けられたような気分でした。

そんな佐天の様子にホッとしたのか、初春も少し嬉しそうに微笑む。

……。

「あつ……悪い。」

「ちよつとトイレ行ってくるな?」

「えつ? あつ……ハイ」

席を立ち、トイレへ向かって行く当麻。

その後ろ姿が見えなくなったのを確認して、佐天がポツリと呟く。

「やつぱ、思つてた通りスゴい人だったね?  
上条さんって」

「はい……本当にスゴいです……」

お互いの顔をみてクスツと笑う佐天と初春。

「少しお互いの顔が赤くなっているのは、ちよつとだけ当麻がカッコ  
良く見えたから……」と言うのはヒミツである。

ブー……ブー……

??



何かが震える音がする。

音がする方に視線を向けると、当麻が置いていった携帯電話がバイブ機能を使って、ブルブル震えていた。

「……………ねえ？」

どうやら電話が掛かって来てるみたいだ。  
そこで佐天がある提案を言い出す。

「電話に出てみようか？」

「ええ！？

だ、ダメですよーっ！ 人の携帯に勝手に出るなんて！！」

「大丈夫、大丈夫。

ちよつとした悪ふざけだから」

「ちよっ！ ……佐天さん！？

初春の静止を振り払い、佐天は当麻の携帯を開いて通話ボタンを押した。

「もしもし？　こちら上条です」

……ピキッ。

はて、何か今『ピキッ』って……？

『えー……カミヤん？？

ずいぶんとまた線の細い声になってるやないか？

もしかして『逆声変わり』しちゃったとか言うんやないやろうな？』

電話の向こうに居るのは、当麻と同じクラスの青髪　ピアス（あおがみ　ピアス）

当麻とはデルタフォースとまで呼ばれている親友の仲……のハズだ。

「佐天さん！？

ちよつと替わって下さい！！」

「あつ！　ちよつと初春」

佐天から携帯を奪い取って電話に出る初春。

「あの、スイマセン!?  
私達上条さんとは知り合いで……。  
今、一緒にお茶してたんですけど……」

ビキッ!

あれ?　なんか電話越しにスゴい音が……。

「それで、上条さんは今トイレに行つてまして……」

『ああ……。それは別にええんよ。  
そんな大した用事でも無かつた事やし……。  
――ただあ……。……』

「??」

『君達つて歳いくつなん??  
ずいぶんとまた可愛らしい声してはりますが?』

その質問にクビを傾げる初春であつたが、言われた通り正直に答える。

「え……と、私達は二人共『中』ですけど……?」

ブチイイッ!!

何かが切れた音がした。

『そつか、そつか』。  
よう分かりました……。じゃあどこかでまた会えたらええね  
ほんじゃ、ワイが電話した事はカミちゃんには内緒で!?!』

「えっ!?! ちょ……」

プチー。  
ツーツー……。

切れた……。  
何だったのだろうか?

ーヒュン。

「ふう……」。

やっと着けましたの」

「あつ……白井さん！」

突然テーブルの横へテレポートして現れた黒子。

「遅れてしまい申し訳ありませんの。」

今日は色々と運が無かったみたいで……」

そう言つて、さつきまで当麻が座っていた席に腰を掛ける。

まあ、佐天と初春が二人して座っていた為、向かい側に座るのはし  
ようがないのだが……。

佐天・初春「あつ！……」

「はぁ〜。スッキリしたぁー」

……当麻がトイレから戻つて来た。  
何か嫌な予感が……。

佐天・初春（……………）

「ふう……」

そのまま当麻は、黒子に気づかぬまま隣に座る。

黒子も隣から気配を感じたのか、横をチラッと振り向いた。

当麻・黒子「「ん?」「」

・・・

当麻・黒子「「ッ!?!?!?」「」

当麻と黒子は、ほぼ同時に立ち上がり、動揺を隠せぬまま互いをビシッと指差す。

「な、なななな何でアナタがここに!?!?  
何平然と当たり前のように座っているんですのっ!?!?」

「ま、待て白井!!  
俺はこの二人に誘われたから……」

「ハアッ!?!」

笑わせないでくださいましっ！！  
何で初春達がアナタみたいな野生動物を誘う必要があるんですの！  
？」

や、野生……！？

「野生動物って何だよっ！？」  
せめて動物園に飼育されてろよ！！」

「そ・こ・は関係無いですのっ！！」

相変わらずガミガミと言い争う二人を見て、佐天と初春は思う。  
ああ、平和だなぁと……。

「それ以上喋りやがりましたら、この鉄矢を汚らわしい体の中にテ  
レポートしますわよ！！」

「ば、バカッ！！  
それやったら殺人だろうが！？」

……。

「平和……ですね？」

「た、多分……ね？」

つづく



## 第12話（後書き）

今回は佐天と初春がメインでしたね！

次回は、黒子を目立たせたいと思います！

……出来る限り頑張ります。

それではまたっ！！

（＊＾Ｏ＾＊）

### 第13話（前書き）

黒子をメインにするのは残念ながら不可能でした……。

む、無念ー！

か……カミヤん。

小説って難しいぜい！

○（、、）○

### 第13話

何なんですの……この状況は？

チラッ……。

黒子が横を向けば、隣に座ってるのはちょっと不幸なミスターツンツン頭。

（なんで、この類人猿と仲良くファミレスでくっちゃべってはいなくてはいけないんですのっ！？）

ここは御坂達、いつものメンバーとの行き着けのファミレス。  
そして、いつもの窓側のボックス席である。

シーン……。

しかし現在、この一席だけが会話も無い、何とも言えない静けさに包まれていた。

（な、何ですの？ この妙な静けさは……？  
わたくしが加わった事が原因なんですか？）

どうかこの雰囲気打ち消さなければいけませんの！  
黒子は何か話題になる話しをしようと踏み出すが……。

しかし、何を話せば……。

（だ、第一にわたくしは今朝もお会いしていますし……）

でも、直接は話してないですね？  
むしろ隠れてただけ。

（あ、あの時隠れてしまったのはっ！！  
あ、あれですよ！ その……ゴニョゴニョ）

実は今も、当麻の顔を凝視出来ずにいる黒子。

一方……。

当麻サイド

・・・

（うオオい！！ 居辛えよっ！！）

何も喋らず5分以上！

女子中学生と同じ席にいるこの状況はこの上なく居辛い。

（何！？ 俺また何かしました？

ただでさえ3対1の状況でやりにくいってのに！）

ウーロン茶を飲んで頭を冷やしながら、当麻は話題の糸口を必死に探っていた。

「えっと、そう言えばさ……」。

そっちの2人は何か俺に聞きたい事があつたんじゃ？」

いても立つてもいられなかったのか、当麻が話を無理やり戻す。

「あ……それはそうだったんですけど」

（白井さんがいる前で聞けませんよ、上条さん……）

まあ当然の事であるが。

『上条さん！ 御坂さんとの関係について何か一言！？』  
とか、

『白井さんとはどこまで発展しているんですか！？』

なんて……。

言った瞬間、黒子がどうなる事やら……。

想像するだけで修羅場は必須である。

なのであえて佐天は聞かない……いや、聞けなかったのだ……。

「えーと。上条さんは御坂さんをどう思っているんですか？」

ブフウーッ！！？

（う、初春ッ！？）

い、いくら何でも唐突過ぎじゃないですか！？

初春以外の全員が、飲んでいたドリンクを一齐に吹き出してしまう  
という大惨事に。

「な、な、ななな……！？」

持っていたコップをプルプルと震わせる黒子。

「ちょ……ちょっと初春っ！？」

「？」

佐天の額から汗がダラダラと流れ出てしまっている。

一方の初春はキョトンとした顔でドリンクを飲んでいる。

（や、やはりこのサルはお姉様の事をそのようないかげしい目で……！）

「いや待てっ！？」

何だよその人を見下したような目は？」

黒子の猛烈に冷たい視線が当麻の胸に突き刺さる。

「別に御坂をどうとか、考えた事ねえよ……！

確かにすぐキレるわ、電撃ビリビリするわ、年上に敬意を払わないわで迷惑な奴だけど……根は良い奴だし……」

「つまり、恋愛対象としては、まだ見てないって事ですか？」

グフッ！？

再び、吹き出す佐天と黒子。

初春のどストレートな質問に少々焦りながらも、黒子は当麻の答えに何やらホッとしたような、でも御坂を何とも思っていない！？　なんかムカつくような……。

複雑な心境である。

黒子は気を紛らわす為に水を口に含める。……が、

「良かったですね。白井さん！  
まだ御坂さんとは何も無いみたいですよ？」

ブーッッ！！！！

本日3回目の吹き出し。



「ちょ……初春う!?!」

佐天もビックリである。

「な、なな何でわたくしにそれと言つ必要があるんですのっ!?!」

「え? ……あっ! すみません『ついッ!」

(つい?)

『つい』って何だ?

初春の一言に当麻は首を傾げる。

「だああああっ!!」

皆さんストーップ!!」

佐天がガマン出来なかったのか、両手を広げて静止に入った。

「い、一旦落ち着きましょうか!  
初春もなんか食べるでしょ!?!」

「は……はいっ!! 頂きます!」

何か慌てて会話しているような……。

……。

「っで!?

上条さん……アナタはいつまでここに居るつもりなんですか?」

(こっちが聞きてえ位だよ!!)

何で? 何でまた俺が邪魔者扱い?

こっちは無理やり連れて来られたんですけどっ!?

と、心の叫びを伝えたい上条さん。

「まあまあ……。

白井さんもあんまりトゲトゲしないでくださいよ……。」

「別にわたくしはそんなつもりは……」

やや黒子は頬が赤らむ。

口元をモゴモゴとさせながら、次に出す言葉を探しているようだ。

「そ……そもそも!!」

上条さんが普段からいかがわしい態度を取っているのがいけないんですのっ!!」

で、結局次に出てきた言葉は、俺へのとばっちりですかいつ!

当麻は顔が固まり、数秒間動けずにいた。

「大体アナタはどうしていつも、いつも、女性とのいざこざが多いんですの!?!」

ついに始まりました。

上条さんへの『女性トラブル尋問タイム』

「言われてみれば……、結構そういつの多いんですか?。」

「ま……まあな……」

佐天の問い掛けに声を濁らせる当麻。

まあ、なんと言つても、当の本人でも原因が分かってないんですから答えようが無いんですが……。

「ふんっ！」

所詮、アナタは野蛮な女つたらしのケダモノと言つ事ですわー!!」

「か、上条さんは皆さんに愛されていると言つ事ですわね!!」

若干、初春が当麻のフォローに入る。

先程までの失敗を挽回しようとしているのだろうか……。

「初春……この野蛮人に助け舟は必要ありませんわよ!!」

「い、いえ……私はそんなつもりは全然っ!!」

両手を前に出して否定しているつもりだろうが……、恐らく彼女はウソをつけないタイプなんだな……。  
当麻は冷静に初春の性格を見抜いた。

「第一に、今この状況も一般的にどうなんですか？  
女子中学生3人に囲まれてファミレスで食事って……。  
一体どこのエロゲーの主人公ですのッ!？」

「そうだけい……エロゲーするのは妹だけで十分だにゃあー」

……んっ!？」

何か今変な声がしたような……。

佐天・初春（……あっ）

目の前にいる佐天達の様子がおかしい。  
何故か、視線が別の方を向いている。

佐天達の視線をたどり、当麻と黒子は自分達の後方を振り向いた。

「うわっ!？」

「おおっ、カミヤん……相変わらずモテモテみたいだにゃあ〜」

後ろの席に座っていたのは当麻と同じクラスの、そして魔術サイドと科学サイドを支える人物。  
つちみかと  
土御門 もとはる 元春が座っていた。

「つ、土御門ッ!？」  
お前、どうしてここにっ!？」

「ふう〜」。  
カミヤン……俺だって忙しいんですたい。つまらない事で出て来るハズが無いだろう……」

(……何!?)

まさか、また魔術側から何か動きが!？  
そう思った直後、当麻の目つきがキリツと変わり、その額からは汗が染み出していた。

「土御門……まさかつ!」

「ああ……」。  
『勘違いしているロリコン野郎をぶっ殺せ』という提案が、今承認された」

……はい？

「我がクラス全員一致の提案ですたい……。悪いがカミヤんに拒否権は無いにやー」

えーと……。

当麻の顔からダラダラと嫌な汗が流れ出す。

「えーっと。

土御門さん……それってつまり……」

「安心しろいカミヤン……。骨だけは残しといてやるにやー……」

土御門がニヤリと笑みを浮かべた瞬間。当麻は本能からだろうか、次の行動に移っていた。

「わ、ワリイー!!」

急用が出来ちゃった!! すまねえけど先に帰らせて頂きますっ!!

テーブルの上に千円札を置き、急いで店の外に向かって走り出す当麻。

「ちよっ……」

「か、上条さん!？」

いきなりの展開に黒子達は呆然としているが、当麻はそれを気にする間もなく出入り口へ向かって行く。

カランカランッ!

「うげっ!？」

外へ飛び出した瞬間、当麻は思わず足が止まる。  
なぜならそこにいたのは……。

「カゝミやゝゝん

お楽しみタイムは終了やでえー」

そこにいたのは当麻のもう1人の親友。

青髪ピアスが両手を組んで立ちふさがっていた。

更にその後方には当麻のクラスメートの男子がズラリ……。



「な……なんだよコレっ!？」

度肝を抜かれた当麻は、口を開けたまま動けずにいた。

「カミヤん……。ワイは悲しいでえ。

よもや親友をこの手にかけてしまっ日が来ようとはなあ……」

青髪ピアスは目元を拭う。まさか涙を流して……る訳はありませんね。

「カミヤん……そろそろ覚悟を決めるにやー。

ロリコンクソ野郎に成り下がったカミヤんの罪は重いぜい」

さらには当麻の背後に既に土御門の姿が……。

ってオイッ!!

「土御門っ!! 何がロリコンだよ!？」

俺がロリコンだってんなら、お前らこそロリコンの遥か上級者だろ  
うがっ!-!」

当麻の的確なツッコミ！

青髪ピアスの後方にいたクラスメイト達はどよめきだす。

当麻が言うように、

土御門 舞夏

青髪 小萌先生

といったように、2人は結構ロリコンである。

「はあ……カミヤーん」

「何を今更……」。

俺らがロリコンなのはもはや当たり前だぜい」

（俺はシスコンだが）

はい？

ひ、開き直りやがった。

「そんな真にロリを愛するワイらを差し置いてロリに走るカミヤん  
……」

「万死に値するぜよ」

（ええええっ！！？）

何でええ〜っ!!?)

余りに理不尽な言いように、またしても当麻は口を開けて動けなくなつた。

そして当麻は……。

「てめえ！ 土御門っ!!」

何なんだよ一体!? おかしいだろどう考えても!!」

――キレた。

余りの強行作戦に当麻は土御門の胸ぐらを掴み、怒りをあらわにする……が!

「にゃー!」。

カミヤン……カミヤンは一変、ハラワタ引き裂かれて死んだ方が今後の為になるハズにゃあ」

っ!?

「いやいや、そんなんなら虐殺アニメみたいに『グチャッ』と、軽くイッた方がカミヤンにとってええって」

「……………」

土御門と青髪は眩しい位の笑顔で言い放った。  
その表情に一気にゾツと寒気が襲う当麻。

当麻は黙り込む。

2人の殺意が本物だと感じ取ったからである。

「お、お前ら……冗談……だよな？  
ちよつと本気で怖いんですけど……」

顔が段々と青ざめていく当麻。

その恐怖レベルは、居候中の暴食シスターの噛みつきを遥かに上回っていた。

「さて……そろそろ死刑執行といきましょか？」

「安心しろいカミヤん……。  
痛いのは一瞬だにやあ……」

ジリジリと間合いを詰め出す土御門達。  
さながらホラー映画のワンシーンのように見える。

「ふ……ふ……」

当麻は涙目になりながら後ろへ一歩、また一歩と後退していく。  
そしてこう叫んだ……。

「不幸だあああ……っっ！！！！」

土御門・青髪「逃がすかぁーっ！！！！」

夕日に向かって激走する3人。

クラスメートの男子達も土御門と青髪ピアスに続いて、雄叫びを上げながら当麻を追いかける。

当麻は……。

彼は果たして生きて帰れるのだろうか……？

……。

「す、凄い事になってましたね……」

「なんか……見てはいけないモノを見てしまった気がしますう……」

一部始終を見ていた佐天・初春・黒子の3人は啞然としている。

特に初春は、体が縮こまりガタガタと震えてしまっていた。

「まあ……上条さんは自業自得ですわ。

日々の行いがああいう不幸を呼び起こすんですの!」

ジィ〜〜〜〜ッ……。

何故かジッと黒子を凝視する佐天。

その視線に多少なりと黒子は怖じ気づいた。

「ま、まあ……あれは少々やりすぎかとも思いますが……」

「白井さん……実はさっきから気になっている事が1つあるんですけど」

「あっ!」

佐天さん……実は私もです」

「？」

な、なんですか？

ジーと黒子を見つめてくる佐天と初春。一体何が……。

「白井さん……」

「いつから『上条さん』って呼ぶようになったんですか？」

「ふえ？」

いつから……？

あれっ？　と言っか『上条さん』？

……あれ？

・  
・  
・

ボンッッ！！

黒子の顔が一気に真っ赤に！？  
と言っか爆発したっ！！

「ああ〜っ！  
やっぱり白井さん……」

「ち、違いますの！！  
こ……これは単に年上に対しての礼儀であって、そそそんな深い意味は……」

「動揺しまくっている所が怪しいですねえ」

その後、黒子達はこの話題で持ちきりになったと言う。  
ギャーギャーと騒がしくなった事により、後で店員から追い出されてしまうのだが……。

他愛の無い話しのよう感じるが、黒子は少しずつ前進しているのかもしれない。

当麻も黒子も、こんな日常が続くのであれば、間違い無く『不幸』では無く『幸せ』と言えるハズである。



小さな幸せは意外と気づかないって言いますからね……。

つづく

### 第13話（後書き）

よ〜〜やく、ユニーク100000だそうです！

かなり嬉しいです

（  
）

ここまで見て下さった皆さん。  
本当にありがとうございます！

ただ、毎回毎回次話考えてません！  
その場しのぎだけはなんとかせねばっ！！  
（。。。；）

## 第14話

「た……ただいまあ……」

ヘトヘトな様子で寮へ帰宅する当麻。  
どうやら生きて帰れたようだ。

（結局朝帰りになっちまった……。  
昨日は早く帰ろうと思っていたのに……）

ただいまの時刻、朝6時。  
夜通しでクラスの者達と追いかけてこしていた当麻は、持ち前の持久力で、一人……また一人と振り切り、見事生還を果たしたのである。

しかし、当麻の不安はまだ終わらなかった……。  
原因はあの暴食シスターに夕飯を作らなかった事……。

（そ……と……。  
そ……と……）

当麻は忍び足で部屋の奥へ入っていく。  
せめて寝て欲しい……そして起きないで欲しい。

……と、そう願いながら……。

「とうま……」

わずか2秒でその願いは打ち砕かれた。

「っ!!!?!」

いきなり足元からインデックスの頭がニユキッと顔を出す。

……一瞬お化けかと思った位だ。

「インデックスさん!？」

何でそんな所に寝転がっているんですか!？」

「とうま……」。

一体何回私のごはんを抜けば気が済むの？  
流石の私でも怒りを沈められないかも……」

（いや……結局いつも沈められなくて、噛みつかれて来ましたが……）

ギランッ！

インデックスさんの口元から白く、尖った物が光り輝く。

（ヒイッ！！）

「ゴメンナサイ、スミマセン、ドウカユルシテクダサイ！！」

その場で土下座をして謝り出す当麻。

そのスピード、キレ、謝る姿勢は既に達人の領域であろう。

「~~~~っ！

……なんか感情が込もって無い気がするけど……。  
しょうがないから許してあげる」

はぁ……。

と、一つため息をついてインデックスは当麻を許した……。

……？

あ、あれ？

「あのお~~~~……インデックスさん？」

……おかしい。  
あの暴食シスターが、食べ物事でこんな簡単に引き下がるハズが無い。

「何？　とうま？」

満面の笑みで返された……！？  
絶対何か裏がある！  
当麻はこの時確信した。

「インデックスさん？  
も、もしかして夜中の寝込みにサクッとやっちゃう……何てことは？」

「そんな事しないってば……」

ややウンザリ気味にインデックスは返す。

「そんなハズは無いっ！  
そうじゃなかったら今度外食する時、上条さんのサイフを再起不能になる位空っぽにするつもりだろうっ！」

「……………とうま」

「はっはっは!!」

いくら鈍感な上条さんでも騙されないぞ！ 結局最後は後頭部をガブリと……………」

ハッ!!

喋っていた当麻の口が、ピタリと止まる。

「……………」

「あれ？ い、インデックス……………さん??」

インデックスの背後から黒いオーラのような物が立ち込めていたからだ。

「えっ？

ウソ……………？

インデックスさん？ ち、ちょっとタンマ……………」

もう遅い。

「とうまあーっ!」

ぎゃあああああああゝっ!!!!

朝っぱらから、男性の叫び声が寮内に響き渡るのだった。

.....。

ーそれから2時間後。

「遅いですね？」

佐天さん……寝坊でもしてるんですかね？」

バス停の前で初春が、何やら辺りをキョロキョロと伺っている。  
どうやら佐天と一緒に学校へ通学するつもりらしい。

「うっいはるー!」



バサァー！。

いつものように、佐天が初春のスカートをめくる。  
うむ、実に爽快である。

っ！！！！？

「さっ、佐天さんっ！

スカートめくらないで下さいってあれほど言っただじゃないですかー  
ー！！！」

慌ててスカートを抑え付けるが、残念ながらいつもこの子は一步反  
応が遅い！

「う、初春……。

今日のパンツは、いくら私でも読者に伝えられないかも……」

「変な誤解を産むような事言わないで下さいっ！！」

顔を真っ赤にして言い返す初春。

一体どんな物を穿いていたのか……。

……。

「あ……相変わらずですわね」

「お、おはよ……。」

初春さん、佐天さん」

その様子を偶然目撃してしまう御坂と黒子。  
佐天の嫌がらせに終始苦笑いである。

……。

「……い、インデックスさん……お味はいかがでしょう？」

残念ながら全身齒型だらけにされた当麻。

夜更かしによる眠気と、体中に走る筋肉痛に耐えながら、魂を削って朝食を作った。

（うう……不幸だ……）

モグモグ……。

「うん、おいしいよ。  
ありがとう。とうま」

クソオ！

笑顔が眩し過ぎる！  
怒る気にもならねえ！！

当麻は日に日に溜まるストレスをどこにも発散出来ずにいた。

「ていうか……」

「何？　とうま」

うっ！！

これだよ！　何でこんなに機嫌良いんだよコイツ！？

「インデックスさん……何かあったんでしょか？」

その一言を言った瞬間、インデックスは立ち上がり、無い胸を張って話し始めた。

「フフフフ……」。

とうま、良く聞いてくれたんだよ」

（なんだ……何いきなり威張ってんだコイツ？）

何となく嫌な予感がした。

……何となくである。

……。

「御坂さん、風邪治ったんですねー」

「うん、ごめんね。」

大した事無かったんだけど……色々心配かけちゃったみたいで」

見事、風邪から復帰した御坂。

黒子も後ろから笑顔で頷いている。かなり嬉しそうだ。

「そう言えば黒子は昨日大丈夫だったの？

風邪、ちゃんと完治してたんでしょうね？」

ギクッ！

思わず動揺してしまった……。

まあ昨日あんな事ありましたしね。

「あつ……白井さんなら全然大丈夫でしたよ！  
むしろピンピンしてました」

（初春……）

まるで自分をバカにするような言い方に、多少のイラつきを覚えた  
黒子。

「あれ？」

黒子、アンタ昨日初春さん達と会ったんだ？」

ギクウツ！！

（う、初春う……っ！）

佐天が初春を目だけで訴えかける。

(す……スミマセ〜ン!!)

「き、昨日は初春と佐天さんとお茶をしましたの」

「フーン……」。

まあ、大丈夫なら別にいいんだけど……」

上手くごまかせたようだ。

3人はホッと肩の力を落とした。

ーゴソゴソッ

「そんな事より、皆に良い知らせがあるのよね〜」

「「「?」」」

御坂は持っていた手下げカバンの中から、何かをゴソゴソと漁り出す。

「ジャジャジャ……ジャーンッ!」

タメにタメて御坂が取り出したのは、4枚のチケット。  
これは一体？

「お姉様？

それは一体……」

「何のチケットですか？」

「へっへー!」

実は昨日メイド見習いの舞夏に……」

「昨日の午後  
常盤台女子寮にて……」。

「みさかー!」。

福引きの景品当たったんだが、メイド生は研修があって行けないんだ……」。

「替わりに行って来てくれ」

そう言つて舞夏は御坂にチケットを渡した。

「えっ!？」

ちょ……ちょっと!

良いのっ!？ そんなもんをタダで貰っちゃつても!？」

御坂が言つのも当然の事であるが、舞夏はチケットに記されたある部分を指差す。

「……ん？」

期限は今週の土曜……? 　  
つて明後日じゃない!？」

「そうゆうことだ〜。」

どうりで良いチケットの割に4位の商品だった訳だ」

そのまま掃除ロボに乗つて行つてしまった。

「ふえっ!？ ちょ、ちょっと舞夏あ〜っ!！」

……行つてしまった。



(ど、どうしよう)

.....。

「んで！

考え抜いた末に、せつかく貰ったんだから使わない訳には行かないわよね〜っ！

って事になった訳！」

それって単純に御坂が行きたいだけじゃ.....。

「でも行ってみたいですよ〜。」

『一泊二日の温泉旅行』」

「旅行って言っても学園都市内みたいですね.....。

そう言えば、前温泉に行った時は初春と白井さんはいなかったですもんね？」

アニメOVA参照！

「一応、舞夏の話だと部屋は既に取ってるらしいのよ」

「じゃあ後は寝巻きや着替え程度ですわね？」

その通り！

しかし、明日とは余りに突然な気が……。

「で、明日なんだけどさ……。

皆大丈夫かな……？」

とても急なお願いだった為に、御坂も流石に半分諦めていた……。恐る恐る3人に聴いてみる。

「私は全然問題無いですよ？

明日は特に用事も無いですから」

「わ、私も『風紀委員』の仕事が無ければ……。」

「初春！！何を言っているんですの！？

お姉様が誘って下さっているのに、仕事なんて放っておきますわよっ！！！」

ええっ！？  
治安維持放棄！？

初春は非常にビックリしている。

「いや、黒子……。  
気持ちは嬉しいけど、そこまでしなくても……」

「何を言いますのお姉様っ！？  
お姉様の……グフフ……。裸体をじっくり眺められる貴重なチャン  
スだと言いますのに……。  
フフ、グフフフフ……ウィッヒヒヒヒ！」

何か、またよからぬ事を考えて……いや、むしろ声に出ちゃってます。

「……黒子？」

ビックッ！！

しまった！  
そう思った黒子は思わず口を手で塞いでしまう。

「お……お姉様？  
何か……うげっ!？」

「アンタねえ……少し油断するといつもそうよねえ……。  
最近やけに大人しいと思っていただけ、やっぱ強制再インストール  
するしか無いみたいね……」

体中からバチバチと電気が流れ始めている。  
ヤバイ……制御がギリギリ効かない状態だ！

「お、お姉様!!  
こんな所でそんなおぞましいエネルギーを放ってしまったら、周り  
の家電や人に影響が!？」

「大丈夫よ。  
コントロールするから」

そう……。

彼女は学園都市最強の超能力者（レベル5）

（あっ……もう手遅れですね……）

バリバリバリバリッ！！

……………。

～同時刻～

「ふっふん……。」

舞夏が温泉のチケットをねえ……」

「ほら、とうま！！

私に感謝するんだよ！！

日頃、疲れが溜まって大変なとうまを誘ってあげてるんだから」

その疲れのほとんどが、アナタ様ですがね……。

そう……。

インデックスは昨日舞夏に、温泉旅行のチケットを2枚貰っていたのだ。

インデックスいわく……『部屋に後2枚余ってたのを忘れてたから

あげるな〜』との事なのだが……。

後って事は、他にもあったのか？ 温泉旅行のチケットが？？

「本当だつたらあいさを誘う所だつたんだけど、しょうがないからとうまを誘つてあげてるんだよ！！

どう？ 私って偉い！？

ねえ、偉い！？」

へいへいありがとさん……。

適当にあしらう当麻に、一瞬ムツとするインデックス。

「ところでコレ……信用性は大丈夫なのか？」

相変わらず、旅行と言つ言葉にかなり慎重のようだ……。

それもそのはず。

何せ彼は不幸を具現化したような存在。

温泉旅行なんて、一般的に幸せメーターMAXなイベントは、こぞって信じられないのである。

「大丈夫だよ、とうま。

舞夏は既に部屋は取られてるって言ってたし……。

「ごはんも沢山でるみたいなんだよ」

コイツ……結局それかよ!!

インデックスの余りの食い意地に絶句する当麻。

「まあ……疲れてるのは確かだし。  
断ったりしたら、チケットくれた舞夏にも悪しな……、有り難く行  
かせて頂きますか……」

パアアアア!

その瞬間、インデックスの表情が、一気に晴れ渡った。

ぴよんぴよんとベッドの上で跳ねている。

「つつかさ……」

「?」

「え〜と……」。

インデックスさんは、俺と2人っきりで温泉行く事に何も感じないんですか？」

「??？」

良く分からない……そんな目で当麻を見てくる。

「ほ、ほら……若い男女が2人っきりで温泉に行く訳だけど……。別に何の抵抗も無いのかなぁ……なんて……？」

・・・

カアアアア……ッ!!

インデックスの顔が一気に真っ赤に染まった。どうやらそこまで考えていなかったようだ。

「…………エッチ」

ええ……っ!?

予想外の返しにテンパる当麻。



「いや、2人で旅行に行く訳だし、そう考え無い方がむしろ不自然であって!!」

そもそも、その考えに行き着いたアナタも十分エッチな訳で……」

「……とうまのスケベ、変態!」

更に顔が赤くなるインデックス。

(なんだこの反応……)

妙な空気になってしまった……。

インデックスがさっきからやけにモジモジしてる。

「は、ははは……。

安心なさいインデックスさん!!」

別に俺はロリコンじゃないし、幼児体系なお前の身体を見ても間違いは起こしたりしない!」

当麻なりのフォロ―。

「……………」

「ほら、前にも言ったけど、上条さんのタイプは大人の管理人さんタイプ……。」

あれ？ インデックスさん……。」

インデックスの体がプルプルと震えだす。

「えつと……その……。」

インデックス……さん？ ま、まさか……。」

何故、この男はここまで鈍感なのか……。そのまさかである。

「とオーーまアーンッ……！」

ガブリッ……！！

「んぎゃあああーっ……！！……！！」

一泊二日の温泉旅行。

果たして当麻に一体どんな不幸が待ち構えているのか……。

U  
U  
U  
U

## 第14話（後書き）

晴れて成人式を迎える事が出来ました。

そしてクラス会……楽しかったなあ〜。

（        ） /

もう一回やりたい……。

そして、ちょっと新しい話しを取り入れてみました！

皆と上条さんが、色々とやらかしちゃいます！

（メインは黒子ですが……）

## 第15話（前書き）

書いていて思った事が少し……、

いくら中学生とはいえ、友達と一緒に温泉に入るのは、ちょっと抵抗があるかなあと思いました！

（        ）

私は少なくとも恥ずかしいですね。

アニメの女子学生キャラの皆さん……恐るべしですっ！！

（自分に自信があるんですね！ きっと！）

羨ましいです……。

## 第15話

温泉旅行に行く事になった御坂達4人。

今日は出発当日。一行はとあるバス停前に集まっていた……

「え〜と……全員揃いましたね」

「じゃあ元気よくっ！」

「出っ発進行お〜っ！」

黒子・佐天・初春（（ノリノリだッ!？）（（

御坂が1人、異様な盛り上がりを見せている……。

どうやら4人は、今まさに出発しようとしているようだ。

「えへへ〜……」。

え〜と……今日はとりあえず、着いたらすぐに温泉を満喫して！  
そのあと和風料理を堪能して！  
でもって最後にまた温泉に浸かって!! ……」

指を折り曲げながら、御坂は本日のスケジュールを確認する。

「お姉様……」

ハッ!!

「こ、これは違うの！」

ホラッ！ 何事も計画的にいかないとダメじゃない!？」

はぁー。なんて苦しい言い訳でしょう……。

でも、何だかんだで、今回の旅行を一番楽しみにしていたのは御坂だったのかもしれない……。

……。

「へっっ……。」

思ってたより立派なトコだなあ……」

一方、その数十分前に遡るが、当麻とインデックスは既に、本日泊まる予定の温泉旅館の前にいた。

旅館の外装は『これぞ日本！』と言えるような、昔馴染みの和風な木造建築であつた。

「さ、さすがはジャパニーズ温泉なんだよ！  
この日本独特の空気は、他じゃ絶対味わえないかも〜っ！」

当麻を差し置いて、インデックスのテンションは早くも最高潮に達つした模様。

（テンション高え……）

当麻は、今から胃が痛くなりそうだった。

……。

「お疲れ様です。

本日は宿泊の予定ですか？」

（……若っ！？）



旅館の玄関をくぐると、17〜18歳位だと思われる、奥から若い女将さんが現れた。

研修中か何かの新人さんなのだろうか……？

「ええ〜と……」。

今日と明日の2日間お世話になります。上条って言います」

あんまりデレデレしていると、隣のヤツに噛みつかれかねんな……。

「たぶん……『土御門』って言う名前で予約してあると思うんですけど……」

「ああ〜〜！」

『土御門 舞夏』様ですね？ お二人様だけですか？」

はい？

「い、いえいえ……。  
どうぞこちらです！」

やっぱり新人さんなのだろうか……。  
やたらキョドキョドしているような……。

そのまま新人さんに連れられ、部屋まで案内される当麻とインデックス。

部屋へ行く途中の、渡り廊下や庭の造りからも、かなり味のある旅館だと分かる。

「お部屋はこちらになります。  
どうぞゆっくり……」

カクーンー。

「えっ……きゃっ!?!」

「……ふえ?」

女将さんの足は、引き戸の溝に引っかかってしまい、カクンと前に崩れ落ちて来た。

「う、うおっ！」

前に倒れ込んでしまった女将さんを、当麻は何とか両手で支える。

「だ……大丈夫ですか？」

「いえ……本当にすみま……。  
あっ！」

……ん？

カァア……ッ！

女将さんの声に反応して、自分が掴んでる位置に目を向ける。

あれ……？

（右手があつてはならぬ位置に……！！！）

「だぁああっ！  
す、スススミマ……ッ！」

女将さんと再び目が合うと、2人は同時に顔を背き、お互いに直視が出来なくなる程、顔が赤く染まっていた……。そして……その時だった！

ゾクンッ！！

「ハッ！？」

……背後からなにやら物凄い悪寒が！？

ダラダラダラダラ……。

「い、インデックス……さん？」

首をゆっくり回転させ、後ろを振り向く当麻。  
身体中から溢れ出す大量の汗が、既に当麻の本能に、恐怖と言う2文字を刻み込まれていた。

ヤバい、スゴく嫌な予感がする……。

「とーまあー……？」

真っ黒い『何か』を背後に忍ばせ、ユラリとインデックスの体が揺れ動く……。

「何でとうまはいつも、いつも、そんなのかなあ……」

「ご、ごご誤解だインデックス！  
ちよつと待っ！……」

「それはもう聞き飽きたかもッッ！！！！」

ガブリッ！！

「いっつっつでええええ……ッ！！」

うむ、上条さんの不幸スキルは、本日も絶好調この上無い。

……。

それから数分後……。

「とうまとつまゝっ！

大変だよ！！ 窓の外からフジヤマが見れるよっ！？」

本日2人が泊まる部屋は、12〜13畳程の和室であり、真ん中には大きなテーブルが、ドンツと設置してある。

2人部屋だとしたら、こんな良い部屋は中々見つからないと思う。

（そりゃ〜〜ホログラムですよ……）

もうインデックスさんのテンションには付いていけないので、上条さんは無視する事にしました。

「さてと……着替え良し、歯磨き良し、タオル良し、充電器良し、  
……あとは……」

「ニヤア〜〜」

「スフィックスよし……」

んっ！？

バツ！ と、当麻が後ろを振り帰る。  
ウソだろ！ …… そう思いながら。

「おまつ …… な、なんでスフィンクスを温泉に連れて来てんだよ！  
？」

インデックスの胸元からは、現在上条家の一員である、猫のスフィンクスがピョコつと顔を出す。

「だ …… だって1人でお留守番なんて可哀想 ……」

「小萌先生やら姫神やらに頼めば良かったじゃねえか ……。  
旅館に動物連れて来ちゃいけません！」

その当麻の言葉を聞いてインデックスは頬をムツと膨らませる。

「とうまつ！

スフィンクスはとうまが学校に行っている間、私といつも遊んでくれる大事な友達なんだよ！」

「うつ！」と言葉を詰まらせる当麻。

「それにスフィックスは一緒に暮らしている家族だよ……？  
なのに、1人だけ仲間外れなんて……ヒドいよ、とうま……」

目に涙を浮かべて、顔を下に向けるインデックス。  
よしよしと、スフィックスの頭を撫でているのが、やけに嫌みっ  
らしいな。

何？ これも俺のせいですか……？

最近、流石にちょっと理不尽過ぎじゃないかと感じてならない当麻  
なのであった。

「……はあ」

と、大きなため息を一つつく……。

当麻は、ヤレヤレと両手を上に挙げると、荷物の整理を再開し始め  
た……。

「わかったよ……でも旅館の人には見つかなよ」

連れて来てしまったものはしょうがない。

それに……インデックスの言葉にも一理ある。

確かにスフィックスだって家族同然なのだ。



口元に小さく笑みを浮かべる当麻。  
少し、インデックスを見直したようだ……。

「でも、ちゃんと大人しくするよう見張って……。  
って！ 居ねえしっ!？」

熱弁を繰り広げる当麻が後ろを振り返ると、そこには何故かインデックスの姿はなかった。

「なっ……!？  
アンニャロ……。」

しかも、話題の中心であるスフィックスを置いてどっか行きやがった……。

「そっちから話し振っというて居なくなるとかどうなんですか!？」

大方、彼女の冒険心に火がついてしまったんだろう。

今頃、旅館の中を大探検中とか、そんな感じなはずだ！

「なあ……？ お前の主人、どうかしてくれよ……」

「に……ニヤ？」

スフィックスを両手で持ち上げ、相談するかのように話し込む当麻。

スフィックスも非常に困った顔をしている。

・  
・  
・

「はあ……まあいいか……」。

こっちは寝不足と筋肉痛でまだ疲れ取れて無いし……」

頭をボリボリと掻きながら荷物をキレイに纏める当麻。

「……先に温泉と言う名の天国で癒やされて来ますか」

カバンを部屋の隅に移動させて、バスタオルやシャンプー類を手に取り部屋を後にする。

……。

「お疲れ様です。

本日は皆さん宿泊の予定ですか？」

「あつはい……。

『土御門』って名前で予約してあると思うんですけど……」

あれ……？

と、女将さんは首を曲げる。

（何かさっきも同じ事が……？）

そう言えば、今日のお客様は6人で予約してあったような……。

「……？」

あの……何か？」

御坂が不思議そうに尋ねるが……。

「いえいえ！

何でも無いんです！ 失礼しました！」

と、手を左右に振るわせて、そのまま部屋へ案内してくれた。

一体何だったのだろうか？

……。

「どうぞこちらになります」

佐天・初春「うわゝゝっ！ 広ーい！」

「まさに『和』って感じね！」

まるで修学旅行でやって来たかのように、一斉にはしゃぎ出す御坂達。

……？

「あれ？

白井さんは？」

・・・??

あれ……？

いつの間にか黒子の姿が無い。

「さっきまで確かに居たんですけど……」

テレポートを使える黒子なら、確かにいつでも姿を消せるが……。  
何故急に……？

「どーせまた、くだらない事でも企んでるんでしょう？」

その可能性は無きにあらず……。

いつもの事と言わんばかりに、適当に御坂はあしらう。

そんな事より彼女はやりたい事があるのだ。

「汗もかいちゃったし、早速入っちゃおっか？

私、露天風呂って初めてなのよね〜」

……。

（えっ！？）

（意外ッ！）

て言うか、さっきから妙に落ち着きが無かったワケはコレか……。

「じゃあまた背中を洗いっこでもします？」

「ふえっ！？

べ、別にいいわよ！ そんな事しなくてもっ！」

顔を真っ赤にさせて、恥ずかしそうに言い返す御坂。

「ではでは御坂さん……」。

お楽しみはあちらへ行ってからと言う事で」

両手の指をワナワナと動かし、やけにいやらしい口調をする佐天。

「は、ははは……」

初春も少し顔が赤くなってしまってる。

「ほら、初春も早く行こ？」

「あつ！ ハイー!!」

いつの間にやら、佐天と御坂は、お風呂の準備万端と言った様子。

とりあえず、大急ぎで入る為の準備をする初春であったが、ここである異変に気付く。

「あれ？」

何かカバンが少し多いような……？

バックは、1人一つずつ持って来ていたはずなのに、ここには何故か5つある……。

「???」

これって一体……」

すると、その時――。

『ニャア……』

「？」

(鳴き声?)

未だに状況の収集がつかないのに、何か猫っぽい鳴き声……？

(えっ!?)

な、何っ!?! 何なんですか!?)

顔が一気に青ざめる初春。

そう、彼女はあの怖がり屋なのだ!

「確かこっちから……」



「初春うゝゝ!?!?  
何してんのー?」

「は、ハイ! 今行きますー!」

佐天の声に反応して、結局声の正体は確認できず、初春は部屋を後にするのであった。

.....。

その頃、露天風呂では.....。

チャポ.....。

黒子が1人、人工石で囲まれた大きな露天風呂に、足からゆっくりと浸かっている。

髪を降ろして振る舞うその姿は非常に上品であり、お嬢様の風格を一層強く表していた。

「グ…グフフフ…。  
ヌウッフッフッフッフウ…。」

・  
・  
・

前言撤回。

（ああ、お姉様……）

ジュル……。

（まだですか？ まだなんですの？

黒子は……黒子はもう、我慢出来ませんの……！」

ヨダレを垂れ流しながら、不気味にニヤつく黒子。  
さらに、その右手には、防水カメラが一つ……。

「ヌッフフ……」。

お姉様の産まれたままのお姿を、黒子の『お姉様シークレットアル  
バム』に追加する絶対のチャンスですよ……！」

そう……これはあくまでお姉様の成長記録！ 記録なんですのっ！！

と、自分に言い聞かせているが、下心見え見えである。

黒子が妙な作戦を企んでいると、隣の男風呂から爽快な声が聞こえて来た。

『ハア~~~~ッ！！』

最高ですよコンチキショーーーーッ！！』

……。  
堀の向こうから聞こえて来たのは、何やら聞き覚えのあるような無  
いような……。

とにかく、気品もカケラも無い声だった。

（お姉様が浸かる湯船で何て騒々しいんですの？）

黒子は気にしない。

『いやー。』

今までの不幸を全部消し去ってくれそんな気持ちよさですなあ………』

（ハッ！！）

これはつまり……、お姉様と同じ湯に浸かると言う意味で、間接的に……ッ！？）

ここで、黒子はいきなり妄想タイムに入った！  
こうなると、例え気品の無い声だろうが何だろうが、黒子の耳には入って来ない。

「ん？

何だ？ こっちの方にも繋がってんのか？」

「お、お姉様がいずれ浸かる湯船に黒子が……。  
キヤーッ！！ ダメですのっ！！ グフ……ヌフフフ……そんな事いけませんの……っ！！」

バチャバチャと水しぶきを上げ、暴れ出す黒子。

すると、その時……。

「おおっ！ こっちも結構広えじゃねえか！？  
ココはまた別の露天なの……か？」

「へっ……?」

……ハラリ。

多少はしゃぎ過ぎた黒子は、体に巻いていたタオルを勢い良く下に滑り落とす。

まさか産まれたままの姿を、御坂以外に見られるとは思ってもみなかった黒子……。  
それも異性に……。

そして、あのウニ頭に見られるとは、更に夢にも思わなかっただろう。

「な、なな……ッ!？」

「は……はい?」

そう……実はこの温泉、混浴付きの露天風呂だったので……。

.....。

「ど、どつどうしよ〜!?!?  
迷っちゃったんだよ〜っ!」

今はどうでもいい事かもしれないが、その頃インデックスは旅館で迷子になっていた。

つづく

## 第15話（後書き）

どーもこんにちはです!!

久しぶりの更新となっていました。

ちょっと仕事の言い訳があります……（汗）

（ ; ）

アニメとか漫画で更新遅れてるって言うのも、多少はありますけど……。

でも、とりあえず……。

最近のサッカー面白いです！

（ ）

これからも宜しくお願いします！

## 第16話

「スッ……スミマセンでしたっ!!」

（や、ヤベエ……!）

女の人の裸をガン見してしまった当麻は、すぐさま顔を後ろに向ける。

入浴中は黒子は髪を下ろしている為、目の前の女の子が誰なのか当麻は全く気付いていなかった。

パシャ……。

「……………」

ズレ落ちたタオルを拾い、黒子はとりあえず体を隠す……。  
フルフルと体を震わせながら……。

「あら不思議……もはやアナタのする事、成す事……、全然驚かなくなっていましたの……」



ん？……。

パキパキと指を鳴らし始める黒子。

この異様な悪寒！？

いくつか身に覚えがある殺気に、当麻は後方をゆっくりと確認した。

「あ、あれ？

その声……白井……さん？」

ギランッ！

「フアア——ッツツツク！！！！」

「うげっ！！？」

ドツツバー——ン！！

突如、当麻の視界に水しぶきが豪快に上がる。  
なんか黒子が、かかと落としのような技をしていたような……。

（人間技かコレッ！？）

前方に広がるのは温泉のカーテン。

そこからニユッと黒子の腕が、当麻の肩に向かって飛び出して来た！

ガシッ！

「はい？」

グリンッ！！

「いででででっ！？」

黒子は当麻の腕を無理やり掴み取り、そのまま腕をぐるっと上へ捻り上げる。

流石に、普段から『風紀委員』をしているだけあるのか、当麻は抵抗する間も無く、岩に体を押し付けられるのだった。

「ア・ナ・タは、どうしていつもわたくしに恥をかかせますの！？しかも今回は裸まで……覚悟は出来ていると言う事ですよ！？」

当麻の肩廻りから『ミシミシッ！』と、異様な音が鳴り響く。

「まっ待てって!!」

俺だって知らねーよっ！ 今この状況が訳分かりません!!」

「この……いつまでもそう言う言い訳が……っ！」

当麻の頭を鷲掴みにし、更に力を加えようと構える黒子。

ピクッ……。

しかしその時……、突如黒子の体がビクンと反応する。

(?)

『でね……って……』

やけに静かになった露天風呂内に、僅かだが声が響き渡る。

「ま、マズいのですの!」

ガバッ!!

「うおっ!？」

突然、押さえつけた岩の影へ当麻を引きずり込む黒子。

「お、オイって白……うぶっ!？」

当麻の抵抗は虚しく終了。

黒子の右手で口を覆われると、更に黒子は左指を自分の口元に当ててこう言う。

(しゅっ！ 静かにして下さいましっ!!  
上条さん……アナタ、向こうを見た瞬間に殺しますわよっ！)

(んなっ……!?)

意味が分からん!？

何故いきなりの殺害宣言!？

当麻が混乱していると、入り口の方から勢い良くかつ豪快にドアを開ける音が……。

ガララー！

「うはーっ！

ひっろっっいー！」

両手をバンザイして、大喜びで登場したのは、

「この声は……ま、まさか……」

当麻の脳裏に浮かび上がったのは、この状況で最も危険な人物。

「み、みみみみ御坂……！？」

最悪だ……。

当麻はようやく黒子の行動の意味を理解した。

あのビリビリ姫にこんな所で遭遇したとなったら……。

ブルッ……！

（うおっ！ 鳥肌が――！）

死亡確定になってしまっ……。

「キレイな所ですねー」

「それじゃあ早速御坂さんに……」

……。

あのふたりまで……！？

次々と耳に入って来る聞き覚えのある声に、当麻の口元は徐々に引きつって行くのだった。

「ちょっ！？

ま……待つて……さ、佐天さん！」

「えりゃっ  
」

「ひゃああっ！！？」

（~~~~っ！？

何も聞こえない！　何も聞こえない！　何も聞こえない！！）

ドキドキドキドキ……！

目では見ることが出来ないが、逆にそれが当麻の理性を容赦なく襲う。

「上条さん……何を考えていますの……」

ギロ……。

いや……勘弁して下さい……。

因みに、もしこの岩から離れてしまった場合、位置的に90%以上の確率で見つかってしまうだろう。

当麻は一言呟く。

「不幸だ……」と……。

……。

（とは言ってみたものの……。  
流石に、ずっとこのままと言っ訳にはいきませんわね……）

既に数分が経っただろうか？  
体を洗うような声は聞こえてくるが、黒子の位置では湯気がヒドくて良く見えなかった。

・・・このまま……。

チラッ。

「ん？」

互いに目を合わせる当麻と黒子……。

カーーーッ！

数秒間目を合わせたものの、顔を赤くし目を背けたのは黒子だけだった。

（こ、こんな状況で平気いられる程、わっわたくしは……その……）

どんな人間だろうと、自分の目の前に異性がいて動揺しないはずは無い。



（しかも裸である）

いや、男なら……！　しかし裏を返せば女の子と一つの風呂に浸かれると言うハッピーイベントに……！？

（チキシヨオ……）。

分かってたよ……ああ、分かってましたさ。

この上条当麻の人生に置いて、安らかな温泉堪能なんて不可能だと言っ事ぐらいっ……！）

……この人にはムリか。

端から見れば羨ましいハプニングなのだが、『プラス思考』という言葉を持ち合わせていない当麻にとって、今回のイベントも、不幸にしか感じられ無いようだ。

（第一、混浴ならなんで男女で入り口別れてんだ！？  
こういうの狙ってんのかこの温泉は……！）

そう言えば舞夏に貰ったチケットにも、『混浴』なんてワードは一切無かった……。

よし、この温泉を後で訴えてやろう！

当麻は密かに決意を固め、右手の拳を力強く握り締める。

「とりあえず何とかこの状況を……」

「……」

ん？

「ひつ……あ、あ……」

・  
・  
・

（んなぁっ！！！？）

正面に目を向けると、そこには顔を真っ赤にして両手で口を塞ぐ初春の姿が……。

「お、お邪魔しましたぁ……」

小さな声でゆっくりと後ろへ遠ざかるうとする初春。

「ちよっ！？ 待っ！！」

「？ 何ですか？」

必死に腕を伸ばして、当麻は初春に待ったをかけようとする。

風呂に入る時ぐらいいは、花飾りは取っちゃうんだ……。と、ツツコミたかったが、今はそれどころでは無い！！

「ちょ……ちょっと上条さんっ！ そんな暴れーー！！」

！？

バシャーーン！！

当麻が前にのしかかって来た為、2人はバランスを崩して勢い良く倒れ込んでしまった。

「初春？

どうかしたの？」

「あつ 佐天さん……」

えゝゝとこれはですねえ……」

「なんか凄い音がしたけど……」

音に反応した御坂と佐天が集まって来た。

「あの…実は白井さんが……。  
その……」

口元をモゴモゴさせ、齒切れの悪い返事をする初春。

その様子から何か言いにくい事なのだと分かるのだが……、『白井さん』という単語だけで大体の予想はついてしまう。

「どーせ、黒子がまた隠れて何かやってたとかそんなんでしょ？」

ズバリ的中だが、初春が伝えたかったのはそんな事ではない！

ブクブク……。

？

御坂の目の前に気泡が漏れる……。  
これは……。

「はあ〜」。

全く……、何考えてんのか問い詰めてやる!」

そう言いながら、気泡が出ている方へ近づいて行く御坂。

「ま、待って下さい御坂さん!  
そうじゃなくて実は――!!」

初春が御坂を呼び止めようとしたその時!

「ぷはあ!

……全く、一体何がどうなってますの!？」

御坂の後方、そして初春の前方から黒子が顔を出した。

御坂・佐天・初春「……………」

「あ……あれ?

あ〜〜これって?」

??

佐天が？マークを頭上に浮かべている。

あれ？ あつちに黒子がいるなら、こっちの気泡は……？

御坂が再び気泡に目を向けた……その時！！

「ブハアツツ！！」

ああゝゝっヒデエ目にあつた……！？」

「ひゃっ！？」

お湯から顔を出したのは……。

「ん？」

間違い無くあのツンツン頭である。

(ゝゝっ……！！！？)

「ななな……何でアンタがこんな所に居んのよ！？」

タオルと両手で自分の体を隠しながら、御坂は当麻に問い詰める。  
(もちろん顔は真っ赤にさせて)

「バ、バカじゃないの！

おっ女湯に入って来るなんて……一体何考えてん……！」

ガシッ！！

……。

(ふえっ？)

……当麻がいきなり御坂の肩を掴む。

……。

「お……落ち着け御坂。

こんな所で電気走らせちまったら、他のヤツらも感電して取り返しがつかない事に……！？」

正論ではあるのだが、今の御坂にはそんな事はどうでも良い。  
問題なのは……。

「な、な……なななな何いきなり触わって来てんのよっ!？」

一気に顔が茹で上がる御坂さん。

まさかのボディタッチに動揺は隠しきれなかった！

「いや本気で待つてください御坂さん！

今この右手を放してしまったら、冗談じゃなく放電しそうなんですけど!？」

「んなわけ無いでしょーが！

いついいから……この手をさっさと放しなさいよっ!！」

御坂がジタバタと抵抗して暴れ出した。

端から見たら襲っているようにしか見えない……。

ドカツ!!

「ぐあっ!？」

「お姉様に何をしてるんですのキーーック!！」

黒子のテレポートを駆使した、必殺『背後からのドロップキック！



！』が炸裂した。

一瞬何が起きたか分からなかった。

当麻がお湯の中から顔を上げると……、

「お姉様の肌に直接触れるとは……良い度胸してますわね……上条さん」

そこにはテレポートを使って前に回り込んだ黒子が、両手を組んで立ちふさがっていた。

眉をヒクヒクさせ、悪魔のように恐ろしい視線を向けている……。

「その腐れきった脳内に渴を入れて……」

「ねえ黒子お……」

ん？

何故か御坂の声のトーンが一気に下がった……。

「アンタが今落とした、この防水仕様が施されているっぽいカメラは何なのかなあ……？」

バチーバキンッ!!

能力でカメラを破壊する御坂。

煙と一緒に出ている電気が……、もはや尋常ではない!

当麻・黒子「……へ?」

佐天・初春「お、お先に上がらせて頂きまーす……」

危険を早めに察知したのか、佐天と初春の2人は一足早くその場を後にした。

当麻・御坂・黒子「……」

「じゃあ……覚悟は良いわね……」

満面の笑みを浮かべた御坂。

するとそれと同時に、御坂の髪の毛が一気に逆立った!?

「みつ御坂!?!」

「お姉様、それはいくらなんでもー！ー！」

バチンッ！！……。

その言葉を最後に、露天風呂内には、過去に例が無い位の轟音と叫び声が響き渡ったと言う……。

……………。

「もう、とうまー！  
すっごい探したんだからね！？ そこん所ちゃんと分かってるんだよね！？」

豪華な和食料理を大量にほうばりながら、当麻に文句を垂れるインデックス。

「お前……この髪のコゲ具合で分かんねーのかっ！？  
俺の方がよっぽど大変だったわっ！ー！」

当麻の髪の毛が異常にチリチリになっている。

「そんな事より、何で短髪がここにいるの!？」

(そんな事よりっ!?)

「なっ!？」

私こそアンタ達に聞きたい位よ!」

そう……。

あの後部屋に戻ったら、御坂達と同じ部屋だと言う事が判明したのだ。

そして、女将さんからは部屋は6人1部屋だと言われてしまった……。

(覚えてろよ舞夏……)

「しかも……、実はちゃんと混浴用と、男女別とで、温泉の種類は分けられてたみたいですね……」

「これ食べたら男女別の方に行くわよ!！」

そうなんです。

そうなんですよ……。

最初っから男女別に入っていればこんな災難には……。

（はぁ……何と云うか……。不幸だ……）

「モグモグ……今度は私も入るんだよ!!」  
ゴクン……せっかく日本にいるんだから日本の風物詩は堪能しないと!」

「まあそれはそれで……って!?  
俺のメシがねええっ!?!」

ゲフ……と、口から音を漏らすインデックス。  
かなり満足そうな顔をしている。

「ほ……ら!  
早く行くんだよ……!」

そう言っつて初対面にも関わらず、佐天と初春の腕を掴み上げる。

「わっちよつと!?!」

「まだデザートが……っ!？」

強引に立たされてしまう佐天と初春。

「まあ、わたくし達も」

「うん……行きますか」

御坂と黒子も立ち上がり、今度は男女別に別れている温泉へと向かう。

当麻に冷たい視線を浴びせながら……。

(は……ははは……)

当麻は終始苦笑いでやり過ごすしか他は無かった。

……。

インデックス達が次に向かったのは、男女別に別れている温泉であり、ここは主に室内用である。

「はあ〜」……。  
「極楽かも……」

現在、中央にあるブクブク風呂に浸かっているインデックス。

フニフニ……。

インデックスは自分の胸に触れて、不意に一言発する。

「ん〜」……。

かざり……とうまは結構巨乳好きなんだけど……。  
私はこれから成長するのかな？」

「えっ!？」

ええ〜っ!？」

わっ私にそんな事言われても……」

そう言って自分の胸に目をやる初春。

「そんな下らない事どうでもいいではありませんか」

「くるこ」……。

自分もペチャパイなんだから、どうでも良い事じゃないと思うよ……」

ムカ……。

「ふふふ」……。

アナタ……遂に言うてはいけない事を口走りましたわね……」

禁則ワードだったのか……黒子の雰囲気の変化に多少怖じ気づくインデックスと初春。

「わたくしはまだ発展途上なんですの!!」

ムッ!

「それなら、私だってそうだもん!!」

ギャーギャーと叫んでいるペチャパイ一同。

この時、少し離れていた場所で御坂は体を洗っていた。

「……巨乳好きかぁ……」

ペタ……。



自分の胸に手を置き、一つため息をつく御坂。

「どーかしたんですか？

元気無いですね？ 御坂さん？」

「ふえっ！？

いやっこれは別に……」

「大丈夫ですよ。

御坂さんは今のままでも十分魅力的ですから！」

（うっ！！）

フォローのつもりだろうけど地味に傷つく！

「別にスタイルが変わる必要なんて無いんですよ」

体についた泡をお湯で流しながら佐天は続ける。

「御坂さんがもうちょっと素直になれば、いくら上条さんでも、意識しちゃうと思いますよ？」

「……」

素直に……。

それは分かっている。

しかし、それがどれだけ難しい事なのか……、どれだけ大変な事なのかを、御坂は既に理解している。

「じゃあ私は先に上がりますね？  
ちよつと逆上せちゃったみたいなんで……」

数秒間、動かず固まってしまふ御坂……。  
はあ〜と、ひと息ついた後に、少し遅れて自分も風呂場を後にする。

（もつと素直に……か……）

それが出来れば苦労はしない……。  
それが出来ないからここまで困っているんだ……。

「私って……こんな不器用な性格だったかなあ〜？」

改めて感じる。

レベル5としてどんな障害だろうと乗り越えて来た御坂が、唯一飛び越えられない存在がいると言う事を……。

それが……。

上条……当麻……。

「……」

「ん？」

「な、何してんのよ……アンタは」

顔を赤くさせ、尋ねる御坂に対し、当麻は全く動じない。  
廊下に設置されたベンチに腰をかけ、ムサシノ牛乳を飲んでいる。

「何って……風呂上がりのムサシノ牛乳だけど？」

あっ！……もしかしてコーヒー牛乳派？」

「違うわよ……」

何でコイツが絡むと調子狂うのよ！

答えを見つけれない問いに、髪の毛から電気を走らせる。

自分でも分からない。

何でコイツを前にすると、こんな態度しか出来なくなってしまうのか……。

そして……、分かってる。

これが本当の自分の感情表現じゃ無いって事ぐらい。

「……………」

（何だっ！？）

何んで黙ってるんですか！？）

無言のこの時間帯が、逆に当麻の恐怖心を増幅させる。

「え〜と、さ……。」

俺もそろそろ部屋に戻っ」

「待つて……！」

重苦しい空気を跳ねのけるように御坂が口を開く。

『もっと素直になれば……』

あの時の佐天の言葉が、いつまでも御坂の耳に残っていた。

隠していても、相手には分からない……どうせ伝わらないと言っ  
のなら……、私は、いっそ……！

「ちょっと……、はっ話があるんだけど……！」

つづく

## 第16話（後書き）

ここに来て、色んな人が小説更新を再開していますね！

やっぱり嬉しいです！

色んな小説を読んで、私も勉強したいと思います。

他の方の小説は参考になる事ばかりですから！

（最近小説を読む派になりつつあります）

皆さんも書くだけではなく、色んな作品を読んでみて下さい。

それではまた次話でお会いしましょう！

（\*^o^\*）

## 第17話（前書き）

すみません！！ 更新ちょっと遅れてしまいました！

そして今回は、所々の行間がバラバラであります！

でもそれはワザとなので、あんまり気にしないで下さい。

あと、今回ちょっと長いです……（汗）

では…… 本文へ突入しちゃって下さい！！  
第17話、始まり始まり……！！

（ ）

## 第17話

「ふう……」。

それにしても、結構サッパリしてしまいましたの」

ワシャワシャとタオルで髪を拭いながら、清々しい笑顔で廊下を渡る黒子。

鼻歌混じりに歩いているその姿から、かなり満足した様子だ。

「佐天さんも、初春も、あのチビスケも……、良く風呂上がりに卓球なんてお子様な思考にたどり着きますわね……」

現在、他の3人はどうしているのかと言うと、どうやら風呂上がりの卓球に夢中になっているらしい。

インデックスが勝つまで続きそうな勢いだった為、黒子が一人抜け出して来た。と言う訳だ……。

（それにしても、佐天さんがあそこまで強いとは……結構意外でしたの……）

〃〃数分前……。



「ううっ！

るいこ！ もう一回なんだよっ！！」

「またあゝ？

言っとくけど、もうかれこれ１１連敗中だよ……？」

やや疲れたように、ジト目になりながらそう話す佐天。

一向に諦めようとしなないインデックスに、流石に参り気味のようだ。

「もう一回っ！！」

「はいはい。

まあ……いくらやっても私に勝とうなんて不可能だと思っけど……」

異様に雰囲気のあるその構え……。

明らかに一人だけオーラが違っていた。

……。

その後も、鬼神のごとく勝ち続けた佐天。

後に『卓球王』と言う称号がついたのは、言うまでも無い。

（まあ……ちょっと騒がしい位が、わたくし達らしいと言えばらしいですわね……）

クスッと、小さく笑みを浮かべる黒子。

最近は妙なトラブルに巻き込まれがちであるが……、やはりあの面子でいると常に楽しい事だらけである。

それは間違い無い……。

彼女達の顔を思い浮かべるだけで、自然と笑みが浮かんでしまう。

「あとは、あの類人猿さえ余計な事に首を突っ込まなければ……」

独り言を呟きながら顔を前に向ける黒子。

すると、前方の休憩所のような所に座っている、一人の少女を発見する。

あれは……。

・・・

お姉……様？

……。

ドキドキ……。

（なっ何緊張してんのよ私はっ！！）

御坂は自分の胸元を手で鷲掴みにすると、その異常に高まる胸の鼓動を、何とか必死に抑えつけようとしていた。

その原因と言えるのが……。

「ほれ？

『ヤシの実サイダー』で良いんだよね？」

コイツだ……！

（もう決めた……そう、もう決めたのよ私は！）

首を左右にブンブン振りながら、何かを振り払おうとする御坂。

（途中で投げ出すなんて事、絶対に出来ない！！　――って言うかそんな事絶対しないっ！！）

と、独り言をボソボソと呟きながら、自分に渴を入れている。

しかし、自分に言い聞かせれば言い聞かせる程、意識すればする程に、その顔は徐々に赤く染まっていくのだった。

（よし……よし、よし！

大丈夫……私なら出来る……）

ふう……と、息をひとつ吐き出し、身体の緊張をほぐそうとする御坂。

そう、覚悟なら既に固まっていた……。

（私は……私は今度こそコイツに――！）

「んで？」

……話したのは何なんだ？」

御坂の体が、驚いた猫のようにビクンツと反応する。

「わっ！ えっ！？ わっあっ……え、え……っ……！」

（いや……。

何テンパってんだよ……）」

過剰に反応する御坂を気にする素振りも無く、当麻は御坂の隣に腰を下ろした。

ドキッ！

「ちよっ！ 何隣に座って……」

「？」

何を慌てているのか……そう言わんばかりに、『？』マークを浮かべて、首を横に傾ける最強の鈍感男。

ベコッ！

（す・こ・しは意識しなさいよね！ コイツはっ！！）

当麻の余りの無関心さに、持っていた『ヤシの実サイダー』を、へ  
こませる御坂。

顔を真っ赤にしながらフルフルと身体を震わせている。

……。

「はぁ……」

で……結局何なんだよ？」

ドクン――。

――瞬間、御坂は心臓が止まってしまふような衝撃を感じた。  
不意に核心を突かれた事により、御坂は動揺を隠せなかった。

「あつ……その……」

口をパクパクとさせながら何か言いたげな様子である。  
しかし……そこから先の言葉が出てこない。

ボソッ……。

「お礼が……」

「……？」

「お、お礼っ！」

おおお礼がしたかったのよっ!!」

・  
・  
・

（約10秒沈黙……）

「はあ……お礼？」

（チガウウウウーッ!!）

思わず出てしまった。

その言葉は本心ではあったが、実際に言いたかったセリフとは違うものだった。

「アンタには、妹達シスターズの件もあるし……。  
それ以外だって色々……」

「ああ、まあ……その事なら別にお礼される程の事でも……」。

あれは自分の為でもあつた訳だしさ……」

「いや……その……まっ待って……」。

そうじゃ無いのー！！ そうじゃ無くて……その……」

あつあれ？

何で、何だろ？

あれだけやるって覚悟を決めていたのに……」。

いざ、目の前に直面してみたら……、何も出来ない……」。

今までこんな事は一度も無かったのに……」。

レベル5になる前だって、一度も物事に対して妥協した事は無かった。ハズなのに……」。

「御坂？」

どうして？

何でいつもコイツの前だと、……素直になれないんだろう？

「オイ、さっきから一体どうし……」



ドキンッ!?

(~~~~っ!?!?)

当麻は余りの衝撃に自分の目を疑った。

何故ならば……、あの御坂の瞳に、うつすらと涙のようなモノが!?

「みっみみ御坂さん!?

一体全体、何がどうなってしまったんですかつ!?

「バツ……バカッ!!

これは違うわよ……め、目にゴミが入っちゃっただけなんだから!!  
別に、泣いてたとかそんなんじゃない無くて……」

352

目元をグシグシと腕で拭う御坂。

その腕を離れた際に、涙のせいなのか、擦り過ぎたせいなのかは分からないが、目の周りがうつすらと赤く染まっていた。

ーースッ。

(?)

御坂の俯いた顔に、僅かに影がかかる。

前方から、何か顔に向かって伸びて来ていた。

それは……。

「うわぁ……ひでえ顔になってんぞお前」

御坂の頬に右手を当て、まじまじと顔を覗かせる当麻。

「ほら、悩みあんなら相談に乗るから……」

そう言っつて、左手で御坂の目元から溢れる涙を拭う。

(……………)

――カランカラン。

瞬間、数秒の間身体が固まってしまった御坂は、余りに突然な当麻の行動に、思わず持っていた『ヤシの実サイダー』を落としてしまった。

「ふわっ！？ あっゴメ……！」

「オイオイ何慌て……」

2人のちょうど間に落ちる『ヤシの実サイダー』  
御坂と当麻はほぼ同時に腕を伸ばして拾おうとした。  
すると……。

ピト……。

御坂・当麻「……!」

互いの指が重なり合い、指先がちよこんと触れ合う2人。

「ごっゴメツ……!」

「い、いや! こっちこそ……!」

……

顔を上げた2人は、同時に目が合い、その余りに恥ずかしさに顔面を真っ赤にさせている。

特に御坂は、モジモジとしたり、目を反らしたりと、何とか平然を保とうとしているようだ。

……一方。

『な、な、な何なんですの……あの異様な雰囲気は……!?!?』

数メートル離れた通路の影から、黒子が2人の一部始終を観察（盗み聞き）していた。

『あ……あんな初々しい姿のお姉様は、未だかつて見たことがありませんの……』

ドクン……。

何か信じられないものでも見たかのように驚く黒子。

しかしその一方で、胸の奥がモヤモヤとする、抑え方がまるで分からない、まどろっこしさも感じてしまっていた。

『お姉様？ い、一体何をする気なんですか？？  
このシチュエーションではまるで……』

……。

「私は……さ」

前髪をクシャクシャと掻きながら、御坂は口を開いた。

互いに赤らんだ頬の熱は、まだ冷えずに残っている。

「妹達シスターズの件で……あの実験で『絶望』って言うどつしよつもない地獄を見たの……」

ビクッ!?

妹達シスターズ

その言葉を聞いた瞬間、当麻の肩がビクンと反応する。

「全部私のせい……。  
そんな考えしか浮かんで来なかった……私の能力では食い止められない、圧倒的な科学の力……」

恐らく御坂の人生に置いて、最も時間が永く感じたであろう。  
永く、苦しく、そして険しい……そんな茨の道……。

その時の記憶が、御坂の頭の奥底から、映像として浮かび上がる。

私がDNAマップを提供しなければ……。  
私が一方通行を止められていたら……。

私のせいで……一万人以上の妹達シスターズが――。

私が……わたしが……！　ワタシが――！！

――……。

「でも……アンタが言ってくれた一言で……」

『お前は笑っても良いんだよ』

嬉しかった……。

救われた気がした。

抱え込んでいたものを全部取っ払ってくれたのだから……。

そう……だから……。

「本当はね……。

ずっと前から……お礼が言いたかったの……」

(……御坂)

本当はそれだけじゃ全然足りないんだと思う……。  
でも、今私に出来る事は一つしか無いから……。

……

「本当……ありがとね」

下ばかり向いていた顔を上に上げ、ニコッと、当麻に微笑みかける御坂。

それはまるで、天使のように澄み渡った笑顔。  
あの地獄のような絶望感は、その笑顔からは一切感じられなかった。

『……お姉様』

この距離では何を話しているのか、所々で聞き取れない。  
しかし、今御坂が見せている笑顔が、空気が、これからどんな話に進もうとしているのかを物語っていた。

そして……、

ドクン……。

状況を理解すればするほど、黒子の胸に、不安を告げる音信が響き渡る……。

……。

「そ、そんな改めて言われると……何か照れますな」

はは……と、小さく笑いながら頭を掻き始める当麻。

「だ、だからね……私はあの時から……」。

ううん！ 本当はもっと前からだったかもしれないけど……！」

御坂の思いは止まらない……。

ここを逃したら、もう二度と無いかもしれないのだから！

「全然素直になれなくて……、それが何でもかもずっと分からなかつ



たけど……、  
でも、今なら分かるのっ!!」

ー ドクンッ!

『お姉様……!?!』

御坂の想いは強く、そして真っ直ぐに突き進んでいた。

ここで全部吐き出して、今の関係が崩れるのは怖い……。でも、誰かに言われる前に……。もし言わないで一生後悔するようない……。そんな事にだけは、絶対にしたくない!!

ドクンドクンッ!!

『お姉様……待っー』

「わっ私は……アンタの事が……」

ドクンドクンドクンー!!

「ずっと……好ー」

ーズキンッ

！？

その時、  
黒子の胸に異様な痛みが襲いかかった。

今までの不安じみたものとは違い、締め付けるようなものではなく、それはまるで、針を刺すような痛みだった……。

……ーッダッ！！

「とうまあああーッっっ！！」

あれ？

「へっ？」

『ふえっ！？』

「はいいいっ！！？」

一瞬何が起きたか分からなかった。

廊下中に響き渡るようなその声に、その場にいた全員が反応する。

ガブリッ！！

御坂が全て（と言うか肝心な所）を言い終わる前に、前方からもの凄いいスピードで飛んできた何かが、とうまの頭部に直撃した。

「ぐおおおおお！！」

「とうま聞いてっ！！」

るいこが強過ぎて結局一回も勝てなかったんだよ！！

これも全部応援してくれもなかったとうまの責任なんだからねっ

！！」

当麻の頭にかぶりついたまま、一向に離れようとしなないインデックス。

「おまつ！？」

フザケンなっ！ 理不尽を通り越して感動してしまうわ！！」

「にゃにお~~~~っ！」

更に力を込めて噛みつくインデックス。

当麻の頭部から血がドクドクと流れ出ている。

「ちよつと！ アンタ達何やって……！？」

余りにいきなりの展開について行けない御坂。

さっきまでの緊張感漂う雰囲気はなんだったのか……。そう思わずにはいらなかった。

「ありゃ~~~~っ！ ……」。

上条さんの匂いがするとか言っつて、全力で走り出したんですけど……、本当だったんだ……」

後から追っかけて来たのだろうか、佐天が息を切らしながら現れた。

??

「あれ……？」

佐天は思う。

当麻と御坂が2人きりでこんな所に……しかもやけに顔が赤らんで……。

「御坂さん……もしかしてお邪魔でした？」

「えっ!？」

「いや……その……」

まさに図星である……。

御坂にとっては人生を左右する。そんな場面だっただけに、落胆感  
は計り知れない……。

（はあ〜）

結局、お預けか……。

御坂の覚悟は、深いため息に変わって吐き出される。

今までも、こういった時は必ず邪魔が入ってきていたので、意外と  
早く受け入れる事が出来た。

（でっでも私は頑張った……頑張った！！……わよね？）

一歩……いや、半歩は前進する事が出来たハズ……。

焦らず……また次のチャンスをもノにする。

今の御坂には、それだけの事を言える自信が付いていた。

……。

ズキンズキンー。

（痛い……痛いんですの……）

余りの苦しさに、その場にうずくまる黒子。

その痛みは、今まで感じた事の無い、外傷で受ける痛みとは全く異なった痛みだった。

訳が分からない……。

頭の中が真っ白になってしまふ……頭がグチャグチャになって混乱してしまう。

「……し、白井さん？」

「!？」

声に反応し、後ろを振り返る黒子。

そこには心配そうな顔で佇む、初春の姿が……。

「初春……何でアナタがココに……。  
佐天さん達と一緒に居たハズでは？」

マズい……。

直感的にそう思った。

「……白井さん？  
泣いてるんですか？」

(……へっ?)

何を言っ……？

そう感じながら自分の頬に手をやる黒子。  
すると……。

「!？」

濡れている……。

涙？ いつの間に……。

それはこの痛みによるものなのか、はたまた別の何かが原因なのか……。

もう、それすらも分からない……何かなんだか……何も分からない……!!

(~~~~~っ!!)

――シュン!!

!？

「しっ 白井さん!？」

その場を逃げるように、テレポートを使った黒子。

何かが……何か様子がおかしい……。

そう感じた初春は、急いで辺りを伺い、そして走り出した。  
親友を……、黒子を探す為に……。



.....。

「ハア.....ハア.....」

一つ上の階にある、薄暗い通路の端で、黒子は胸を抑えつけながら呼吸を整え、ようやく冷静さを取り戻そうとしていた。

「うつ!!」

ズキッ!

まだ胸に残る痛み。

原因は、時間が経つにつれ、大体理由が見えて来る.....。

.....

「最低.....ですわね.....」

あの時.....、

インデックスが乱入して来た時.....分かってしまった。

邪魔が入った瞬間、心のどこかでホッとしてしまった自分がいる。  
お姉様が幸せを掴もうとしていたにも関わらず……。  
ホッと……。

「~~~~っ!!」

本当は前々から気づいてはいた……。  
でも、認める事が出来なかった。

「わたくしは……」

頬を伝って、ポタポタと床に落ちる涙は、もう止める事は出来ない。  
い。

苦しい……。。

この気持ちに気づく時はもっと嬉しいものだと思っていたのに……。

（お姉様が好意を持たれていた方を……）

好きに……。。

.....。

「白井さん……？」

汗だくになりながら、初春が黒子の名前を呼ぶ。  
相当心配していたのだろうか……その顔は、どこか不安そうである。

「白井さん！？

大丈夫ですか！？ 私心配になって……！」

しかし、黒子から返って来た言葉は意外なものだった……。

「あら初春？

何をそんなに慌てていますの？」

「――えっ？

まるで何事も無かったかのように振る舞う黒子。  
そのままテクテクと初春の方へ近づいていく……。

「何か、変な誤解を産んでしまったみたいですね……。  
もうわたくしは大丈夫ですから……、早く部屋へ戻りますわよ?」

そう言っで、初春を横切り、そのまま部屋へ戻ろうとする黒子。

ギリ……!!

「白井さんっ!!」

初春が叫ぶ。

それは、普段の初春からは想像出来ないような怒鳴り声だった……。

「なんで……。」

なんでウソつくんですか!? そんなの信じられる訳無いじゃないですか!!」

いつも見てきた黒子は、どんな時でも涙なんて見せなかった。

いつも見てきた……だからこそ分かる……今の黒子が強がってウソをついていると言っ事ぐらい!

「私でも、相談位乗りますよ……。」

だから……、もっと頼ってくれたって良いじゃないですか……」

頼って欲しい。

今まで沢山助けられて来たのだから……。せめてこんな時位……。

初春の肩が震えている。

彼女もまた、泣いているのだ……。頼って貰えなかった悔しさに……。

……。

「申し訳ありませんの……初春」

そう言つて再び止めていた足を動かす黒子。

さっきまでの強がっていた言葉遣いとは違い、今の黒子の心境を思わせるような真剣な口調で話す。

「少し……1人で考えたいんですの……」

「白井さんっ!!」

――シュン!

次の瞬間、黒子はテレポートを使って、この場を立ち去った。  
黒子の最後の言葉……、それはどこか細く、そして悲しい……そんな直ぐに切れてしまう、薄い糸のような声であった……。

つづく

## 第17話（後書き）

今回の心理描写はなかなか……。

大変でした！！

（、・ヾ

自分の大切な人、例えば親友などが同じ人を好きになってしまった時……。

胸は何故か、ズキンと痛んでしまうものなのです……！

ちょっと私には珍しい、悲しい感じの話でしたが、やっと恋愛っぽく書けたかな？ と、結構満足しております！！

（o^ ^o）

ちゃんと良い話に最後持って行けるよう頑張りたいと思います！  
これからも、どうか応援宜しくお願いします！！

（　　）

## 第18話（前書き）

皆さんご無事ですか!?

地震があつて色々立て込んでました!

前回投稿から、かなり間が空いてしまいましたがご了承下さい!!

m ( \_ \_ ) m

被災に遭つた皆さんにも元気を届けられたらなあーと思います!

なので私は元気出していきます!

皆さんもファイトです!

( \_ \_ )



## 第18話

「ん……んう……」

窓から差し込んで来る光によって、閉じていた瞼をゆっくりと開かせる黒子。

（朝……ですわね……）

頭が少しボーっとする。

そんな朝独特の乾いた空気は、まるで黒子を布団から出すのを拒むかのように、起き上がる気力を奪うのだった。

（……………）

天井に描かれた木造建築ならではの、木の年輪模様を眺めながら黒子は思う……。

（昨日は少し、色々ありましたの……）

朝っぱらから深いため息をつく黒子……。ボーっとしているからなのだろうか……。昨日の色々な場面が、映

像として脳裏に浮かび上がる。

ズキン……。

(……………)

古傷のように残るその痛みにも、黒子は自分の胸元をギュツと押さえつける……。

その痛みは失恋じみたショックからなのか……。

愛する御坂を嫉ましく思ってしまった、自分への怒りなのか……。

または……心配して駆け付けてくれた友人を、泣かし、突き放してしまった罪悪感からなのか……。

(……………恐らく全部、ですわね……………)

分かっている。

原因は全部自分よがりな勝手な感情……。

自分が納得して飲み込んでしまえばそれで済む話である。

（初春にも……後で謝らなくてはいいけませんの……）

そう言って、ゴロンと横に寝返りを打つ黒子。

これ以上、天井を見上げていても、嫌な考えしか思い浮かびそうになかったからである。

……しかし。

「うう……、インデックスさん……それ以上は家計費に多大な影響があ……」

ん？

寝返りを打ち、横に顔を向けた黒子の目に飛び込んで来たもの、それは……。

！？

「んなつ！？」

……。

「…………んあ？」

目を半開きにしながら、寝ぼけた様子で黒子を凝視する当麻の姿が…………。

（な、何故上条さんがわたくしの隣にっ！？）

ヒクヒクと口元をひきつる黒子。

あまりに突然すぎる出来事に、身体が硬直して動かなくなってしまった。

一方当麻はと言うと…………、まだ上の空の状態のまま、黒子をジッと見つめ続けて来る。

（…………）

（なっ何でずっとコツチを見て…………！？  
逆にこちらが恥ずかしいんですの！！）

当麻から送られる視線に耐えかねた黒子は、思わず布団の中に少し潜り込み、視線を下へと向けるのであった。

その時である……。

ポフッ……。

「ーッ!？」

黒子の頭に軽く重み加わる。  
それは直接見なくても感触で分かってしまう……。自分の物とは一回り大きい……当麻の手の平であった。

「はわっ!？ わっ!！」

ナデナデとさすって来る当麻。

黒子はただ、顔を真っ赤にして驚くばかりであった。

もしかしたら、昨日何があったのか全部知っている？

黒子の脳裏に一つの推測が産まれる。

その上で慰めてくれている？ ……のだろうか？

（まさか、そんな……）

有り得ない……。

そう感じつつも、温かく、そして優しさがあるその手が、黒子の期待を膨らましていく。

（有り得ない事なのですが……。  
でも……、もしかしたら本当に……）

意を決して顔を前に向け、再び当麻と見つめ合う黒子。  
その胸に、少しの希望と……少しの不安を織り交ぜながら……。

……。

「ん……っ」と……」

ドキン……！

来る……！

胸を押さえつけながら、更に当麻の方へ顔を近づけて行く黒子。

・・・

「えつとお……」。

なんで小学生がここに居るんですたっけ？」

……。

ビキンッ！！！！！

ある意味、衝撃的な一言であっただろうが……。

「フ、フフフ……」。

言うことかいて小学生とは……フフフ……笑いが止まりませんわね？」

肩をプルプルと震わせて、右手を目の前に突き出している。

「……はっ！！」

お、俺は一体……？」

何か嫌な予感を感じたのか……、当麻は首から上をキョロキョロ左

右に振りながら、忽然と目を覚ましたかのような反応を示す。

ゴオオオオオッ!!

ーゾクン!

(~~~~っ!!?)

背後からもの凄い殺気というか、炎というか、オーラというか……。とにかくそんな感じの、『人間の形をした二本角の悪魔』を発見した当麻の口から一言……。

「し……しらいゴフオッ!?’」

……瞬間、彼の顎が消し飛ぶ勢いで、宙に舞った。

・  
・  
・

〽昨日の就寝前〽



御坂・黒子「……………」

こ、これは一体どうすれば……。

目の前に広がる光景は、布団が上下に3つずつ、計6枚の布団がびつしりと敷き詰められている、ふっかふかの布団達。

そんな旅館では当たり前前の光景。……なのだが。  
ここで問題が一つ……。

このままでは、『誰か確実に当麻の隣に寝る者が現れてしまっ』と  
言う事実である！

「え〜と……。  
じゃあ俺はここでいいや……」

！！

さっ、先に動いたッ！？

自分が一番の主要人物だと全く気付いていないのか？ この鈍感男  
はっ！！！？

女性陣一同からそんな心の声が、作者の脳に直接鳴り響く。

……。

そんな当麻が選んだのは、一番右端の手前側に敷いてあった布団である。

恐らく一番扉に近かったとかそんな理由であろうが……。

(うつ……)

(動けない……！)

ど、どうすれば……。

別に当麻の隣が気になるとかそんなんじゃない！

と、頭ごなしには否定しつつも、当麻の隣で寝られるというシチュエーションが、一瞬本能に揺さぶりをかける……。

……。

「じゃあ私はとうまの隣に寝るんだよ！  
ねっ？ スフィックス」

！！？

御坂・黒子「んなっ！？」

飼い猫のスフィックスを抱きかかえながら、真ん中手前……つまり  
当麻の隣の布団ヘインデックスはダイブする。

全く恥じる事無く隣に入ったその度胸……もはや、逆に賞賛物である……。

（何なのよ……っ！  
どうしていっつも、こう……邪魔ばっかり！？）

ボソッ。

「あの、御坂さん……」

慌ただしい表情で髪をグシャグシャにする御坂に、初春は恐る恐る  
声をかけた。

「な、何？ 初春さん？」

「次、どこに誰が寝るかは、御坂さんから先に選んでも大丈夫ですよ……？」

あの、年功序列と言うことで……」

??

選ぶっ たって……。

「別に、どこ選んだって一緒なんだし……」

「いえ……あの……。

言いにくいんですけど、上条さんの真上とか空いてますし……」

……ッ！！！！？

そう。

確かに上下の布団は、枕が向かい合っている為、もしかしたら……。

（アイツと……話しか話しか話しか話しか話しかが出来ちゃうんじゃない？！……！！？）

御坂が狙っているのはこのポジション。

## 禁 当

御坂は目をキラキラさせながら、両手を頬にあて、『うーん……  
で、でも……キヤーッ!!』などと言っている。  
流石におかしな人にしか見えない。

ハッ!

「あ……待って! これはそう言うんじゃない無くて……えと、その!  
」

不意に我に帰った御坂は、初春や黒子の方へ勢いよく振り向くと、  
両手を左右に全力で振って、『さっきまでの自分は違う!』とアピ  
ールしている。

「み……御坂さん! 大丈夫です! わっ私は何も見てませんから  
」

「わ、わたくし達は後で宜しいんですの……。  
先にお姉様が決めて下さいな」

「御坂さんがどこを選んだとしても、私は気にしたりしませんよ  
」？」

うぐっ!!

この状況で堂々と選ぶのは苦しい……ましてや当麻の上のポジションなど。

(でも……は、話し……話しが……！

いやいや!! でもここで素直に選べなんて……!!)

・・・

「み、御坂さ……」

「ジャッ……ジャンケン！

ジャンケンで決めましょう！ うんそうしよう!!」

何い~~~~ッ!!?

後輩組全員がまさに度肝を抜かれた瞬間である。

「いや、でも御坂さん。

ジャンケンですと……その、最後はあのポジションが余るか御坂さんの番で止まるかで、結局変わらないんじゃないじゃ……？」

うぐうつ!!？

確かに皆して御坂に気を使って、あのポジションだけ空けそうである。

ブルブル~~~~ッ!!

御坂の身体が小刻みに震えている。

いや、もはや電気が身体から漏れそうである！

「アミダよっ!!

アミダくじで場所を決めましょう!!」

後輩一同（（……………）（（

な、ななななんですとおお~~~~ッ!!？

何故ッ！？

何故皆が『あのポジションで寝たいんだろ？　いーよ、寝ろよ？』  
って言ってるのに（ちよつと言い過ぎだが）そのチャンスを見すみ  
す潰すんだ！　この人はあゝゝゝッ！！？

……そして数分後。

誰かが、当麻が寝ている布団の前で静止し、顔を覗かせるような体  
制で当麻に向かって一言発する。

「お、お邪魔しまーす……」

（？）

目の前に影が入り込み、閉じようとしていた瞼が開いていく当麻。

「ん……ああ、宜しくな……」

あの激戦ポジションを勝ち取った者。  
それは……。



「え〜と……、初春さんで良いんだっけ？」

「ハ、ハイ……」

結局、ポジション取りは以下の通りとなった。

|      |      |      |
|------|------|------|
| (御坂) | (佐天) | (初春) |
| (黒子) | (禁書) | (当麻) |

どうやら御坂は、布団の中にうずくまりながら、その中でいじけているようだ。

まさか自分は、アイツから一番離れた所になってしまふとは……。

何故あの時、選択権を貰えたあの時に素直になれなかったのか……。恐らく今凄く後悔しているであろう。

そんな御坂をよそに、黒子は内心では少しホッとしていた。

正直、初春とはどう顔を合わせれば良いのか分からない……。

ズキン……。

(……………)

それに、今はそれどころでは無い。  
人はそう簡単に立ち直れはしないのだから……。

(とにかく今は、早く明日になって欲しいんですの……………)

そうやって目を閉じ、夢の世界に入ろうとする黒子。

本当は今この瞬間も全部夢で……………、明日には全部無かった事になっている……………。

……………。

(……………なんて、馬鹿らしいですわね……………)

そんな事があるハズは無い。  
分かっている……………。  
それでも……………。

明日になれば何かが変わっている。  
そんな事を信じて。

.....。

「でっ!？」

朝起きてみればコレですね!！」

「クソオ……。不幸だああ……」

顎を抑えつけて涙目になっている当麻。

黒子のアッパーを喰らって、痛いで済むとは恐ろしいタフさである。

「そもそも何でわたくしの隣で寝ているんですのっ!？」

確かにそうである……。

就寝前までは、黒子の隣はインデックスが寝ていたハズなのだが、何故かインデックスと当麻の位置が入れ替わっている。

「ん……」。

確か昨日、インデックスがトイレ行って戻って来た後、俺もトイレに行っ……」

ま、まさか……。

「ああ〜！

戻って来た時にインデックスが俺の布団で寝てたんだ！」

ヒクッ。

黒子の口が僅かに引きつり、その小さな身体がフルフルと震えている。

「それでまあこっちで良かったーぐふうっ!？」

当麻の顔面に黒子の華麗な右ストレートが炸裂した。  
当麻は、もの凄い勢いで悶えている。

「もー。朝から騒々しいわね……」

「ふああ……」。

皆さんおはようございます……」

2人の騒音につられて、寝ていた他の者も、続々と目を覚ましてい

る。

「ぬおおおおっ!!」

朝から何で意味も分からず、ボツコボツにされる不幸展開になってんだよ!?

俺そんな悪い事しました!!?」

「良い事、悪い事以前に常識が足りてませんわっ!!  
何で朝起きた第一発目がアナタの寝顔なんですの!?  
こっちだってそんな物見たくもありませんの!!」

朝っぱらからギャーギャーと騒いでいる黒子と当麻は、相変わらず犬猿の仲のようである……。

いや……これは逆に仲が良いのでは?

御坂・初春・佐天（（……………）（）（）

ボソッ

「平和ね」

「平和ですね……」

「なーんか楽しそうですね……」

三者三様にそう答える。

朝っぱらから怒鳴り声で起こされた3人は、誰かヤツ等に朝の常識とやらを教えてやって欲しいと強く願うのだった。  
(因みにインデックスはまだご就寝中)

……。

「はぁ……」。

そう言えば、帰りの予定って全く決めてなかったわね……」

身体の周囲にバチバチと電気を纏わせながら御坂は言う。

その御坂の周りには、真っ黒な炭と化した『物体』が2つ……。

「確かお昼頃にあつちに着くようにするんですよ？  
だったら10時、11時ぐらいに出発で良いんじゃないですか？」

布団の毛布を丁寧にたたみながら答える佐天。

持ち前の家事スキルを遺憾なく発揮している。

「もしかしたら、もう一回位温泉に入れるかもしれませんね？」

『え〜と、今の時間は……』と、携帯をいじりながら時間を確認する初春。  
すると……。

ガラ……。

「あっおはようございます……。  
食堂で朝食が準備されてますので、お時間に都合が宜しければ、是非おこし下さい」

昨日の若い女将さんが朝食の用意を……。

ガバッ！

「ごはん……！」

ごはんの匂いがするんだよっ……！」

おい……。

もの凄いスピードで目を覚ますインデックス。  
その目は完全にイっちゃってます……。

「とうま！」

そんなところで焦げてないで早く行くんだよ！」

「あつ、ちょ………！」

「……んあ？」

そう言つて当麻の襟を掴み、猛スピードで食堂に向かって引き釣り回して行く。

「ぐおおおおおう！？」

（不幸だあああああつ！！！！）

「ちょ………！」

な、何して………！！！」

流石にちよつと可哀想。

そつ思い、手を伸ばした矢先……。

「あああああ、っ！！！」



ビクウツ!!?  
今度は何っ!?

異常な叫び声。その声の発信元は……。

「う、初春?

どうしたのよいきなり……?」

近くにいた佐天が恐る恐る声をかける。

……が、

「ジャ……ジャツジメント風紀委員の仕事……昨日依頼来てたのにすっぱかしちゃいました。

(しかもコールが5、6回入ってます……)」

涙目になりながら、初春はそう呟く。

……小動物みたいでなんか可愛い。

「いや、初春……」

「ど、どうしましょう。

一応、固法先輩には旅行の事は言っておりますけど……。コールが

入ってるって事はもしかしたら重要な事かもしれませんし……」

「いやいや、旅行してる事は言ってるんだし、別に大丈夫じゃ……」

ユラリ……。

「良い訳ありませんの……」

ひい！

佐天の背後からユラリと黒子が姿を現す。

「しっ 白井さんっ！！」

「うゝいゝはゝゝゝ？」

わたくしは確かここに来る前に、仕事の情報・連絡等は、オペレーターであるアナタに任せたと言いましたわよねゝゝ？」

こめかみに分かり易い位の『怒りマーク』を浮き出し、初春の柔らかほっぺを思いつきり引つ張る黒子。

ギュゝゝッ！

「痛い！ 痛いですよ白井さんっ！！」

「全く……。やはり一度、支部に戻る必要がありますわね……」

はあ……。と、黒子は呆れたような顔をして自分の荷物に手をやる。

「ふう。お姉様、申し訳ありませんの……」。

お姉様を残して先に帰るなど、本来ならば言語道断なのですが……」

「ん？」

別に良いわよ？ 仕事なら仕方ないんじゃない？」

うわぁ〜、返事が適当クサー……。。

「お姉様……。わたくしを思っでそこまで……」

……。オイッ！

注：黒子は御坂に対しては異様なほどプラス思考が働きます。

「では初春っ！

さっさと行きますわよ」

「ふぁいい〜……」

――シユン。

やれやれ……。

そう言わんばかりにため息をつく御坂。  
レポートで移動した黒子達を見送り、そのまま食堂に向かおうとする。

「御坂さん……チャンス到来ですね〜」

「え？」

佐天の突然の質問に御坂は頭を横に傾げる。

「だってあの2人が居なかったら、上条さんにアタックするチャンス増えるじゃないですか――」

……。

「えっ!？」

わっ私は別にそんなつもりは――!」

「私応援してますからね――!」

ウソ……。これってチャンス？ チャンスなの？  
顔を真つ赤に染めながら、御坂は改めて今自分の状況を再認識するのだった。

……。

「仕事といっても内容は簡単みたいですわね。  
先輩1人ではこの量はこなしきれなかった……と言っただけみたいですの」

携帯で情報を仕入れながら、レポートで進んでいく黒子と初春。

黒子としては、正直初春と2人きりというのは気まずいのだが……。いつまでもそうは言ってられないであろう。

「ま……結局仕事は早く終わりそう……」

「白井さん！」

ドキッ！

（！？）

突然の呼びかけに、思わず黒子は動揺してしまう。

「な、何ですか？ 初春？」

ニコッ。

「仕事が終わりましたら一緒にお茶しませんか？」

・・・

「えっ！？ …… 2人で… ですか？」

「ハイ

丁度白井さんと話したい事がありますから」

ー ドクン。

胸の痛みが、古傷ように開く……。

『怖い』

この感情。ホラーや怒った時の御坂以外で感じてしまうなんて……。

U  
U  
<U>

## 第18話（後書き）

実はここに来て、米派からパン派に変わりつつある今日この頃です。  
（震災の影響大ですが……）

後で米をガッツリ食べてやるぜいコンチキショーーッ！！  
○（、、）○



## 第19話（前書き）

実は好きな人に自分から告白した事が無い私……。

この作品を書いていて、逆に私自身が勉強させられた事に、改めて気づきました。

（＊＾Ｏ＾＊）

今度好きな人に『好き』って言うてみようかな……？

（恥ずかしいですが！）

と、思ってしまった今日この頃……。

（ ）

## 第19話

ガタガタン……。

ドクンドクンドクン!!

「~~~~っ!」

現在御坂達は、温泉から第7学区まで、直通で走っているバスの中にいた。

(なん……で、隣にコイツが座ってんのよ!?)

「ZZZZー」

御坂の隣には、無防備に眠りにについている当麻の姿が……。

(うう……!)

こっこんな状況で落ち着ける訳無いじゃない!!)

ギュー〜つと、スカートの端を押さえつけ、赤面する御坂。  
その身体は、今から面接するのか? と思わせるぐらい、極度の緊張でカッチコチに固まっていた。

「うーん……」  
「カクン。」

ポンッ。

(~~~~っ!!!!?)

瞬間、御坂の身体がビクウッ！と反応する。  
当麻のツンツン頭が御坂の肩にポンッと寄りかかって来たのだ。

(ふえっ!? ちょ……ちよつと!?)

「すうー。すうー。  
う、うーん……むにゃ」

無垢な寝顔で、無防備に眠りにつく当麻。  
そんな当麻の横で、顔をひたすら赤く染めている学園都市7人しかいないレベル5。

アワアワと完全に動揺している御坂は、通路を挟んで向かい側に座っていた佐天に、助けを求めるように声をかけた。

ボソッ。

（さっ 佐天さん……！）

「？」

御坂の声に反応したのか、佐天はそのいかにも重たそーな半開き状態の目を、キョドリまくっている御坂へと向けた。

互いに目を合わせる2人。

頼りない位、ボケーツとした顔をしている佐天に対し、御坂の瞳は今にも泣き出しそうな位ウルウルになってしまっている。

（御坂さん……何で涙目??

しかも顔は何か真っ赤だし……）

（佐天さん！ ちょ、ちょっと場所変わってくれない!?!）

「はい？」

チヨイチヨイと、自分の右肩を指差す御坂。

（？）

その動きにつられて、佐天が首を伸ばして覗き込んで見てみると、そこには御坂の肩でグッスリと眠る当麻の姿が。

(……)

ふむ。と頷きながら、佐天は右手を自分の顎に当て、少し考え込む。大体の状況は理解した。

ボソ……。

「でも、今の御坂さんが可愛い過ぎるんですよー……」

佐天はチラリと御坂を横目に見る。

確かに泣きそうな御坂と言うのは、超レアでしかもメチャクチャ可愛い。

……つまり。

「え……？」

さ、佐天……さん？」

ニコッ。

勇ましく親指を立てて、笑顔で佐天は答える。

「御坂さん！ グッジョブです！」

(なっ何があゝゝゝゝつ!!!?)

佐天のあまりに予想外な行動に、御坂はかなり動揺している模様。

そんな御坂をよそに、佐天は自分の横で寝ているインデックスに目を向け、彼女の乱れた修道服を丁寧に直した。

そして何事も無かつたかのように、イスを少し後ろに倒して、何食わぬ顔で佐天は眠りにつく。

!?

(ちよつと――！?)

佐天さん。何か楽しんでませんか？

御坂はそう思わずにはいられなかった。

「ふー、うん、うん、うん、うん。」

とりあえずこの男を何とかせねば！

本来ならば電撃の1つや2つ、バチツとすれば良いのだが、当麻の寝顔が……その、何と言うか……、とりあえず直視出来ない！

テンパってワケが分からなくなっていた御坂を落ち着かせたもの。それは窓の隙間から入り込んだ、わずかな隙間風だった……。

————ふわっ。

その隙間風が、偶然当麻の髪をなびかせるのが分かった。

……クンクン。

（あつ。この匂い……）

風に誘われて御坂の嗅覚を刺激したのは、自分も使用していた、温泉のシャンプーの匂い。

シャンプーは皆共通で使用しているのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが……。

男の人の……当麻の匂いが少し混ざっていて……。

トロン。

(なんか……良い匂い)

御坂の顔が更に赤く、そして優しく和らぐ。

この匂いは、結構好き。……そう感じてしまうような、そんな不思議な匂いだった。

・  
・  
・

ドキドキドキキッ!!

(ムリッ！

あと30分以上もこんな状態なんて、絶対にムリィッ!!！)

第7学区に着く前に、果たして御坂の心臓は保つのだろうか？  
御坂の心の叫びが、学園都市の上空に虚しく響き渡る。

……………。



場所は変わって、いつものファミレス。

チラッ。

「……………」

「？ 白井さんは何頼むか決まりました？」

「えっ！？ えっと、ではコーヒーを……………」

御坂達よりも、いち早く第7学区へ戻って来た黒子と初春は、頼まれた仕事も早々に終わり、今はファミレスでくつろいでいる所である。

（ふう、しかし改めて2人きりになりますと、何をどう話せば良いのか……………」

水を口に含みながら、黒子は考える。

あの時は冷静では無かったとは言え、初春の気遣いを無視してしまった事には変わらない。

「初春……………その……………」

??

「何ですか？ 白井さん？」

暗そうな雰囲気を出す黒子とは対照的に、初春はいつものようにケロツとしていた。

あんな事があつたにも関わらず、だ。

精神が図太いのか、特に気にして無いのか、はたまた忘れて……？  
いや、それは無いであろう。

「あの時は、申し訳ありませんでしたの……。  
その、ごめんなさい。…ですの」

「!？」

ペコリと頭を軽く下げる黒子。

初春もキョトンとした表情をして、2人の間に数秒の間が生まれる。

静寂したその空気を払ったのは、注文したドリンクを運んで来たウエイトレスさんだった。

「お待たせしました。

コーヒークリームソーダです。ごゆっくりどうぞ」

コト……。

コーヒーを黒子の前に、クリームソーダを初春の前に置き、ウェイトレスはその場を外れる。

顔を上げた黒子の額には、微量ではあるが汗が染み出していた。その顔色から分かるように、未だ不安は拭いきれていないようだ。

「……泣いてる白井さんを見たのは、あれが初めてですね」

(???)

シャク……。

クリームソーダのアイスの部分にスプーンを入れ、それをクルクルと回し始める初春。

彼女の口角は、嬉しそうにニコツと上がっていた。

「えへへ……」。

心配……してたんですよ？　ずっと……」

まるで『お帰りなさい』と、そう言っているような位柔らかく、そして優しく初春は微笑んだ。  
小学生にしか見えないような、そんな純粋な笑顔で……。

……。

「お昼っ！！！」

「お前、目覚めての第一声がそれかよっ！！」

バスから降りた当麻達は、インデックスの猛烈な空腹アピールに、バス停前で立ち往生していた。

しかし女の子がこんな食っちゃ寝ばかりしてて良いのだろうか？  
インデックスの将来が非常に心配な当麻であった。

「お昼食べないと私は死んじゃうかも知れないんだよ？  
とうまはそれでも良いって言うんだね！！」

「だああああーっ！  
わかった！ わかったからそのキラリと光輝く殺人八重歯を早く隠してくれ〜！〜！」

猛獣化しそうなインデックスを前に、当麻は抵抗する間さえ与えて貰えない。

「はあ……、仕方ねえ。  
じゃあ皆でどつか食いにーっって御坂は？」

「とうま！ その大きくて深いため息は一体何なの！？」

うるせえ。この状況を不幸と言わず何て言うんだ！？

……ってか、いつの間にか御坂の姿が無い？  
降りる時は確実に居たハズなのだが。一体どこに？

ドン！  
「うおっ！？」

「あっ！ ぐ、ゴメン」

そんな事を考えていたら、突然後ろから衝撃を受ける当麻。  
軽く押された程度なハズだったのだが、何故か当麻はバランスを崩し、おでことアスファルトを豪快にぶつけ合うのだった。

「痛うっ！！」

くそお、不幸だああ……」

「ごっゴメン！ わざとじゃ無いから！ ホントに！！」

両手を突き出して本気で御坂は焦り出す。  
本当に間違ってぶつかってしまったようだ。

（何で毎回毎回こんな目に……。ん？）

よくよく見てみると、御坂の至る所におかしな異変があった。  
まず、いつもな気もするが、やけに顔が赤い。首筋には冷や汗のよ  
うな物があり、更に心なしか足どりがフラフラしている。

「御坂……フラフラしてっけど大丈夫か？」

「ふえ？」

スッーーー。

当麻の手が、御坂の前髪を持ち上げる。

「また風邪でも引いたか？  
なんか具合悪そうだぞ？」

……ッボン！！

御坂の顔面が突然爆発した！？  
まるで一煮立ちさせたタコのように、御坂の顔は一気に茹で上がっている。

「御坂は先帰った方が良いかもな？ なんなら送ってくし」

！！？

（お、送ってく！？）

当麻の怒涛のダブルパンチが炸裂！！

耐性が下がっている今の御坂さんには、効果テキメン！ と言うより、十分過ぎるダメージを負わせてしまっている。

そんな御坂に気付くハズも無く、当麻は『大丈夫か？ さっきより赤くなってんぞ？』などと言いながら、更に近づいて来る。

（~~~~ツ!!）

『ちょ、ちょ……、ちょっと待ちなさいよ!?!』などと言いながら  
徐々に後退する御坂。

（あつまた……。御坂さんは可愛いなあ〜）

微笑ましい光景に佐天はニヤニヤと、1人笑みを浮かべている。  
何で素直になれないのか？ 送って貰えるなんて超チャンス……。

……ッポン!!

佐天は何を思ったのか、突然両手をポンツ! と叩くと、すぐ横で  
ヨダレを垂らしているインデックスの方へゆっくりと近づいて行く。

「私、この子と先に食べてますから!!」  
上条さんは御坂さんを送って下さい!!」

・・・

「えっ!?!」



インデックスの肩をポフツ！と軽く触れて、佐天は堂々と言い放つ。

（インデックスはかなり驚いているが……）

「なっ！？ 佐天さん？」

「ん？ そうか？」

「じゃあそうさせて貰いますか」

当麻もその案に賛同してしまった！？

って言うか佐天さん。最近御坂を使って楽しみ過ぎな気がする。

「とうまー！！ 何で短髪と一緒にーーー」「ハイハイ。邪魔しちゃダメだよーっ」と

（むうー。ほうまゝっ！！）

インデックスは納得いつてないみたいだが、佐天が無理矢理口を押さえ、ズルズルと引きずってその場を離れようとしている。

（えっ？ ウソ！？ 本当にコイツと……？）

「ほれ。行くぞ御坂」

ギュッと御坂の手を握り締める当麻。恐らく、また無意識な行動なのだろうが……。

（わっ！？ わっ！ ウソ……ウソ！）

当麻に握られた自分の手をジッと凝視している御坂。  
幸せすぎて今にでも死んでしまえそうだ……そう思ってしまう程、御坂にとっては幸せな時間だった。

「ね、ねえ……？」

……ダメだ。でも、このままじゃダメだ。  
いつもコイツには助けられてばかりだったけど、いつまでも子供扱いされてちゃ堪えない。

？

「どうした？」

未だに顔を赤くしている御坂が勇気を出して声を張る。

「別に私1人でも十分帰れるわよ！  
そんな子供じゃ無いんだし……」

握られていた右手を御坂は自分から払う。

いつまでもコイツに甘えてばかりではいけない。そんな思いからの行動だった。

「じゃあまたね……ありがとう」

――ガシッ！

(！?)

御坂の思考が一瞬止まる。払ったハズの手を、当麻が握り返して来たのだ。

「待てよ！ 女の子を1人で帰らせる訳にはいかないだろ!？」

「お、女の子って……」。

私はレベル5なのよ!？ アンタみたいなのに付き添われなくても全然大丈夫――」

「そうじゃ無くて！」

……それじゃあ俺が心配しちまうんだよ」

・  
・  
・

（えっ？）

御坂は言葉を失う。

これは夢なのか……。本当に今日、死んでしまいそうな位幸せだ……。

（不幸が付きまとう彼には悪いが）

「あ、あの……。」

それってどういう……。」

「ん？」

当麻が御坂の声に反応して、うつむいていたその顔を上にあげる。

その時、当麻の目に飛び込んで来たもの……。

それは顔真つ赤に染め上げた御坂……。

……では無く、その後ろの。

青髪・土御門「カーミや〜ん！」

はい？

ドゴオツ！！

「ぐぶえっ！！？」

突然現れて来たのは、当麻の親友。三バカ（デルタフォース）こと青髪ピアスと土御門元春であつた。

御坂の後ろから当麻の喉元目掛けてダブルリアットを噛ます！

「カミや〜ん？」

何女の子の顔真っ赤にさせてはるんですか〜？

（しかもまた常盤台のお嬢様かいなあ〜！）

「それも何だあの恋愛ゲームのクライマックスのような、夕焼け空のバックが似合う、初々しいラブコメシチュは？ ええっくらカミヤん！？」

当麻に顔を押し付け、異様なオーラを纏わせる2人のバカ。

「ちょ……コレって一体何事よ!？」

「お、お前ら俺に恨みでもあんのか……?」

何とか当麻は起き上がって反論してみる。  
しかし、今はそれは逆効果であろう。

「恨みい!？」

「ちやうで、これは妬みや!！」

「いや、まだ俺何もやってな……ぐふう！」

青髪ピアスの強烈な右ストレートが炸裂する!

「そしてカミヤんのキザさと鈍感さには時タイラつくんだにやー  
!！」

バキィッ!!

「いや、そりゃあ関係無えだろ……ゴフッ！」

その言葉を最後に、まるで某人気ボクサー漫画のごとく、当麻はスローモーションで地面に崩れ落ちる。

「ちょ、ちよつと!!」

流石にこれはやりすぎなんじゃないの!？」

余りに一方的な出来事に御坂は加害者2人に問い掛ける。

「ああ、大丈夫大丈夫。

カミヤんのタフさは常人の域を超えて、もはやサヤ人か何かかと思ってしまう程なんだにゃー」

「しかしまあお嬢ちゃん　バス停から出て来たって事はアレかいな？」

皆で楽しい温泉旅行のハーレムパ〜ラダイスを満喫して来たってトコなんやろ？」

気持ち悪い位正確に的中している。

「な、何でそこまで……ってそうじゃなくて!」

御坂が反論しようとする、青髪と土御門の2人は当麻を両側から支え、持ち上げる。

「って事はカミヤんはそのハーレムの中にたった1人だったと……」

青髪・土御門（（生かしちゃおけねえ……！））

この時、当麻を睨みつける2人の目はマジで人を殺せそうだった。

「ま、待って！ 勝手にどこ連れて行く気なのよ！？」

「そのカミヤんとワイらで違う態度なトコがまたそそりますなあゝ」

「安心しろい。別に焼くような事はしないですたい。  
コイツは煮るんだにやー」

一体何が違うんだそれは！？  
異様な雰囲気醸し出すこの2人に、御坂の口は思うように開けない。

（と言うよりこの人達とあまり関わりたくない……）

「ほな、また逢えたらええなあー」。  
超電磁砲のお嬢ちゃん。今度はワイにも『ツンデレ』っぷりを見せ



てな〜」

ニツコリと爽やかすぎる笑顔で2人は去っていく。

2人の真ん中でボコボコにされ、肩を借りて運ばれる当麻の背中はかなり寂しそうであった。

(……………)

えっ！？ 何コレ。結局私放置されたの…………？

まるで嵐が去ったように御坂の周りに静寂が生まれた。

ピューっという、いかにも寂しそうな音と共に、虚しく御坂の前を風が横切るのだった。

……………。

同じ頃、黒子と初春は未だファミレスで休憩をしていた。

「やっぱり魅力的なんですか？」

？

「な、何がですか？」

コーヒーを飲みながら、黒子は初春の言葉に耳を傾ける。

「気になってるんですね？」

……上条さんの事？」

「グフツ！？ ゲホツゲホ！！」

あまりの衝撃に、コーヒーで喉を詰まらせる黒子。

「なっとな、何ですかのいきなり！？」

「何で恥ずかしがってるんですかー！。  
もう大体分かってますよ……私だって」

少しふてくされたような様子でいる初春は、その柔らかいほっぺを  
むうーっとなでさせている。

「白井さん……正直に答えて下さいね？」

「??？」

自分だって黒子の助けになりたい。

しかし、一番自覚しなくてはいけないのは黒子自身である。

だから告げるのだ。大好きな親友の為に……。

「好きなんですよね？  
上条さんの事が……」

つづく

## 第19話（後書き）

佐天さんがヒドいキャラになりつつあります（笑）

初春もだいぶ直球！（むしろ豪速球かましています！）的なキャラに変貌しちゃってます！

それぞれの作品に個性があるって事で見逃して下さい！

m（――）m

原作の2人はこんなキャラじゃ無いですよ？（笑）

……コホン。

勝手に舞い上がってました。すみマセンッ！！

では、また次話にてお会いしましょう。

（――）

## 第20話（前書き）

今回は笑い抜きな展開になっちゃっております（笑）

何でこんなガチな感じに……！？

まあ、たまには良いかあ〜。

（  
）

あと今回も『……』が多い事に反省。

（コンキさんすみません）

m（——）m

ではでは20話です！

## 第20話

『なんでこうなるんだろう?』

って、そんな自問自答の繰り返し、私をどんどん暗闇の方へと引きずり込んで行く……。

原因が何なのか。本当は最初から分かっていた。

―――けど。

初めての異性に対する『好き』と言う感情が、もう1人の大好きな人を……お姉様を苦しめると言うのなら。

迷う事無く、自分が目を瞑って諦めてしまう。

そんな道を、私は選ぶ。

この感情は全て幻想だと決め付けて……それが正しいと自分に言い聞かせて……。

その選択が最善だと……ただ信じて―――。

.....。

「ゴホッゴホ！？ ゲフ、グフッゴハッ！！」

「白井さん！？ だ、だっ大丈夫ですか！？」

コーヒーで再び喉を詰まらせてしまった黒子は、右手を初春の方へ向けて、少し待ってくれと静止をかける。

グフッゲホ……。

「ハアーーッ！ ハアーー……。  
やっと落ち着いて来ましたの」

喉に手を当てながら、徐々に落ち着きを取り戻して行く黒子。  
ふう。と息を1つ吐き出した後に、初春にもう1度聞いてみる。

「初春？

聞き間違えたとは思いますが……、今何と仰いましたの？」

……？

「ですから……。  
好きなんですよ。 上条さんの事」

まさに、ど真ん中ストレートの豪速球を投げ込まれた気分であった。  
あまりに直球すぎて、逆に反論出来ない。

「なっ何をいきなり言ってますの!？  
わたくしは……」

「じゃあ、嫌いなんですか？」

「……ドクン！」

何でそんな事を聞くのかが分からなかった……。

あのいつものホワホワした感じが一切感じられない程、初春の口調  
には強みがある。

「……そんな嫌い、と言う訳ではありませんが。  
って、そう言う事では無くて……」



……。

どうやっても言葉が詰まってしまう。

自分自身、どうすれば良いのか分かっていない黒子にとって、初春の質問は更に頭の中をグチャグチャにしまっただけであった。

自分の答えは『正解』では無いと分かっちゃまっている。  
だったらどうすれば良いのか？

「わ、わたくしは……」

いざ、問い詰められてしまうと、何も言葉が出て来ない。

御坂が好きな人が誰かなんて、既に分かり切っている。黒子自身が好きな人も分かり切っている。  
なのに……いや、だからこそ言葉が出て来ないのか？

ここで正直に『好き』と口にしてしまったら、もうこの気持ちは抑えられない気がした。

大好きな御坂との関係が変わってしまう気がした。

いつも当たり前のように過ぎていた日常が取り戻せない……そんな気がした。

……。

黒子の心が大きく揺さぶられる。  
大切な人を悲しませるなんて事は出来ない。そうなる位なら、自分が傷ついた方が全然マシだ……。

―――だったらどうすればいいのか？

「き……、嫌いに決まっていますわよ！ あんな常識が無い方は大っ  
つつっ嫌いですの！！」

思わず出てしまったその言葉を、まるで言い聞かせるように黒子は頭の中で繰り返し唱える。

「あんな変態で汚下劣でハレンチで非常識で頭が悪そうな方……」

『なんでこうなるんだろう？』

……その答えは見つからない。

「居るだけで疫病神で、ウニ頭でどこか抜けてて、鈍感で優柔不断でお節介で……」

当麻の文句を口にする毎に、黒子の肩は小さく震え、その顔も徐々に俯いていった。

「……お馬鹿さんで、変に頼りになって……いつも、誰にでも優しくて……」

当麻と関わった最近の出来事が思い出として蘇る。

鈍感さが招いた不幸もいくつかあったものの、いつも最後は頼りになって、優しく接してくれた。

あの当麻を嫌いになる？

この気持ちに嘘をつく？

それが簡単に出来れば苦労しない……。

それが出来ないから――。

……。

「……好きですわよ。  
好きになっちゃったんですの！ ……悪いんですの？」

まるで、絞り出すかのように小さくて細い。そんな泣きそうな声で黒子は言う。

「白井さん……」

神様って言うのは、よっぽどイジワルらしい。

やっこの思いで好きになった人も……、今までずっと好きだった人も、どちらを取っても、どちらかを見放す必要がある。

これが運命だったと言うならば、そんな運命、欲しくなんてなかった。

こんなに苦しいものだと思っていたなら、初めから……。

「初めから……、好きになんてなりたく無かったんですの」

こんなに辛いものだと思っていたら、無理して好きになろうなんて思わなかった。

「何で……、こんなに苦しい思いをしなくてはならないんですの？」

ただ、両方共、2人共大好きだから。

「もう……」。

いつそ、諦めてしまう方が、何億倍も楽なんですの……」

だから自分から諦める。

御坂と当麻が互いの支えとなり、その中に自分も交じる事が出来る環境。

それが、今の黒子が導き出せる最高の選択肢だった。

そう、思いたかったのだ……。

……。

「嫌ですよ……。そんなの」

！？

「……えっ？

黒子の思考が一瞬止まる。  
今、なんて……？

「な、何を言ってますの………？」

黒子の身体がフルフルと震えている。  
初春の思わぬ反応に未だ理解出来ていなかった。

「ダメですよ。そんな、みらい選択なんて」

……。

……ダメ？ ……嫌？

ボソッ。

「……ふっ。何を言い出すかと思えば」

「白井さんは、本当にそれで良いんですか？」

良い、悪いの問題では無い。

「だったら何ですか？」

……わたくしにお姉様を悲しませる方を選べと？」

初春なら分かって貰えるかもしれない。  
そう思っていた……。

そんな否定するような言葉なんて聞きたくなかったのに……。

「ダメですよ」

「何がですか？」

所詮、他人ごとなアナタにとって、わたくしの気持ちなんてー」

「だって……、それだと白井さんがキズついちゃうじゃないですか」

「……………」

??

キズつく？

誰、が……………??

ズキン。

何で、そんな事を言うのか……………？

痛みなんて……………、この胸の奥に閉まっていたのに。

……………ギリッ…!

黒子は力強く歯ぎしりを立てると、その場で立ち上がり、自分の両手を勢い良く上に振りかぶった。



バァアアンッー!!

「だったらどうすれば良いんですのっ!!?」

今の心境を思わせるかのように、黒子はテーブルを思いっきり叩きつける。

他の客から一斉に浴びせられる視線。

店内中に鳴り響いたその音によって、黒子達を中心に静寂が包み込む。

ビクビク。

「白井……さん」

「はぁ……はぁ……」

大切だからこそ、大事だからこそ、その人には幸せな道に進んで欲しいと願うのだ。

例え、そのせいで自分が犠牲になろうとも……。

「なのに、何で分かってくれないんですの?」

黒子の声が、震える。

「わたくしでは無く、これはお姉様を……」

「そ、それで……白井さんが譲るような形になったとしたら、御坂さんは嬉しいんですか？」

「……………!？」

気付かされる……。

いや、どうして気付かなかった？

御坂の性格を考えれば、彼女は他人から貰った幸福を喜ぶような人だろうか？ と。

「御坂さんは、互いに競い合って……、そうやって幸福を勝ち取った方が幸せなんじゃないんですか!？」

「……………!？」

分かってる、そんな事。御坂だって望んでないって事ぐらい……分かってる。

頭の中が真っ白になる。

思考が止まって、何も考える事が出来ない。

これ以上に良い方法なんて、見つからない。違う、見つけれなかったのだから……。

そんな自分の言葉が、黒子の肩に重くのしかかる。

『自分がキズつく？』

そんな事を言っていたらキリが無い……。

何かを得る為なら、それと同じ位の犠牲が必要になる……。

それが世界の理。ことわり

それが、世の中の成り立ちなのだから。

……。

「大丈夫ですよ」

「……」

何の根拠も無い――。

「御坂さんと白井さんは、そんな事で切れてしまうような仲なんですか？」

「!？」

「例え、白井さんが上条さんを好きになっただとしても、御坂さんとの絆が壊れてしまっただけ……。  
ホントにそう思うんですか？」

「――」

いつも泣いてばかりの彼女が、時々逞しく見える時がある。

「そんな軽い関係じゃ無いです！  
大丈夫です。私が保証しますから！」

胸をポンッと叩いて初春は言う。

ウジウジしてて、運動オンチで、腕立て伏せなんて一回も出来ないくせに。

「ゲホッ！ つ、強く叩き過ぎました！？」

……。

「ぷっ」

何なんだろう、この子は……。  
自分だって恋をした事は無いだろうに。

「ええ〜と。」

そ、それに勿体ないじゃないですか！」

顔を真っ赤に染めながら初春は続ける。

「せっかく男の人を好きになったのに、それを成就しようとする努力を惜しむなんて……。」

それこそ御坂さんに失礼ですよ！」

何と言うか、世話焼きと言うか……。お節介と言うか。

でも、そんな純粋な彼女だからこそ……その言葉を真剣に聞き入れる事が出来る。

「だって……」。

人を好きになるって言う事は、それぐらい素敵な事なんですから」

初春の笑顔が本当に眩しかった。

眩し過ぎて見えない位に輝いている。

はあ。

（全く、子供じゃ無いんですから……）

黒子は御坂も当麻も好きであるが、それと同じぐらい、初春の事も大好きなのである。

確かに、御坂と黒子の間には、深い絆が結ばれているかもしれない。

でも、それと全く同じように、黒子と初春の間にも深く、そして太い絆が繋がっているのだ。

.....。

「し、白井さん……？」

決めセリフをキレイに決めたにも関わらず、黒子がピクリとも動かない事に恐る恐る初春が問い掛ける。

「しらーーーー」

「はあああああ~~~~っ！」

！！？

グダーと、黒子が一気に崩れ落ちた。  
まるで全身の力が抜けたようにソファへ倒れ込む。そして……。

「一生の汚点ですの〜。」  
初春に負けた気がしてなりませんわ〜」

(うわ。いつもの白井さんだ……)

さっきまで怒鳴っていた人には到底見えない……。  
殺伐とした雰囲気は一気に消え去っていた。

「それにしても白井さん。  
人がせつかく真面目な話をしていた時に笑うなんて、あんまりですよ」

「あら？ そんな事ありましたの？」

「もう……。忘れたとは言わせませんよ……。笑ってたじゃ無いですか！」

「そんな記憶。わたくしには……。  
……っ!？」

「あっ！ また笑いましたね？  
全く白井さんは………」



2人の動きがピタリと同時に固まる。

その目線の先は、窓の外の方へ向けられていた。

それは何故か……。

ボソボソ。

「不幸だ……」

黒子・初春（「な、何でこんな所に!？」）

「はあ……。今日も朝から不幸ライフは継続するんですね？  
頼みますから、上条さんにも1日の『幸福休暇』を与えて下さい……」

黒子達のボックス席のすぐ脇を、窓越しに歩道を歩いて通り過ぎて行く当麻。

先程まで、女子の話題の中心人物とは思えない程、背中から不幸才  
ーラを発している。

しかし、あれは間違い無く上条当麻である。

「わっ！ ど、どどどどうしましょう!？  
上条さんが直ぐそこを……アワアワ!？」

……何故か黒子以上に慌てだす初春。  
さっきまで自分が散々アレコレ言ってしまった相手を前に、今更感じるものがあつたのだろうか？

……。

「……初春」

黒子が優しい口調で話し始める。

「は……ハイッ!？」

「今日は本当に助かりましたの……。  
その、ありがとうございます」

初春が親友で良かったと心から思える。  
好きでいられて良かったと、今なら思ふ事が出来る。

「白井さん……」

「わたくしも、何か1つ吹っ切れましたわ」

―――シュン。

「ふえっ!？」

初春の視界から突然黒子が消える。  
能力のテレポートを使ったようだ。

「じ、しし白井さん!？」

――パツ。

目の前から消えた黒子は、窓をすり抜け、外に飛び出していた。

??

「白井さん!？」

なっ何で外に……急にどうしちゃったんですか!？」

恋って言うのは、教えてどうこうなんてならない。

「先手必勝ですわよ！」

本気で好きになるなら、ライバル相手を寄せ付けけないほど、全力でその方を好きになる！！

こんなの常識ですよ？」

Vサインを初春に向けながら言い張る黒子。

最初の暗い雰囲気を消し飛ばし、いつもの黒子らしい、自信に満ちた笑顔を添えていた。

「ただ黙って見てるなんて面白くもなんともありませんものね！  
わたくしも、挑み続ける方を選びますわ！」

好きになっても良いんだと、どっかのお馬鹿さんが教えてくれた……。  
だったら、それに全力を尽くしてみたいと思った。

・・・ハッ！

「しっ 白井さん！」

「まずは、決心を固めた記念として……一発ブチかまして来ますの  
！」

皆、悩んで悩んで……。そうやって少しずつ答えを導き出して行く。

ただ見ているだけ、声なんてとても掛けられない。  
そんな……辛く、苦しいのが恋だと言う人が大半かもしれない。

「白井さん……がつ頑張つて下さいね!!」  
私、応援してますから!」

―――シュン。

だからといって、挑まなければ恋愛なんて始まらない。

何も生まれない。

だったらその恋に挑んでみる価値はあるのではなかつたか?

はあ……はあ……っ!

汗だくになりながら黒子が曲がり角を突き抜ける。

「……………。いた」

緊張感と高揚感が混じり合って、染み出した汗が頬を伝っていくのが分かる。

ドクンドクンドクン！

一步を踏み出す為には勇気が必要になる。  
それには、失敗の恐怖に打ち勝つ必要があるからだ。

その恐怖心に打ち勝つ事が出来るのは、後ろから追い風を吹かしてくれる存在がいるから。

立ち止まりそうな巨大な壁も、跳ね返されそうな逆風も……。  
全部吹き飛ばして。

（さあ、行きますわよ……）

————ダッ！

力強く、大きく踏み出して……。

ただ前へ————。

つづく。

## 第20話（後書き）

初春が上条さん並にアツいぜい！

○（、、）○

そして何か可愛くなってきたしまいました！  
自分で書いた作品で！？（笑）

では、最後に一言……。

私も、黒子の幸せを心から祈っております！

（、、）



## 第21話（前書き）

え〜と……。

突然で申し訳ありません。

m ( ( m

この話で一応最終話という形になります。

後書きにちゃんと書きたいと思います！

とりあえず、黒子の集大成をご覧ください！

( (

## 第21話

人口、230万人……。

学生が8割を占めるこの学園都市でも、当然ながら学生同士の恋愛模様が、あちらこちらで見える事が出来る。

そこに、能力者のレベルの差なんて存在しない。

あるのはただ純粋な感情だけ。

それは誰にでも感じる事が出来る、初歩的な物かもしれない。

けれど……一番大切に、それでいて一番気付きにくい。

そんな当たり前の感情。

……。

「不幸だ……」

そんなお決まりの名言を吐きつつ、下を向いてガックリとする当麻。

「毎度毎度の事とは言え……もう何なんですか一体？」

今回の旅行も、始めっから最後まで不幸で埋め尽くされてしまった上条さん。

温泉では、白井のアップーだの、インデックス噛み付きだの、ビリのビリビリなどなど。

もう数え切れない程の軌跡を残してしまった。

はあ……。

「今日はもう黙って帰りますか」

（うん、その方が良い。いや、そうしよう）

そう言いながら、どつぷりと深いため息をつく当麻。

ため息と共に、黒いドロドロとしたオーラを背中から放出させているのが分かる。

そして不幸は温泉から戻って来た今でも継続されているようである……。

「どうしたんぜよカミヤん。

元氣出すんだにゃー」

ポント、当麻の肩に手をやる金髪アロハのサングラス野郎。

(……………)

「せやでカミヤん。  
悩みがあつたら相談せな〜。友達やるー？」

そう言つて反対側の肩に手をやるエセ関西+超デングジャラスオタク  
……。

(友達……………ねえ……………)。

リアット喰らつた喉のあたりが、かなーり痛いんですけど？

(そして、何故そんなに嬉しそうにニヤニヤしている？  
親友のお2人さん……………)

デルタフォース事、土御門元春と青髪ピアス。  
先程当麻を色恋沙汰から無事、強制連行した為か、非常に満足げな  
顔をしている。

「カミヤん。暇になった事だし、これからどうするんだにゃー？」

（さっさと家に帰って寝……）

「そりゃナンパでっしやる！」

「イエーイ！ ナンパだにゃ〜」

嫌にテンションが高まるアホ2人。

当麻は自分の額に手をやり、『はあ〜〜〜』と、再度ため息をついた。

……分かってます。

いや、分かってるんです。

コイツらに常識を求めてちゃいけないって事ぐらい。

それにしても、こんな真っ昼間からナンパする気ですか？

どう考えても玉砕コースまっしぐら……。

そんなイメージしか浮かんで来ない当麻なのであった。

そもそも、この面子でナンパをしようって言うのが、まず無理な気

が……。

「いや、ナンパとかじゃ無くてさ。  
もつところ……普通の学生向け且つ、休日的な遊びは無いのかねキ  
ミタチ」

普通の学生なら、カラオケとかゲーセンとか、もつともな遊び  
があるはずなのだが……。

「甘いでカミヤん！

そんな余裕かましてたらいつの間にか卒業！！  
そんでもって結局、3年間ツンデレロリ彼女無しの低落人生を送る  
ハメになってまうんや……！！」

くわっ！ と、いつも細いその両目を開かせて、当麻に訴えかける  
青髪。

と言うか、何故ツンデレロリ限定……？

「ふっ、よしてやれ……カミヤんは俺達とは次元が違っんだにや  
」

ご自慢のサングラスを、クイツと『ワザとらしく』上に上げる土御  
門。

なんか妙にイラッとするのは私だけでしょうか？

「ナンパなんて、こっちからワザワザ赴かなくとも、向こうから勝手に寄って来る。」

そんな状況を不幸とか抜かしてしまう、『超ラッキー・オブ・ザ・クソ野郎』と化してしまっただんぜよ!!」

(~~~~~)

土御門と青髪の熱弁に、若干口元が引きつる当麻。

(超ラッキーって……。

不幸の固まりであるこの上条当麻に、そんな大層なモンあるわけねーだろ!)

自分のこの女運の悪さは悪魔で女難であって、決してモテてるとかそんな幸せ一杯のモノでは無い!

……しかし、そんな事を言い訳にしたら、またクラス全員にリンチにされかねない。

(……………)

ボリボリと頭を掻きながら、心の中で『不幸だ』と当麻は嘆いた。

ヒュッ！

「ん？」

何かに太陽の光が遮られ、当麻の視界に影が入り込む。

それに釣られ、後ろを振り向いた当麻が見た物。  
それは……。

「ふんっ！！」

ドゴッ！！！！！

「ぐふっ！？」

……『足』！？

何者かのドロップキックが、振り向いた当麻の顔面を、見事ジャストミートした。



「が……ぶはあっ!？」

訳も分らず、そのまま地面に倒れ込む当麻。

当麻の前を歩いていた土御門と青髪も、当麻の顔がめり込んでいる事に数秒遅れて気付く。

「なっ……なんや?」

「にゃー?」

ポカーンと、気が抜けた表情で立ちすくんでいる土御門と青髪。何が起きているのか、未だに理解出来ない。

そして、当麻が地面に倒れるのと同時に、『シュン』と言う聞き慣れない音を発して、1人の少女が3人の前に現れた。

「はあ……はあ……」

ギュッと、胸を押さえつけながら、着地した姿勢を解き、ゆっくりと立ち上がる。

ドクンドクン……。

「か、上条さん……」

土御門・青髪「「っ!?!」」

少女の……黒子の額から、ものすごい量の汗が流れ出している。  
それを拭う事も無く、あお向けになって動かない当麻の元へと黒子は歩み寄る。

「……ドクンドクン。」

『好きなんですよね？  
上条さんの事……?』

初春のあの言葉が、幾度とも無く頭の中を渦巻いている。  
気持ちの整理は、完全に着いた訳では無い……。

でも、今一番伝えたい事が何なのか気付けたから……。  
その気持ちに正直に突き進んでも良いって。

やっと……

分かったから。

.....。

「ふう.....」

黒子は一つ息を吐き、呼吸を整える。

進めていた足を、当麻の前でピタリと止めると、その顔は緊張しているのか、少し赤みがかっていた。

ピク.....。  
「う.....ん」

ああ向けになつて倒れたままの当麻の指が、ピクンと僅かに動く。そんな些細な動きを見ただけで、黒子の身体中の血が一気に全身を駆け巡る。

ギュッ.....！

「…………熱いん、ですの」

胸の鼓動を押さえている手に、更に力が加わる。

ドクンドクンッ!!

…………もつと、良く考えてから『勝負』しても良かったんじゃないか？  
そんな自問自答を頭の中で繰り返し唱える黒子。

確かにちゃんとモヤモヤを消し飛ばして来た訳では無い。

でも、消すのを待ってたら、いつまでもこのままかもしれないって…………。  
そう、思ったから。

「…………そのボサボサ頭、最初は見てるだけでイライラして、大変でしたの」

『ただ…………真っ直ぐ』

迷った所で意味は無い……。

『後ろなんか振り向かないで、無我夢中で……、全力でッ！』

止めようとしたって意味は無い。

失敗した時の事ばかり考えると、嘘ばかりついて後悔しちゃうとか。

そんなの全然意味が無い……。

「でも、その憎らしいシルエットが……、  
わたくしの目に、頭の中に焼き付いて離れないんですの」

もう、いっぱい悩んで、たくさん泣いた……。

でも、悩んでる位なら突き進めって、全身が声を発して叫んでる。

後悔するのも、涙を流すのも、後で構わない。  
だから……。

今は、ただ自分の想いに正直に……。

……。

「か、上条さん……！」

「っん……んう」

まるで黒子の声に反応したかのように、当麻の瞼が微かに動く。

しかし、当麻はあお向けになったまま、まだ起き上がる気配は無い。それでもお構いなしに、黒子は当麻の名前を口にする。

「ア……、アナタを想う相手ライバルの方々は、聞くだけでもかなりの数がいるみたいですが……」

黒子の肩が、少ばかり震えている。  
良く聞くと、声も僅かだが震えているように聞こえる。

何か、身体がおかしい。

全身の血管が燃えるように熱い。  
頭が、ポーっとしてスゴい変な感じがする。  
心臓の音が、今まで聞いた事の無い位高鳴っている。

それでも、黒子は話を止めようとはしない。  
なんでこんな状態になるのかは、もう分かっていたから……。

「だとしても、わたくしのする事は変わりありませんの……」

だから、今なら分かる。  
良く分かる……。

この人が大好きで。  
本当に好きで……。

だから……分かる。

（ああ、そっか……）

これが……  
『恋』、なんだ……って。

……。

ジャリ！

「ん、ん……？」  
ちくしょう。昭和のギャグ漫画じゃあるまいし、いきなりドロップ  
キックってアナログ過ぎだろ……」

「！？」



ドロップキックを喰らった顔面を押さえつけながら、先程まで倒れて動けなくなっていた当麻がゆっくりと起き上がる。

黒子は無意識の内に一步、二歩と後ろへ後退していた。

ドクンドクンッ!?

「あ、あっ……えと!」

黒子の顔が、まるで熱したヤカンのように下から上へ赤く染まっていく。

それと同時に襲って来るのは、異常な程の心拍数の速さ。

??

「ん……白井、か?」

「~~~~ッ!~!~!」

当麻の突然の呼びかけに、更に胸の鼓動が高鳴るのが分かる。

黒子は、何かを無理やり振り払うかのように頭を左右に振るが、そんな事で抑えられるハズもなく……。

「お……オイオイ大丈夫か？」

「うっうっうるさいですの！！」

鋭い目つきで当麻を睨みつける黒子。

「い、いいですよ！？」

例えこれから先、アナタの周りに次々と魅力的な女性が増えたとしても……、どんな方が相手だろうと！！」

カァーっと、元々赤かった黒子の顔が、一気に最高潮まで達する。

「くっ、黒子の気持ちは、……絶対ブレる事はありませんわよ！！」

黒子が声を張る度に、周囲から浴びせられる視線が増える。

それでも、そんな事は関係無い……。と、そう言わんばかりに、黒子は必死に想いを伝える。

「例え相手が……、お、お姉様やお姉様やお姉様やお姉様やお姉様だったとしても！！」

やたら正確な指摘ではあったが、黒子の迫力に圧倒されて、当麻は何も反論出来なかった。

しかし思った通り、黒子は相当な無理をしているようで、彼女の肩が上下に揺れて既に疲れ果てているのが分かった。

何故そんなに必死なのか、起きたばかりの当麻には理解出来るハズも無い。

その為当麻の反応は……。

「……………はい？」

……………。

余りに突拍子の無い返事に、周りの空気が一瞬静まる。  
……………が。

ビシッ!!

「覚悟なさいっ!!」

「どわっ!？」

黒子が力強く当麻の事を指差す。

それとほぼ同時に、当麻の体は勢い良く地面に倒れ込んだ。

「どんなにライバルが多くても……どんなにボン・キュ・ボンな強敵が相手でも……!!」

ホントは、ずっと前から伝えたかった言葉。

「ア、アナタは必ず……」

伝えた結果がどうあれ、自分の感情を知って欲しいって……。そう思ったから、そう思えたから、伝える……。

「か、必ず! この白井黒子が振り向かせて差し上げますわっ!! 必ずですのっ! 良いですわね!!」

・  
・  
・

??

「は、ハイ……」

何と言いますか……。

そのまま押し切られて返事をしてしまった感じが……。

女の子に指を差されて尻餅をつく姿が、ヤケに虚しい上条さんであった。

「……………」

「……………ん？」

・  
・  
・

ボオオオオンッ！！！！

！？

「ハ……ハイッ！？」

黒子の『赤面許容量』が限界を突破し、顔全体が大爆発を起こす。  
ある一定の羞恥心に達した時、稀に見られる現象である。

「つ……つつつ伝えたい事は！  
こゝ、これで以上ですの。」

気恥ずかしそうに、当麻から目を逸らして視線を外そうとする黒子。  
身体をモジモジとさせながらも、何とか会話を成立させる。

「つ、次からはっ！  
その……あっあの……。か、覚悟して頂きますわよ！！」

未だに、黒子の頭上からは蒸気のような煙が溢れ出ている。

明らかに黒子は恥ずかしがっていたが、その顔はどこか嬉しそうで、少し微笑んでいるように思えた。

2人は一瞬、目を合わせていたのだが、黒子が赤面したまま慌てて視線を外す。

「そ、それでは……御免あそばせですの！」

まるで逃げるように『シュン』と言う音を立てて、その場からレポートを使って消えてしまった。

・・・。

「で？」

何だったんだよ。結局……」

言うだけ言って去ってしまった訳だが、ぶっちゃけ意味が分からない上条さん。

目が覚めてからグツチャグチャ過ぎてついていけませんっ！！

「カミヤん。立てるかにゃー？」

「ああ、悪い……」

「ほな、手えかすで？」

左右から土御門と青髪の肩を借りて起き上がろうとする当麻。  
妙な疲れを溜め込んだ重い体を、ゆっくりと持ち上げられる。

「何て言うか、アイツもアイツで結構抜けてるトコがあるんだよな」

ハハ……。

と、少し天然気味の後輩に微笑む当麻。

まるで、ひと仕事を終えたかのようにぐったりとため息をついた。

「ほほーう……」。

カミヤン……。その幸せそうなため息は何なんだにやー？

ゾクン……。

(……ん？)

「ツンデレ＋ロリ＋ツインテールのお嬢様から愛の告白とは……。随分大層な青春送ってはりますなあ……。カミヤン」



ヤバイ……。

直感的にそう思える程の膨大な殺気が、何か両サイドから放たれて  
いる気がします……。

「え……と……」。

2人共、ケンカは良くありませんよー？ もったい、平和的に  
……。  
って、ブフォッ！！？」

振り向いた当麻の後ろには、もはや殺気と言つかオーラと言つか……。  
…。

「な、何ソレ！？」

髪逆立って何かバチバチいつてるんですけど！？」

「ああ……ワイらの怒りが限界を突破した証や……」

こめかみにピクピクと大量の血管が浮かび上がる。

「純粹ピュアな心を持ちながら……怒りによって目覚めた伝説の力にやー  
ー……」

「いや、つーかどう見てもサ ヤ……」

土御門・青髪「死ねえー！ いッ！ ！ ！ ！」

友人2人の荒々しい狂気が、当麻に向かって一直線。

「ふ、不幸だああああー！ ！ ！ ！ ！ ！」

……。

「いやいやあ……。」

ホント、遠慮無しに食べるねえ……」

「もう止まらない美味しさなんだよ！

こんな美味しい食べ物がこの世にあったなんて……もう何個でも食べられそう……！」

とあるクレープ店で、佐天の前に予想以上に積み重なったクレープの紙くず……。

その紙くずを黙々と積み上げるのは、小さな1人のシスターである。

「トホホ……」。

1食どころか、1日の出費量の新記録を打ち立てそう……」

自分の財布の中身と睨めっこしながら、佐天は本気で落ち込んでいた。

「あれ？佐天さん……こんな所にいたんですか？」

？

聞き覚えのある声。

それに反応して、下を向いていた佐天の顔が、ゆっくりと起き上がり後ろを振り向く。

「初春っ！

風紀委員の仕事終わったんだ？」

「ええ。

まあ、そこまで大変な仕事じゃあ無かったですし」

「ふうん……。

で、白井さんは？」

一緒にいたはずの黒子がない事に気づき、佐天が初春に問い掛ける。

別に、黒子が1人残って仕事をしていても、何ら不思議な事ではない。

「白井さんは……。

一発ブチかましに行きました」

……。

「へ？」

予想外の返答に一瞬言葉を失う佐天。  
と、その直後だった。

――――シン。

「初春？ こんな所にいたんですね」

（ってアレ！？）

「し、白井さん！

……もう、大丈夫なんですか？」

初春は、一瞬驚いた顔をしたが、すぐに黒子に様子を尋ねた。  
一方の佐天はと言うと、常時『？マーク』を頭の上に掲げている。

「まあ……上々って所ですわね！」

襟足の部分を少し搔きながら、照れくさそうに黒子は答える。  
それを聞いた瞬間、初春の表情も一気に明るくなった。

「やりましたねー白井さん!!」

「ち、ちよつと初春!？」

そんな抱き付かないで下さいましっ!!」

(?? ……???)

それ程、黒子の朗報が嬉しかったのか、初春は勢い余って黒子に抱き付いた。

「あのお……さっきから一体何が……?」

「とりあえず、わたくしも少々疲れてしまいましたの……。  
今日は先に寮へ戻りますわね」

初春の包容を振りほどき、黒子はそう言ってまた一步踏み出す。  
流石にあれだけ顔を赤くすれば疲れもしますか……。

「白井さん！ これからも応援してますからねー！」

その初春の言葉に、軽く受け返すと、手を振りながらテレポートを  
使って消えてしまった。

・・・

「な、なんか私だけ仲間外れにされてる気がする……」

まさか私が？ …… いやいやそんなバカな……。  
そんな事を頭の中で展開させていると、突然後ろの大通りの方から  
騒がしい声が聞こえて来た。

「不幸だあああああー！！！！！」

……………。

「上条……さん？」

遙か遠くに居るにも関わらず聞こえて来るこの聞き覚えのあるセリフ。

佐天が視界に捉えたのは、何故か全速力で人混みの中を疾走する当麻の姿だった。

土御門・青髪「待てやコラアツ!!」

「……………」

そしてその当麻を追いかける謎の2人組み……。  
どこかで見た事ある気が!?

……。

「ああもぉー!」

何、この感じ!? 何かわかんないけどモヤモヤする……!!」

髪の毛をグシャグシャさせながら勢い良く席を立ち上がる。

自分の周りで何が起きているのか、サッパリ分らない状況に、佐天さんのモヤモヤは更に上昇していく。

「どうしたのいいこ？  
もしかして1コ欲しかった？」

いや、ちょっと黙ってて貰えますかね？

.....。

「うーん。

何か、色々言ったらスッキリしましたの」

両腕を空へかざして、ぐっと腕を伸ばす黒子。

最初の頃とは全く違う。

今の黒子は心は、綺麗に晴れ渡っていた。

「あの胸の痛みも.....、変な不安感も.....全部消えてしまったんですのね」

自分の胸元にそっと手をやり、以前とは明らかに違う心境を感じ取る。

無くなってみると、少し寂しい気もするが、あの痛みが確実に自分



を成長させてくれた。……そんな気がした。

…………ポロツ。

??

「あ……れ？」

黒子の瞼から小さな雫が流れ落ちた。

「な、何ですのコレはっ!？」

「っ嫌ですわ! は……ははは」

グシグシと目元を拭う黒子。

本人でも分からないその涙はどこから来たのか？

嬉しい？

悲しい？

分からない。

分からないんだけど……。

――ただ、胸は温かくて……。

「とにかく、早く戻……って」

涙を拭き終わり、前を見た黒子はその足をピタリと止めた。それと同時に自然と笑みが浮かんで来る。

「もう、戻って来てたんですね……」

――シュン。

いつの間にか、黒子は既に寮の目の前まで着いていたのだ。そびえ立つ高級感溢れる常盤台女子寮。

しかし、黒子が笑った理由は別に寮にたどり着いからでは無い。

……。

バチバチッ!!

「ああ〜もう！」

何でこう上手くいかないのよっ!!」

髪に電気を走らせながら枕を布団に投げつける御坂。  
相当ご立腹のようです。

「はあ〜。せっかくのチャンスだったのに……」

ベッドの上に投げつけた枕に、ボフツと御坂は倒れ込む。  
足をバタバタと動かしながら、スカートの下に履いている短パンが、  
チラホラ見えている。

「うゝゝっ!! 次こそは……」

ゆっくりと起き上がり、拳を握り締める御坂。  
相当悔しかったのか、今度の決意はかなり固いようだ。

「見てらっしゃい！」

次こそは絶対あの馬鹿を……」

「お姉様〜〜〜!!」

ガシッ！！

「ふえっ！？」

何か不審な声が聞こえたと思ったその直後、黒子の強烈なテレポトタツクルが、御坂の腹に飛び込んで来た。

「ちよっ……！！ 黒……」

「ああ……お姉様……」

戻らているのでしたらわたくしもすぐに参りましたのに……」

顔を御坂の腹に擦り付け、とても幸せそうな顔で微笑んでいる。

「お姉様。黒子も負けませんわよ！」

「何訳分かんない事を……！」

いいからさっさと離れなさいよ！」

どんなに御坂が強く引き離そうとしても、黒子は一向に離れようとしない。

御坂も好きだし、当麻も大好き。

その答えを受け入れた黒子に、あの胸の痛みはもう現れない。  
もう、自分に嘘はつかないって決めたから……。

どの道が正しいかなんて誰にも分からない。

でも、道を決めるのは自分自身だから……。  
だから正直に進んでみようって思えた。

例え間違っているとしても、後悔しないように……。  
裏道なんか使わないで、真っ正面からぶつかって……。

ひたすら前に進む為に……全力で挑むっ!!

「さっさと離れろって言うてんでしょうがこの馬鹿……ッ……!!」

バッ  
チ  
イ  
イ  
イ  
イ  
ッ  
!!  
!

・  
・  
・  
・

お  
わ  
り

## 第21話（後書き）

冒頭でもお伝えしました通り、この話で一応最終話となります。

なんと言いますか……、色々考えた結果、ここで一度切るのが良いかなと思ってしまった為です！

ただ、これからも番外編として、色々イチャイチャ話しを書いていきたいと思っておりますので、それは期待して待っていて下さい！  
（番外編では黒子は上条さんの事が好きになっていると思いますよ  
〜〜！）

色んな方から感想を頂いてとても嬉しいです！

これからも必死に精進したいと思いますので、どうか宜しくお願いします！

○（、、）○

では番外編にてお会いしましょう！！

番外編？（前書き）

とりあえず……。

~~~~~ッ！

……――ぐんぐん――！

番外編？

ガチャン。

「ただいま……」

玄関の扉を開け、自分の靴をその場に脱ぎ捨てながら、部屋の中へと入って行く1人のツンツン頭。

人にもよるので、もしかしたらウ二頭。

あるいはボンバツへとなるかもしれない……。

……コホン。

真面目にやります。

彼はこの物語のお馴染みの主人公、上条当麻^{かみじょう とうま}である。

今日も主人公とは思えない位、ぐったりとした表情をしている。いつものように、学校で不幸な目にでもあったのであろう。

「くっそ~~~~！ 吹寄の奴！！
何がダラダラしてるだ！ いきなり『おでこクラッシュ』する意味が分からん！！」

帰って来て早々、何やらブツブツと文句を言い始める当麻。
よく見ると、おデコの辺りが、赤く腫れ上がっているのが分かる。

恐らくそのダメージなのか……。
足どりもどこか重く、玄関から部屋までのわずかな距離が、かなり長く感じてならない。

「マジで凶器になりつつあるな。あのデコ……」

はあ……。

1つため息をついて、部屋の中央にカバンを投げつける。

流石のこの人にも、相当なイライラが溜まっているようだ。
しかしそれは、このおデコクラッシュ事件だけの原因では無い。

「つーか何なんだよ最近は……。
一段階飛級して、不幸レベルが上がってる気がするんですけど！」

ある日はビリビリなビリビリに、問答無用でビリビリを浴びせられ
……。

またある日は、クラス全員から、理由不明の集団撲殺リンチを受け
……。

さらにある日には、頭蓋骨粉碎ア~~~~ンド全身齒型地獄。

そして、またまたある日には、グシャ！ バキ！ メキ！ ドカ！
ズガーーン！！

（以下省略）

……………。

もはや、完全に日常と化してしまった我が不幸ライフ。

何が起こっても驚かなくなってしまった自分が逆に怖いです。

それでも、この1週間……。

朝・昼・晩と休み無く不幸イベントが続いているこの一週間……。

神も仏も無いとは正にこの事かっ!？

これだけ立て続けに起らなくても、上条さんは逃げたりしませんから!!

マジ発狂しそうだ。

と、妙な衝動に襲われ始めた今日この頃。

そんな訳で、体力が保ちそうに無い上条さんは、終始お疲れモードなのであった。

「はぁ……不幸だ……」

「では疲れを癒やす為に先にお風呂に致しますの?」

「いやぁ……」。

どっちかって言うと、まずはメシかなぁ……」

……。

……ん？

気のせいだろうか？

新たな不幸が招き入れられたような気がしてならないのですが……。

その囁きはまさに小悪魔のよう……。

大体は分かっている……が、そうではないという期待を抱かせつつ、ゆっくりと後ろを振り向き、声のした方向を確認する当麻。

「お帰りなさいまし。ご主人様」

(……)

「よしよし……。落ち着け俺……」

胸に手を押し当て、一旦落ち着かせた後、もう一度後ろを振り返る。

クルッ。

「お帰りなさいまし。ご主人様」

・・・

つて!?

「白井!?

な、なんでここにっ!?! つーかお前勝手に入って……!!」

そこに居たのは、ツインテールの可愛いらしいメイドさん。

……では無く。

人はそれを二本角の悪魔。

あるいは奇行の少女。

はたまた、ただの変態と呼ぶ……。

最近、恐怖の存在になりつつある、白井黒子しろいくろこがそこには居た。

それも何故か『メイド服』仕様で、だ。

「ヌッフ……。わたくしの能力の前では、鍵が閉まってようとなんの意味もありませんわ！」

やたら得意気に話し始めた黒子さん。

しかし読者の皆様。少しだけ冷静に考えてみて下さい……。

これは、犯罪である。

「つーか、ジャッジメント風紀委員のクセに、何普通に不法侵入してんだよ？ ……お前」

ピクッ……！

刑法130条『住居不法侵入罪』

3年以下の懲役、または50万円以下の罰金。

その時……。

黒子の脳裏に浮かび上がったのは、散々頭に叩き込んだ刑法の数々。そして自分が地獄へ叩きのめしてきた犯罪者の面々だった。

珍しく的確な当麻のツツミ。
それによって、笑顔のまま石像のごとく黒子は動かなくなってしまうた。

「い、いえ……！？」
何と言いますの……コレには色々訳があつてですの。
その、えっと……！？」

まさかのカウンターに、黒子も焦りの色を浮かべる。
何か抜け道は無いか、何か抜け道は……と。

……っ！

「あっ！
ちなみにこのメイド服は見習いの舞夏に借りたんですよ」

と、言いながら、スカートの端を摘まんでクルッと一回転する黒子。

……

イヤイヤイヤ……。

「何でここに居るのか聞きたかったんですが……」

と言うより、それで誤魔化したつもりなのだろうか？

「な、何ですか？」

わたくしからご奉仕されるのが……そっそんなに嫌なんですの!？」

「いや、別にそういう訳じゃなくて……」

右手で顔を覆いながら、グッタリとうなだれる当麻。

「つーか。いきなり話変わってるし……」

どう考えても不自然過ぎるこの状況。

すでに疲れている体に、更に重みを増したような気がしてならない。

「な、何もいやらしい事なんてありませんの!!」

それでも、この街の治安を守る風紀委員ジャッチメントですわよ!!」

不満を露わにしているのはこちらと同じらしく、両腕を組んで、口元をぷっくりと膨らませている。

そんな姿を見て、当麻の顔色は益々ゲッソリしていくのだった。

はあ。

そうやって、ため息をつくのもこれで何回目なのか……。

スッ……。

(???)

ため息をついて数秒後、呆れたような顔のまま、当麻は部屋のある一点を指差す。

「だ・っ・た・ら・！」

何で俺のダンスが全段開けっ放しになってるんでしょうか？」

・
・
・

ダラダラダラダッ！！

「すげー汗かいてっけど大丈夫か？」

その静寂が、黒子の爽やかな笑顔を完全に台無しにしていた。
額から溢れ出す大量の汗で、『笑顔』も『動揺』に上書きされてしまっている。

「ななな何の事ですよ……？」

「ビックリするくらい、誤魔化すの下手だな」

オイ…………。
ジャッジメント
どうした風紀委員。

「ベベベ別に、上条さんのタンスの中から女物の…………しかも小学生から中学生くらいのお召し物出て来たとしても、わたくしは気にしませんわ……！」

「ちょっとまで…………！」
それについては少し訂正させて下さい！」

何やら物凄い勘違いをしておりますか！？

プルプルと、訴えかけるように震える当麻の右手。

白井さん。色々言いたい事はありますが……暴走しすぎっす。

（ハッ！ そうですわ！）

などと言っている内に、名案が浮かんだのか、人差し指を立てて胸を張る黒子。

嫌な予感しかないのですが……。

「メイドがそんなお嫌いなのでしたら、次からは『裸エプロン』にでも！」

「遠慮させて下さい」

（（……………））

うん。

所要時間、わずか1秒の決着でした。

……………。

し、失敗失敗……失敗ですわ。
そう。これはあくまでもただ失敗してしまっただけ。まだまだ挽回の余地は十二分にある。

部屋に入った瞬間、欲望の方が僅かに競り勝ち、タンスのへと先走ってしまったのは悪いクセである。
が、それもまだ支障は生じない程度なはず……。

第一プランはかなり微妙な空気になってしまったが……、それで挫ける黒子では無い。

前回の告白をしてから今日まで一週間が経った……。

あれから何の進展も無い異常な状況に、黒子は待ちきれず再アタックを試みようとしていたのだ。

（そのせいで、当麻には休み無くストレスが加算されているが……）

真剣な想いを。熱いマグマのような熱意を。そして最後は『×××××
×』でッー！

男を陥れるプランをミツチリと計画し、訪れたのが今日。と言う訳なのです。

そしてその計画も、第二プランへと移行し始めていた……。

……。

「か、上条さん！

そろそろお腹が空いてきたのではありません？」

「いや別に……」

「ゆ、夕飯を作らなくてはなりませんわね！
台所はあちらですわね？」

オイ待て。

黒子の強引な進行に思わず心の中でツッコミを入れる当麻。

不利な話題は強引に変えようと言っのか？
いくらなんでも無理やり過ぎる……。

―――シユン。

黒子は、当麻に反応する間も与えず、テレポートを使って台所へと即座に移動するのだった。

（アイツまた勝手に！）

ここはお前の家かよ！
と、もはやツッコむのも悲しい。

居候のシスターといい、年頃の女の子は遠慮無しですか！？

「ちょ……、白井！
ちよっと待てって！」

制服のワイシャツをその場に脱ぎ捨て、いつものダサダサTシャツで台所へと向かう当麻。

一方黒子は、既に冷蔵庫の中身をチェックしながら、包丁やらまな板やらを準備し始めていた。

何とかお料理スキルで好感度UPさせようと必死である。

「白井。お前そんな勝手に……」

「ん？ 何ですのこの鍋は？」

（無視、ですか）

この部屋の主人を差し置いての無視て？
アナタは一体何者なんでしょうか？

「まあ、お前も一応常盤台の人間だし、大丈夫だと思うけど……」

心配と言うよりは、むしろ当麻は不安の方が強かった。

もし家電製品をぶっ壊されたなんてした日には、一切笑えないであろう……。

『不幸だ……』と、顔に手を当てながら、いつもの台詞を呟こうした。

……その時。

当麻はある事に気づく。

「!？」

いや、気づくのは遅い位だっただろう。

黒子が開けようとしていた蓋の中身が何なのか……！

「ま、待てっ！ 白井……それはっ！」

パカッ。

何の疑いもなく、ガス台の上に置かれた鍋の蓋を黒子が開ける。
……が！

ツ~~~~ンッ!!

「グフッ!!」

く、臭い！

いやこれは……腐臭！？

「いや、それは5日前のカレーでして……」

後頭部を掻きながら、苦笑いでそう応える当麻。

腐れかかったカレーの、強烈な危険臭が黒子の鼻に襲いかかる。

「な、なな何なんですの！ このグロテスクな物体は……っ
！！」

—————シュンッ———

・
・
・

「はい？」

「あっ……」

瞬間……。

黒子の手元にあったハズの鍋はどこぞやへと消え去っていた。

黒子の様子から察するに、恐らくテレポートさせてしまったのだろう。

……ではどこに？

（い、嫌な予感が……）

これも今までの経験からなのだろうか？
当麻はおもむろに頭上を見上げる。

そして……。

バシャアアアア！！

「ぐふぉー！？」

思ったとおりの結果が訪れた。

「あわわわっ！！？」

か、上条さん！？ も、申し訳ありませんの！！」

レポートされた鍋は不幸にも……。

いや、必然にも当麻の頭にすっぽりと収まった。

それを見た黒子が、大慌てで鍋を外す。

そして、ベトベトになった当麻の顔を、タオルを持って急いで拭き始める。

が、しかし……。

「す、直ぐにシャワーの準備を致しますの！
です为上条さんはここで……」

うぷっ！？

想像以上に強烈な腐れかけた危険臭。

鼻を摘みながら、当麻をなんとか洗面所まで連れて行く。

忘れてはならないのが、直撃した当麻へのダメージは考えるまでもなく大きい訳で……。

「く、クセエ……」

そして、彼はいつものようにあの名台詞を口にする。
ただ、普段よりも少し泣きそうな声で……。

「不幸だ……」

と……。

……。

「うう……。やってしまいましたの」

両手を床に付きながら、深いため息をつく黒子。

心なしか『ズーン』と言う、重い効果音が聞こえた気がした。

グスン。

「アピールするどころか、ますます嫌われかねませんわ……。
何で腐れかけのカレーがこんな所に置いてあるんですのー!!」

床に飛び散ったカレーを雑巾で一生懸命拭き取る黒子は、その匂いにイラついたのか、いきなりカレーに対してブチキレる。

最も反省すべきは、何故そのカレーを当麻の真上にテレポートさせてしまったのか……ではなからうか？

シャーシャー……。――

ドキンッ！

「シャ……シャワーの音……！？」

浴室から僅かに漏るその音が、黒子の胸の鼓動を一気に加速させる。

（上条さん……。

い、iiiiiiiiい今、シャワーを浴びてますのね……）

床を拭きながら、何度も浴室の方に目を向ける黒子。

思わず、ジュルリと、口元に溜まっていたヨダレを拭う。

（こ、この後わたくしはどうなるんですの……ま、ままままさが……！）

ゴク……。

と、唾を飲み込みながら、浴室から漏れて来る音に、より一層集中し出す黒子。

独り言をブツブツと呟き、顔を赤らめながら、自分世界へのめり込んで行く。

（だ、男女が1つ屋根の下にいて、このような展開という事はですの……。

つ、つまり……『そういう事』もあり得るんですわよね……）

カァァァァァ……。

妄想は独り手に広がり、収集がつかなくなるまで拡大させていく。
こうなると、もう黒子は止められない。

女性特有の豊かな創造力が、黒子の頭の中で一つの物語として展開
され、大きな勘違いを産んでしまう現象……。

周りからすれば、非常に面倒くさく、迷惑この上ない能力である。

ドキドキドキ……。――

(……………)

ゴクッ……。

しばし、浴室の方向を見つめていた黒子が、突然その場を立ち上がる。

そして浴室の方へ向かって行き、扉の前でピタリと動きを止めるの

だった。

しばしの間、扉を見つめていた彼女が次にとった行動……。

それは……。

ピト。

「……よ、良く聞き取れませんわね？」

盗聴だった。

……。

ゾクンッ！？

??

「何か、また妙な寒気が……？」

ワシヤワシヤとツンツンの髪の毛を洗いながら、靡ごしに感じてる気配に、身を震わせている当麻。

もう、今日の不幸は十分です……。

そう思いながら、髪全体にまわりついた泡を一気に洗い流す。

(とりあえず、インデックスが居なくてホントに良かった)

それだけが今週唯一の幸運^{ラッキー}だったな……。

そう付け加えて当麻は安堵のため息をついた。

現在あの暴食シスターさんと言うと、小萌先生の家で『一泊2日の焼き肉大パーティー』を遂行中との事。

こんな状況で彼女がもしいたら。

そう考えると、一気に寒気が襲って来る。

「俺の後頭部も、キレイなオブジェに変えられかねん……」

はは。笑えないなオイ……。

そう言い残すと、シャワーの水を止め、洗面所へと上がり込む。

「え〜と。

バスタオル。バスタオルつと……」

比較的大きなカゴの中に入っていたバスタオルを手に取り、勢い良く髪を拭き始める当麻。

このタオルは、気を配って事前に黒子が準備してくれた物だ。

ゴシ……ゴシ……。

「それにしても……白井のヤツ。

なんか、可愛いかったな……メイド服だったか。あれ？」

普段、常盤台中学の規定により、常盤台の生徒は休日の出掛ける際も、制服を着用しなくてはならない。

その為、制服以外の姿を見る事自体、一般人には珍しい事なのである。

ガシガシガシ……。

・・・ん？

ピタリ……。

突如、髪を拭いていた動作から、当麻の動きがピタリと止まる……。

一般人には珍しい……確かにそうだ。

しかし、それと『可愛い』って事はリンクする……のか？

……。

カアアアアーーーー！！

（あ、あれ？

今……なんつつたんだ俺！？）

ゴシゴシゴシゴシッ！！

ボソツとした小声で、思わぬ大事故に会ってしまった。

顔も一気に赤く染まり、信じられない高速スピードで再び髪を拭き始める。

「つ、疲れてんのかな……？」

自分の脳みそを疑ってしまう当麻。
バスタオルで顔全体を覆いながら、あどけない子供のように恥ずかしがっている。

「~~~~ツ」

バシバシバシバシッ！！

これは風邪引いたのかもしれない！

自分にそう言い聞かせながら、何故か洗面器を何度も叩きつける。
鏡越しで真っ赤に茹で上がった自分のウニ頭……いや、イガ栗を見て一言思っただった。

「不幸だ……」

……。

数秒後。

「とりあえず……出よう……」

結論出ました。

何か意味も無く疲れてしまったが……。

器用に上着を着ながら、リビングの方へと向かおうとする当麻は、
テンション下がり気味のまま扉に手を掛ける。

……。

「……で、結局冷蔵庫が空っぽなんですわね」

「昨日・一昨日で一週間分の飯が食い尽くされちゃったからなあ」
「……」

……？

一体誰に対して言っているのだろうか……？

そんな疑問を抱かせつつ、黒子は頭を悩ませていた。

このままでは、『料理でメロメロ』にする第二プランが実行出来ない……と。

――手料理。

それは女の最大の武器。と言っても過言では無い。

それを十分理解していた黒子は、数ヶ月以上も前から、ある計画を立ててきていた。

男の好きな料理は何かと調査・研究をし……。

1ヶ月も前から料理教室に通い詰め……。

料理の内容について、練りに練って試行錯誤を繰り返す……。

ああ……。

思い出すだけでも涙が溢れて来る……。

そんな影ながらの壮絶な日々。

全ては今日の為。

当麻に食べて貰いたい。ただそれだけだった……。

しかし！

黒子は、知らなかったのだ。

一人暮らしの男子の部屋がどういった物なのかを……。

その、現実を！

「じゃあ、とりあえずカップ麺にするか」

(ぬぐぐうう……ですわ！)

これが現実なのか……？

カップ麺？

なんじゃそりゃーッ！？

自分が1ヶ月かけて取り組んできた事が、僅か3分お湯を注いだだけで、ものの見事に崩れ去ってしまった。
そんな理不尽な事あって良いものなのか？

トクトクトク……。

慣れた手つきで電子ポットで沸かしたお湯を、カップの口から注いでいく当麻。

（恨めしい！ ああ恨めしい！！
カップ麺が恨めしいですわ！！！！）

幸せそうにお湯を注ぐ上条さんの横顔が、黒子のカップ麺に対する憎悪を更に膨らませていた。

（~~~~ツ！！）

「か、上条さん！」

「？」

突然、大きな声を出され、驚いたように当麻は反応する。

「わたくし……料理を作りますわ！
今から！ 今すぐ！！」

・・・

え〜と……。

「は、はい？」

「今からわたくしが食材を買いに行ってきますの！！」

「ちょ！？ ……おい待て！」

ガシッと、即座に黒子の腕を掴んで暴動を止める。

「今お湯入れたトコなんですけど！？」

思った事を即座に言ってみる、鈍感キングこと上条さん。

黒子は当麻の腕を振り払うと、少し怒った様子で、当麻の事をキツ
！ と、睨みつける。

「そつそついう事ではなくて……！！」

それ以上の言葉がなかなか出ては来ない……。
下を向きながら何かを言い出そうとはしているが、顔が赤くなるだ
けで、それ以上の進展は見られなかった。

当麻には、この行動事態訳が分からず、先ほどから終始戸惑ってい
るようだ。

(~~~~~ッ!!)

両手の人差し指を合わせながら、何やらモジモジとし始める黒子。
頬はまるでリンゴのように赤く染まり、今にも爆発しそうである。

「でっ、ですから……」

指のモジモジスピードが更に加速する。

「か、上条さんにその……」。

わっ、わ、わわ……、わたくしの作った料理を……！」

ドキドキドキ……！

「食べて……頂きたいんですの……！！
その、一緒に……。」

カァァァァ……。

そう言い終わると、黒子の顔から蒸気のようなモノが立ち始める。

何ヶ月も前から考えていた事もあってか、言い出すのが少し恥ずかしかったようだ。

どす黒い黒子が、今や純情な乙女のように見えてしまう。

そんな黒子の真っ直ぐな想いを聞き入れて、『紳士』上条さんはこう切り出した……。

「いや、だからカップ麺作ったから別にいいってば」

……。

ビキビキ……。

突如、黒子の額に大量の血管が浮き出る。

「上条……さん！

そう言う事ではなくてですわねえ……！」

怒りが恋心を上回ってしまったようだ……。

恋する乙女から一転、鬼のような形相に移り変わる黒子。
竜宮 ナもびつくりの豹変っぷりである。

「お、落ち着け白井！」

「この状況……。

落ち着かせる要因があるとしたら、アナタが何かする以外あり得ませんわ……」

つまり、自分のブレーキは壊れてしまったって事ですか！？

「待つ……白井……！」

更に物凄い圧力へと変わる、黒子の背後揺らめくオーラ。
もう、真っ黒ですから！

「……ッ！！」

「……柿ピーでも食う？」

……

――瞬間。

ピタリと止まった黒子の動き。

苦し紛れに、目の前に落ちていた柿ピーの袋を手に取り、食べるように進める哀れなツンツン頭。

いや、絶対無理だろこれはっ！？

死亡フラグが確定したかのような空気が、当麻の周囲を包み込む……。

「~~~~ツ!!?」

言い訳が確実に雑すぎた!!
当麻は目を瞑って、いつ気絶させられても大丈夫なように、小さく身構える。

(……………)

来るのは何だ?
背面ドロップキックか?
トルネードスクリュー?
それともコブラツイスト??

「————…??」

(…………あれ?)

しかし、いつまで経っても、拳も、蹴りも飛んで来なかった。

そして……。

「……………良いですわ」

??

「今回は……、それで許して差し上げますの！」

……………？

「今……、何て？」

「ですから！ ……許して差し上げますから、早く食べさせて下さいまし！！！」

……

ええええええっ！！？

意外な展開に、空いた口が塞がらない。
そんなに良いのか！？ ……と。

「早くして下さいまし！」

「あつ……ああ！」

訳の分からないまま、急いで柿ピーの袋を開ける当麻。
中からピーナッツを取り出し、それを黒子の前に差し出す。

しかし気になる。

こんな状況で黒子の顔が……何故か赤い？

「これで良い……」

「……して欲しいんですの」

（へ？）

小声で何かを言いたげな様子の黒子。
どうしよう……。少しそう考えた後に、勇気を出して当麻が尋ねる。

「白井さん……？」

えっと……今、何て言っ……」

「あ、ああ『アーン』って……。

そう言って食べさせて欲しいんですのっ!」

カアーーーーッ!

怒号に似た感じで、いきなり大声を出してそう言う黒子。

俺、今そんな怒らすような事したっけ……?
当麻の悲しきかな。素朴な疑問である。

「ん……じ、じゃあ」

ドキンッ!?

「~~~~ッ!」……」

「ア」

黒子・当麻「ア~~~~ン」……」

パク……。

言われた通りに、黒子の口へピーナッツを運ぶ。

この時、僅かに黒子の唇に当麻の指が触れてしまったのだが……大丈夫だったのだろうか？

「えっと……白井さん？」

恐る恐る顔を覗き込む当麻。
特に何の反応も無かった事が、逆に怖いです。

というより、また何か、変なモノに引火したのでは……！？
そんな、不幸なシチュエーションが頭をよぎってしまう。

「し、……白井？」

……。

「ふえ？」

当麻の声にようやく反応した黒子が、気の抜けた返事をしながら後ろを振り向く。

何だ、嫌な予感がしたのは気のせいか……。そんな悠長な事を考えるのも束の間……。

(・・・)

今度は当麻の顔が固まってしまった。その理由とは……。

「はっ……！？　ってか……え？」

顔赤っ！？

いや、そんな事は正直どうでも良かった。それよりも目立っていたのが……！

「お前……どうしたんだその鼻血？」

「…………えっ？」

タラァー……。

黒子の鼻から流れ出す赤い鮮血。
何故鼻血が出てしまったかというところ……言わずもながら、そういう
事である。

「へっ！？

な、何ですのこれは！」

大慌てで鼻を手で塞ぐ黒子。
顔が再び赤く染まる。

「ほら、とりあえず拭かないと…………」

などと言いながら、ちゃっかり黒子の腕を掴んで鼻血を止めようと
する当麻。

「ちょ…………何触って!?!」

「いや、待て！ 動くなって！」

ガッ！

――カクン。

黒子・当麻「……えっ？」

互いの足が絡み合い、体勢がカクンと崩れる2人。
まるで漫画のような展開に、当麻は自分の不幸アンテナが反応した
気がした……。

((……………))

倒れた先は、狙っているとしたか思えないであろう……。
何故かベッドの上に倒れるのだった。

「わ、悪い……白井」

「……………」

当麻が上、黒子が下になるような形で、重なりあった2人。倒れた瞬間は訳が分からずにいたが、数秒経って互いの目が合うと、色んな事を察知したのか、一気に顔が赤く染まった。

「す、すぐどけっから！」

そう言っつて、ベッドから起き上がろうとする当麻。

……が！

ガシッ……。

「……………はい？」

起き上がろうとした瞬間、いきなり首元に重みが加わった。何が起こったか、すぐには判断出来ず、混乱する当麻。

「いい加減、気づいて下さいまし……」

小さな声で、黒子が語りかける。

よく確認してみると、首まわりに黒子の両腕が巻きついていて……。

「えっ、と……白井さん？」

「上条さん……」。

もう、分かりますわよね？」

何だこの展開！？

当麻がそう思ったのも無理は無い。

グイッ……。

！？

首にまわした腕を自分の方へグッと近づける黒子。

当然、それに押されて、当麻も黒子に引き寄せられる。

「ちよっ……！ まっ待った、しら——！！」

当麻が何かを言いたげであったが、それより先に、黒子の言葉が部屋中を包んだ……。

「わたくしは……、もう限界なんですの……」

「……………ちょッ!？」

「……………その時だった。」

バンッ!

「とうま……!
今帰ったんだよ……」

「ッ！！？」

玄関のドアが勢い良く開かれ、そこから聞き覚えのある声が聞こえて来た。

「こもえが準備したお肉がすぐ無くなっちゃったから、早めに帰って来たんだよ〜」。

どうとうま？ 嬉しい？」

非常にハイテンションで靴を脱ぎ捨ててる暴食シスター。
玄関に靴を置いた後、トタトタと廊下を歩いて来る。

そして……。

「と〜ま」

ニッコリフェイスでリビングの中に入り込むインデックス。

まず目に入ってきた光景は……。
当然であるが……まあ、何と言いますか、ほら……アレですよ。

「や、やあ……インデックスさん」

「……………」

目が合う2人。

確実に空気が変わりました。

「ず、ずいぶんとお早いお帰りで……。
はは……はははっ」

「……………」

インデックスの目に飛び込んで来たのは、か弱い少女の上に覆い被さっている当麻の姿であった。

確実にそれが原因であるが、インデックスの視線が段々と冷たいモノに変わっていく。

ダラダラダラダッ！！

滝のように流れ出る汗が……止まらない！？

真正面から放たれる、殺気に満ちたオーラが、当麻の体から水分を奪っていく。

「とうま……？」

これは一体どういう事なのかな？」

「すみませんインデックスさん。どうか弁解の余地を……！」

ゾクンッ！

「！？」

負のオーラが流れ出ているのは、何も前からだけでは無い……。

「上条さん……」。

どうしてあのチビっ子が『ただいま〜』……なんですか？」

後ろからもっ！？

前と後ろからの挟み撃ち。

当麻の顔が一気に青ざめていく。

「えつと……」

何故か全ての矛先が自分に向いているというこの不条理。

世の中の仕組みに、深く疑問を感じてなりません!!

笑顔で溢れ、他愛の無い会話をする……、そんな日常が欲しかったなあ……。

と、今の状況を確認しながら思う当麻。

（死にてえ……）

色々あるが、とりあえず、今言いたい事は一つだけである……。

「ふ、不幸だあ……」

……である。

「上条さん!!」

「とうまつ!!」

「ぬあああああッ!!!!」

寮内に響き渡る、断末魔のような叫び声……。

最初は驚いていた寮生達も、声の元が当麻の部屋と分かれれば、誰一人として『いつもの事か』と、心配する素振りを見せない……。残念な事に、それが現実である。

当麻が頭を抱える日々は、これから、いつまでも、末永く続く事であらう……。

お気の毒さまです。

と、改めてお灸を添える作者なのですた。

お
わ
り。

番外編？（後書き）

いつも、ご愛読ありがとうございます！

結構、執筆自体が久しぶりなので、気付いたら一万文字超えてました（笑）

中々仕事で手がつきませんが、投稿されましたら、その時は宜しく
願います！！

m（――）m

ビバッ！

黒子！！

（――）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2477o/>

とある科学の空間移動能力者（テレポーター）

2011年10月7日05時14分発行